

63  
2101



始



65  
210

名

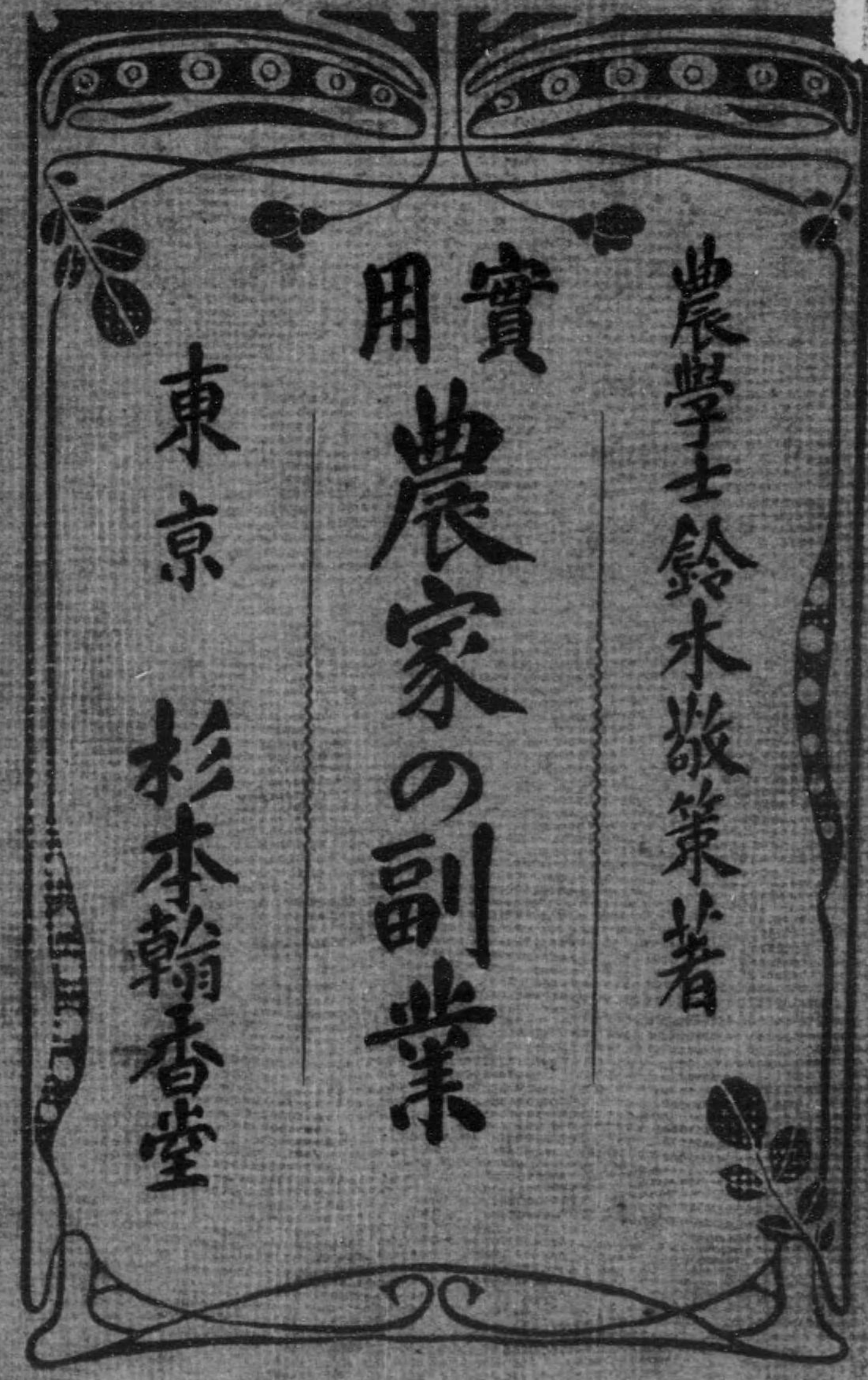
訂 改

農學士鈴木敬策著

實用  
農家の副業

東京

杉本翰香堂



訂 改

農學士鈴木敬策著

實  
用  
農  
家  
の  
副  
業

東京  
杉本翰香堂藏版

大正  
1. 9. 21.  
内交

序

戦後の経営は民力の増殖にあり民力の増殖は農民の富をま  
し資力を涵ふより急なるはなかるべし、しかして農民を富ま  
し農業に資力を與ふるは米麥穀實の主穀農業と相俟ちて養  
畜養蠶養蜂養魚製造蔬菜果樹栽培等の副業を営み土地勞力  
資本の三者をして繁閑相補ひ緩急相應じ所謂利用厚生の途  
を講ずるにあり。本書編述の微意亦實にこゝに存す幸に世の  
農業家たるものその副業の如何なるものなるかを知り之に  
よりて其の富を増し其の資を涵ひ以て戦後の経営を全ふせ

しむることを得ば著者の本懐まことに之に過ぎざるなり。

大正元年初秋

著者しるす

凡例

- 一、本書は、蔬菜・果樹・工藝作物・養豚・養鶏・養兔・養蜂・養蠶・養魚・植産物製造・畜産物製造・果物製造の十二編より成れり。
- 一、本書は、専ら、農家副業の指針たらしめむが爲に編述せるものなり。されば力めて行文を平易にし、理論を避けて、實際に重きをおきたり。
- 一、農家の副業として適切なるもの甚だ多し。されば、本書に洩れたるもの、尙少なからざるべし。そは、他日の再版を期して、増補するところあるべし。

大正元年初秋

著者識

訂改 實用農家の副業

目次

總説

農家の副業とは何ぞや—農家の副業の種類—農家は宜しく副業の撰擇を爲すべし—農家副業の利益

第一編 蔬菜栽培

第一章 通論

第一節 蔬菜園の位置	二
第二節 氣候土質及水利	三
第三節 形狀區劃及方位	三
第四節 肥料	四
第五節 苗木及促成栽培	四

目次



第六節 軟白法……………二〇

第七節 貯藏法……………二二

第八節 蔬菜の類別……………二三

第九節 栽培の要項……………二六

第二章 各論……………二七

第一節 十字科作物……………二七

甘藷—蕪菁—蘿蔔—菘類—わさびだいこん—山葵—  
附記……………二七

第二節 豇科作物……………三五

菜豆—豌豆—蠶豆—鵲豆—刀豆—豇豆—附記……………三五

第三節 繖形科作物……………三九

亞米利加防風—胡蘿蔔—野蜀葵—水芹—塘蒿—附記……………三九

第四節 茄科作物……………四〇

瓜哇薯—蕃茄—蕃椒—茄—附記……………四〇

第五節 菊科作物……………四四

### 第二編 果樹栽培

第一章 通論……………三三

第二節 苗木の植付……………三三

第二節 果樹繁殖法……………三六

實生法—壓條法—根分法—挿木法—接木法……………三六

料理菊—疑冬—苜蓿—萬苣—苦苣—牛蒡—菊芋—附記……………五二

第六節 百合作科作物……………五二

玉葱—百合—薤—葱—韭葱—石刁柏(まっぼうど)—附記……………五二

第七節 胡蘆科作物……………五五

胡瓜—南瓜—甜瓜—西瓜—越瓜及菜瓜—冬瓜—苦瓜—  
扁蒲—絲瓜—附記……………五五

第八節 雜類……………五八

甘藷—青芋—薑—茗荷—紫蘇—甘露子—菠薐草—薯蕷—  
薯—佛掌薯—土當歸—莓—江南竹—蓮—慈姑—附記……………五八

第三節 剪定及整枝……………八六

第四節 果樹の類別……………九一

第一章 各論……………九一

第一節 仁果類……………九一

    苹果—梨—柿—枇杷—榲桲—柘榴—柑橘類

第二節 核果類……………九七

    梅—桃—李—櫻桃—杏—棗

第三節 漿果類……………一〇一

    葡萄—無花果—須具利

第四節 乾果類……………一〇五

    栗

第一章 茶……………一〇七

第一節 品種……………一〇七

第三編 工藝作物栽培

第二節 栽培……………一〇九

第三節 害虫及摘葉……………一一五

第二章 除蟲菊……………一二七

第一節 品種……………一二七

第二節 栽培……………一二八

第三節 收穫及病虫害……………一二九

第三章 薄荷……………一三〇

第一節 用途及品種……………一三〇

第二節 栽培蕃殖……………一三三

第三節 病虫害及刈取乾燥……………一三三

第四章 黃蓮……………一三四

第一節 品種……………一三四

第二節 栽培及採取……………一三五

第五章 人參……………一三六

第一節 產地……………一三六



第二節 栽培及病害蟲……………二七

第六章 ヒカキ 櫛……………二九

第一節 用途及品種……………二九

第二節 栽培及病害……………三〇

第七章 蓼 藍……………三一

第一節 品 種……………三一

第二節 栽 培……………三三

第三節 刈取乾燥及害虫……………三五

第八章 山 藍……………三六

第九章 紅 花……………三八

第十章 蒟 蒻……………三九

第四編 養 豚……………四二

第一章 豚の發育……………四四

第二章 豚の種類……………四五

第一節 亞細亞豚……………四六

第二節 歐洲豚……………四七

第三章 管理法……………四五

第四章 繁殖法……………五一

第一節 選 擇……………五一

第二節 蕃殖用種の特徴……………五二

    牝親—牝親……………五二

第三節 種豚の管理……………五八

    牝親—牝親……………五八

第四節 分 娩……………五九

第五節 母仔豚の管理……………六〇

第五章 成豚の管理……………六一

第六章 豚腴法……………六三

第七章 去勢術……………六五

第八章 食 器……………六五

第九章 年中行事……………一六六

第十章 豚の疾病……………一六八

第五編 養 鶏

第一章 鶏の名稱……………一七一

  第一節 種類の名稱……………一七一

  第二節 前顔の名稱……………一七二

  第三節 羽毛の名稱……………一七三

  第四節 鶏冠の種類……………一七四

第二章 鶏の種類……………一七五

  第一節 肉用種……………一七五

  第二節 卵用種……………一七七

  第三節 卵肉兼用種……………一七八

第三章 鶏 舎……………一八四

  第一節 土地の撰定……………一八四

第二節 鶏舎建築の要旨……………一八五

第三節 構造及備付品……………一八六

第四章 孵化用卵の撰擇及貯藏法……………一八九

第五章 孵卵法の種類及利害……………一九〇

第六章 天然孵卵法……………一九一

  第一節 準 備……………一九二

    母鶏撰擇—孵化の期節—一窠の卵數—孵卵の場所—窠

  第二節 就窠中に於ける管理……………一九四

第七章 天然育雛法……………一九六

第八章 人工孵卵法……………一九九

第九章 人工育雛法……………二〇一

第十章 雛の雌雄鑑別法……………二〇三

第十一章 飼 料……………二〇五

第十二章 去勢術……………二一〇

第六編 養 兔

第一章 種類……………二二二

第二章 繁殖管理……………二二七

第三章 飼養法……………二二九

第七編 養 蜂

第一章 種類……………二二三

第二章 養蜂場……………二三五

第三章 蜂の三性……………二三五

第四章 蜜蜂の生産物及食料……………二三〇

第五章 種窠と蜂窠……………二三三

第六章 窠箱……………二三三

第七章 窠礎……………二三六

第八章 肝要なる器具……………二四〇

第九章 分封(一名子別れ)……………二四三

第十章 採蜜採蠟……………二四五

十一章 年中行事……………二四六

十三章 害敵……………二五一

第八編 養 蠶

第一章 蠶の性状……………二五五

第二章 種類……………二五六

第三章 養蠶の注意……………二五九

第四章 催青法……………二五九

第五章 掃立法……………二六四

第一節 紙掃法……………二六六

第二節 糖掃法……………二六七

第六章 飼育……………二六八

第七章 給桑……………二七五

第八章 剉 桑……………二七六

  第一節 方形式剉桑……………二七六

  第二節 長方形式剉桑……………二七九

  第三節 三角形形式剉桑……………二八一

第九章 貯 桑……………二八一

第十章 眠起取扱……………二八三

第十一章 除沙分箔……………二八六

第十二章 上 簇……………二八八

第十三章 收 繭……………二九〇

第十四章 殺蛹貯繭……………二九二

第十五章 蠶種製造……………二九五

  第一節 普通採種法……………二九九

  第二節 框製採種法……………二九九

第十六章 蠶種検査……………三〇一

  第一節 肉眼鑑定法……………三〇一

第二節 器械検査法……………三〇一

母蛾検査—卵粒検査

第七章 蠶種貯藏……………三〇四

第八章 洗 種……………三〇五

第九章 蠶室・蠶具……………三〇九

第十章 夏秋蠶……………三一二

第十一章 四化蠶……………三二七

第十二章 乞食蠶……………三二八

第十三章 野 蠶……………三三〇

第十四章 蠶 病……………三三一

第九編 養 魚

第一章 養魚の種類……………三三四

第二章 池 養……………三三五

第三章 飼養と害敵及成長の度合……………三三九

第四章 田 養.....三三〇

第十編 植産物の製造

第一章 穀粉製造.....三三三

第一節 米 粉.....三三三

第二節 寒曝粉.....三三四

第三節 麥 粉.....三三四

第四節 小麥粉.....三四

第五節 玉蜀黍粉.....三五

第六節 燕麥粉.....三五

第二章 雜粉製造.....三五

第一節 蕎麥粉.....三五

第二節 甘藷粉.....三六

第三節 苜蓿粉.....三六

第三章 碎穀製造.....三七

第一節 挽 割.....三七

第二節 平 麥.....三八

第四章 澱粉製造.....三八

第一節 馬鈴薯澱粉.....三九

第二節 葛澱粉.....三九

第五章 晒餡製造.....四〇

第六章 麵類製造.....四〇

第一節 饅 餛.....四〇

第二節 素 麵.....四一

第三節 麩.....四一

第四節 麵 包.....四一

第七章 麥芽製造.....四二

第八章 麴製造.....四二

第一節 米 麴.....四二

第二節 麥 麴.....四三

第九章	水飴製造	三五〇
第十章	甘酒製造	三五〇
第七章	醬油釀造	三五一
第七章	味噌製造	三五二
第三章	納豆製造	三五四
第四章	豆腐製造	三五四
第五章	凍豆腐製造	三五五
第六章	油皮製造	三五六
第七章	豆乳製造	三五六
第六章	蒟蒻製造	三五七
第九章	乾瓢製造	三五八
第二章	煎茶製造	三五八
第二章	薄茶製造	三六〇
第三章	藍製造	三六一

第一節 藍 玉……………三六三

第二節 泥 藍……………三六六

第三節 印度藍……………三六七

第三章 臘脂製造……………三六八

第四章 洋紅製造……………三六九

第五章 黃櫨製造……………三六九

第六章 麥稈製造……………三七一

第七章 人參製造……………三七二

第八章 黃蓮製造……………三七五

第九章 除蟲菊劑製造……………三七六

第十一編 畜産物の製造

第一章 牛酪製造……………三七七

第二章 乾酪製造……………三八一

第三章 煉乳製造……………三八一

第四章 鹽豚製造……………三八三  
 第五章 燻製腿造……………三八五  
 第六章 燻肉製造……………三八六  
 第七章 脂肪製造……………三八六  
 第八章 氷囊製造……………三八七  
**第十二編 果物製造……………三八八**  
 第一章 果實調理の心得……………三八八  
 第二章 調理したる果實の貯藏……………三八九  
 第三章 萃果……………四九〇  
   第一節 調理及貯藏……………四九〇  
   第二節 鐘詰……………三九二  
   第三節 シェリ……………三九三  
   第四節 干萃果……………三九四  
 第四章 柿……………三九五

  第一節 白柿及烏柿……………三九五  
   第二節 醃柿……………三九六  
   第三節 串柿……………三九七  
   第四節 烘柿及包柿……………三九七  
**第五章 無花果……………三九八**  
   第一節 罐詰……………三九八  
   第二節 瓶詰……………三九九  
   第三節 シヤム……………四〇〇  
   第四節 マルマラート……………四〇〇  
   第五節 グリート……………四〇一  
   第六節 プッディング……………四〇一  
   第七節 綠果砂糖漬……………四〇一  
   第八節 砂糖漬……………四〇二  
   第九節 生姜糖漬……………四〇二  
   第十節 凍無花果……………四〇三

第十七節	無花果菓子.....	四〇四
第六章	須具利及房すぐり.....	四〇四
第一節	貯藏法.....	四〇四
第二節	罐詰.....	四〇五
第三節	シヤム.....	四〇六
第四節	シエリ.....	四〇六
第七章	桃.....	四〇七
第一節	調理及貯藏.....	四〇七
第二節	罐詰.....	四〇七
第三節	シヤム.....	四〇八
第四節	シエリ.....	四〇九
第五節	干桃.....	四〇九
第八章	李類.....	四一〇
第一節	調理及貯藏.....	四一〇
第二節	罐詰.....	四一一

第九章	櫻桃.....	四一一
第一節	調理及貯藏.....	四一一
第二節	罐詰.....	四一一
第三節	シエリ.....	四一二
第十章	葡萄.....	四二二
第一節	シヤム.....	四二三
第二節	干葡萄.....	四二三
第十一章	楡棹.....	四二四
第一節	調理及貯藏.....	四二四
第二節	罐詰.....	四二五
第三節	シヤム.....	四二六
第十二章	橙.....	四二六
第一節	フラウリング.....	四二六
第二節	シヤム.....	四二七
第十三章	熨斗梅.....	四二八



第七章 莓及樹莓.....四九

第一節 調理及貯藏.....四九

第二節 罐詰.....四九

第三節 ロヤム.....四〇

第四節 シェリー.....四〇

第五節 舍利別.....四二

第六節 醋漬.....四二

訂改實農家の副業目次終

訂改實農家の副業

農學士 鈴木敬策著

總說

總說

農業は一の生産なり、されば出來得るだけ最少の支出を以て最大の收得を擧ぐるを以て之が原則と爲さるべからず、換言すれば、土地の使用宜しきを得せしめ、決して之を空地の儘に放棄し、若くは連作に地力の減衰を顧みざるが如き事なからしめ、最小の地積より可及的最大の收益を得るに勉むると同時に、一方勞力の利用分配に深く意を用ひて、片時と雖も、拱手徒勞遊惰に空費することなく、四時間斷なく其の活用を計り、以て勞力の効果をして絶大ならしむるは、蓋し農業經營上の一日も忽せに附すべからざるは肝要の事に屬す。

然らば土地の使用宜しきに適し、勞力の按排其當を得、以て農業經營の

總說

原則に對し、毫も遺憾なからしむる策は果して如何と問はば、余輩は農家をして宜しく適當の副業を經營せしむべしと謂ふに躊躇せざるなり、然り而して、

### 農家の副業とは何ぞや

抑も副業は主業と相對して呼稱せらるゝ性質のものにして、主業の餘暇、主業の傍らに經營せらるゝ場合ならざる可からず。彼の瓦斯會社が散炭を製造するは副業なり。鐵道會社が旅館を兼業するも亦た副業なり。其他製銅の硫酸製造に於ける酒精釀造の養豚に於けるは、皆な其實例ならざるはなし。單獨に分離して副業なるもの一も之れあるなし。要するに其事業の主要の目的となるは主業にして、此の主業に對し補助として、閑散の勞力を利用し、剩餘の土地機械等を利用せしめて、以て其事業に可及的最大の効果を擧げしむる目的を有するを副業と稱す。されば農家の副業に於ても亦た然り、風土氣候經營法の如何に由りて、農家の主業と副業とは自ら其趣を異にし、甲地に於て純然たる傍手間の

農家の副業とは何ぞや

農家副業の種類

農家副業の種類

副業なるものも、乙地にては立派なる主業として經營せられ。又た此處に主業として隆盛を極むるも、彼處に於ては副業として僅かに其面影を止むるに過ぎざる等、其實例は常に吾人の認識する處なり。彼の上毛福島地方に於ける養蠶業は純然たる主業と見做し得べきも、奥羽九州等に於ては單に副業に過ぎず。東京大坂の如き大都會の附近にては蔬菜栽培は一の主業として成功すれども、かゝる消費地を控へざる地方に於ては、唯だ僅に副業たるに止まるのみ。故に農家の副業は其農家經營の如何、風土氣候の相違、地方の狀況に依りて、各地其趣を異にし、敢て農家の副業なる單獨特殊の業務あらざるを知るべし。

### 農家副業の種類

前項に述べたる如く、農家の副業は相對比較の呼稱にして、獨立特殊の業務にあらざるも、由來吾邦の農業は穀物を主として栽培するにあり、假令一地方若くは一局部に於て、穀物以外の特殊なる作物の栽培又は

事業の經營を主業とすと雖も、吾邦農業の全斑を達観する時は、農家の主業は穀物栽培にありと推斷するも、敢て不當ならざるなり。即ち本書に於ては副業を定むる、比較觀察の標準を主穀農と定め、而して之れより觀たる他の業務を總て副業として講述せり。故に副業の種類は宏汎にして其數夥多なり。今之を蔬菜、果樹、工藝作物栽培、養豚、養鶏、養兔、養蜂、養蠶、養魚、植産物製造、畜産物製造、果物製造の十二編に類別せり。然れども之等の内地方によりては主業として成功し、副業の性質を失ひたるもの亦尠ならず。或は其業務の性質上主業に近きものなきにあらざるも、孰れも皆其經營方法の如何に由りては副業として、頗る適當せるものなり。平馬、羊の飼養は或は意味に於て副業たらざるにあらざれども、規模大にして資本を要すること少なからず。又た特殊の技術を要するものなるを以て、副業としては吾邦現今の農家には全く不適當なり、故に全然之を省略せり。

### 農家は宜しく副業の選擇を爲すべし

農家は宜しく副業の選擇を爲すべし

前述の如く、農家の副業は其種類極めて多し、或は風土氣候の關係上、何れの農家にも之を應用して、効果<sup>きこう</sup>を擧ぐるは難し。又副業中其生産物を市場に販賣<sup>はんばい</sup>して以て収益を得るものと、農家が此の生産物を直ちに自家用に供し以て、他よりの購求<sup>かうまう</sup>を省くことを得るものとの二種に區分することを得べし。

故に農家は土地の狀況、氣候の如何、主業經營の狀態、市場の需要、及び家族の關係等に鑑み、熟考研究の上、その適切なる種類を選擇せざるべからず。

### 農家副業の利益

農家副業の利益

農家の副業を營むによりて、受くる利益は有形無形二つながら莫大なるは、世の既に知れる處にして、敢て贅言<sup>ぜいげん</sup>を費すの要なきに似たれども、左に其主要なる點を摘記すべし。

#### 有形の利益

一、國家の富を増加し、地方の購買力を上進せしむ。

農家副業の利益

副業によりて收得したる生産物は即ち農産物にして、全國五百餘萬戸の農家が戸々に生産する些少の物産は之れを綜合すれば決して輕視すべき額に非ず。従つて地方に於ける農家の購買力の上進すべきは、明白のことなりとす。

### 二、農業をして經濟的組織的の經營たらしむ。

由來吾國の農家は經濟的思想を缺き、且つ農業の經營に於ても亂雜にして秩序なく、永遠の計畫あるなく、たゞ目前の利益に吸々として、終局の利益を識らず。所謂一文奢みの百知らず的にして、終生水呑百姓に之れ甘んずる如きは、實に吾邦農家一般の通弊なり。然るに一度副業の利益を認め、之を實行するに於ては、是に農業は經濟的となり、組織的秩序あるものと化し、初めて生産の原則に適合し、收益昔日の比にあらざるべし。

### 三、農實の經濟を潤澤ならしむ。

副業は素より主業の剩餘を利用して、傍手間に行ふものなれば、之れによりて得たる收得は、從來に比して農家の餘分の收入な

り。其經濟を潤ほすや論なきなり。

### 四、老幼婦女に各々適當なる分業を與へ、勞力の効果をして大ならしむ。

從來の主業たる主穀農は、性粗笨にして筋勞を要すること、大なるを以て男子壯年者専ら之れに従事し、老幼婦女子は大體に於て之れに適せず。故に一家の内勞力に剩餘を生じ居るは、明白の事實なりとす。若し之等老幼婦女子の剩餘の勞力に適當なる副業を撰擇して以て之れに業務を與へんか、農家に於ける勞力の効果を増大せしめ、其收益決して尠なからざるべし。

### 五、地方人口の消散を防遏し、國家組織を健全ならしむ。

之れ實に國家社會政策として、重要な問題にして、苟くも爲政者の等閑に附すべからざる事なりとす。文明の餘弊として、都會人口の増加、地方人口の消散は、或る程度迄免かるべからざる事なりと雖も、人心の輕浮なる多くは都會生活の華美を夢み、地方の田園生活を嫌惡する結果として、地方人口の急激なる減少、都

會人口の激増を來しつゝある傾向は、深く考案を要すべき緊要なる事に屬す。蓋し其原因たるや、尠なからざるも、要するに地方の田園にありて、職業を得るに苦み若くは水呑百姓として卑賤の生活に甘んせざる向上の念とに歸因するもの、甚だ多かるべきなり。

之れ即ち國家組織の中堅たる農民の減少を意味するものにして、國家組織を根柢より萎靡ならしむるに等し。故に副業を營ましめて、以て田園生活に甘んせしめ、地方人口の消散を防遏するは、刻下の急務なりとす。

無形の利益

無形の利益

一、一家團樂の樂を助長せしむ。

副業は一家を基礎とし、多くは家族團樂の間に行はるゝ性質のものなるを以て、遠く家庭を出で、職を求むる要なし、故に自然に一家談笑、和樂の裡に業を營むを得べし。

二、獨立自治の精神を涵養す。

副業は老幼婦女子に向つて、適切なる分業を興ふるものなれば、各自其責任を明かにし、又た自ら業務の畫策に思慮を廻らすに至るべし。

三、遊惰放逸の弊風を悛め、勤勉力行の美風を養ふ。

遊惰放逸の弊風は人類先的の精神にあらず。爲すべきの職業なく、又は心身に餘裕あるに由りて、醸成せらるゝ後天的の慣習なれば、副業を興へて以つて心身の餘裕を善用せしめざるべからず。

四、閑居不善を爲す弊害なからしむ。

小人閑居すれば不善を爲すと。社會の大部分は小人なり、閑居より來る弊害の莫大なるは、決して國家の大問題ならずとせず。而して農家に於て一層其甚しきを觀るなり。乃ち副業は閑居を改めて、勤勞の人たらしむるものなり。

五、恒産を興へ恒心有らしむ。

地方人口の消散して都會人口の膨大するは、農家に恒産なく從

て恒心なきを以て都會に出で、産を得んと欲するに外ならざるべし。副業を奨励すれば農家に恒産を與へ従つて恒心を有せしむることを得べし。

#### 六、農業に對し好愛の念を起さしむ。

凡て人は自己の性狀力量に適せざる業務に對しては、決して趣味を感ずることなく、却て嫌惡の念慮を發生するものなり、又其業務の單純にして變化なきは、人をして倦怠に陥らしむ。されば農業に於ても一家の各自に對し、適當なる分業を與へ、而して業務に變化あらしむるに於ては、自然に農業に對し、一種の趣味を覺え、農業の快樂を知得せしむるに至るべし。之れ實に副業を措て他に求むべからざるなり。

以上數項に亘りて叙述したる如く、農家の副業は直接間接有形無形に農家に對し、國家に向つて裨益する處、如何に甚大なるを推知するに足る。農家は宜しく之を實行せずして可ならんや。

## 第一編 蔬菜栽培

蔬菜園藝は、農家の副業として極めて大切なるものにして、農家の經濟を圓滑ならしむるもの、恐らく、この右に出づるものなかるべし。

即ち蔬菜園藝を行へば、從來農家が、一毛作若しくは二毛作を行ひたる土地より、能く三毛作乃至五毛作を擧ぐるに難からざるなり、されば通例農家が、五反歩の地積より收得するの利益を、僅々一反歩内外の地積より獲得し得べきものと謂ふべきなり。

加之ならず、蔬菜は、吾人々類の生活上、主要なる副食物とし一日として食膳に上らざるはなし、これを以てその價低廉なるも、他の需要の少きものに比すれば、其利潤遙に多く、特に都會に近き農家の副業として、實に適切なるものなりと信す。又假令都會に遠き農家にも、交通機關發達し、且つ其運送費の低廉なる所に於ては、利潤を得ること亦決して難事にあらざるなり。

### 第一章 通論

#### 第一節 蔬菜園藝の位置

蔬菜園藝の位置

蔬菜園を開設するには、其産物の販賣に便にして、勞力及び肥料等をも得易き大都會の近傍をよしとす。蔬菜は貯藏に堪へざるのみならず、或種類によりては收穫後數時間を経れば、著しく香味を損するものあり、しかのみならず市場を遠ざかるに隨ひ、運搬にも多大の勞費を投せざるべからざるの不利あり。

我國著名の蔬菜産地が、悉く都會附近に存するは皆これに因てなり、而して蔬菜中、尤も利益の大なるものを早生種とす。殊に寒國にては一層利益多し。

栽培者の心得

尙は一般蔬菜栽培者の心得べきことは、其術によりて巧みに天候を左右し、寒氣凍冽、後庭の雪未だ消えざるにす、でに瓜類を市場に出す等、常に季節以外の珍品佳物を産出するにあり。

氣候土質及水利

#### 第一節 氣候土質及水利

作物を培養せんと欲せば、氣候の適否を考へざるべからず、然らざるに於ては培養法如何に巧妙なるも、利益少きの憾あるべし。されど蔬菜類は其種類頗る多きを以て、一概に氣候の關係のみを論ずること能はざる場合尠なからず。

不流動水は有毒の酸類を念有す

土質も亦た然り、沖積土は一般に適し、乾固若しは陰氣にして濕りたる地は概してこれを忌む。而して水利の便を缺く處は不適當なりとす。蔬菜園の灌漑水は河水を最もよろしとす。井水之に次ぎ、雨水亦た頗るよろし。之に反して池水の如き常に流動せざるものは、往々有毒の酸類を含有するを以て、斷じて之を避くべし。

#### 第三節 形狀區劃及方位

形狀區劃及方位

菜園の形狀區劃及び廣狹は作業上に至大の關係を來すを以て、資本・勞力・土質・氣候・品種並に市場の遠近等に鑑み、嚴密に確定する事肝要なり。菜園は北方を閉塞し、西南又は正南に面せる處を撰むべし。然れども地

勢上斯かる方位を得る事能はざる場合には、東北及び正北面に樹木を栽植して寒風を防がざるべからず。又菜園の周圍には、生籬或は灌木の果樹を植え、其間にも長幹の果樹を定植すべし。區劃は出來得べき丈け井然たらしめ園地には縦横に幅三四尺の通路を設け、園地乾燥なれば園路の地よりも小しく高くし、濕潤なる地には之を低くして園地を高くすべし。園路は平坦なるよりも寧ろ凸形なるを可とす。

#### 第四節 肥料

園藝作物は普通作物よりも周到なる保護管理を要するものなるを以て、之が肥培法に就ては十分研究するを要す。然れども其詳細は肥料學に譲り、此處には唯だ普通一般に使用せらるる肥料の名稱を記載するに止むべし。即ち園藝肥料には、人尿、尿肥、鶏屎、糞渣、粕類、魚肥、骨粉、燐肥、木灰、石灰、アンモニア、及び硝酸鹽類、加里鹽類等なりとす。

#### 第五節 苗床及促成栽培

苗床及促成栽培

苗床及び促成栽培は蔬菜培養上必要缺くべからざるものなりとす。苗床設置の巧拙は培養全般に影響を及すものなれば、大に熟練の技術を要すべく、學理の應用と實地の習練によりて其効を全うするものなり。苗床設置の要は風土の關係、作物の性質及種類に關連すれども、亦經濟上に關する事大なり。即ち本邦の如き勞力に集約なる農業法に在りては、及ぶ丈け苗床を利用して圃地の効果を大ならしめざるべからず。苗床に二種の別あり。一を冷床と呼び一を温床と稱す。冷床は専ら外温を利用して人工的發熱物を用ひず、温床は主として人工的發熱物を用ひ外温と相俟つて苗の生育を助長せしむるものなり。温床は冷床に比して温度高きが故に、促成栽培用に最も適す。

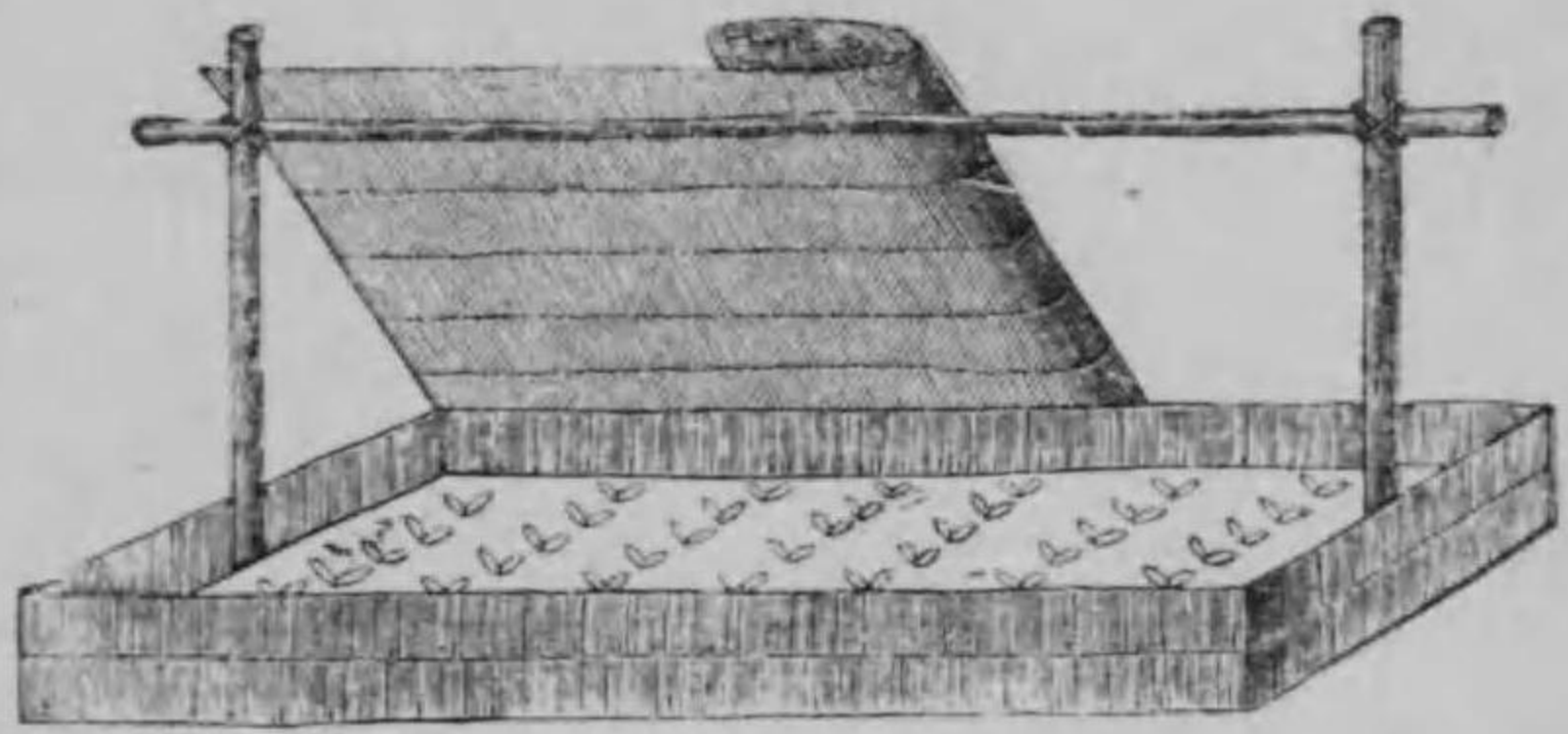
冷床

冷床 都會附近の地にして、地代高き僅少なる地積を利用し、多大の生産物を收得して多額の収益を得んと欲する際に冷床を設け、通常農家の播種せざるに先ちて、珍稀の蔬菜を市場に出す事は最も妙なる方法なりとす。冷床の構造法は、日光の透射良好なる南向きの地を撰び、十分耕して底土を踏みつけ、之に篩ひ分けたる細微の土を盛り、原



冷床

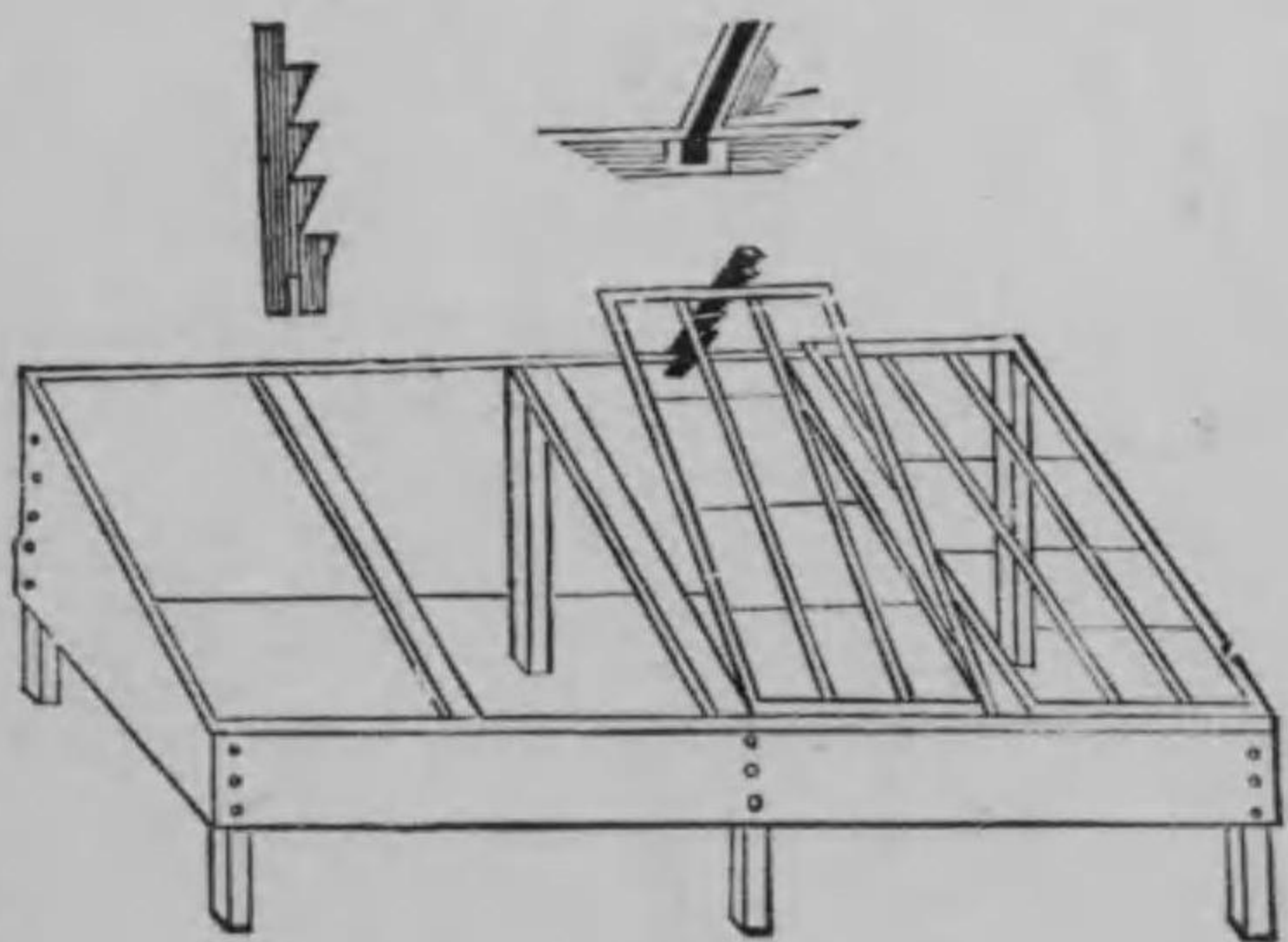
温床



肥を施し、更に其上に肥沃なる篩土を被ふべし。而して水分の蒸發乾燥により損傷を被り易き種類には日覆を爲し、又風雨水の浸入を防ぎ、防寒用として、藁稈、蘆葦の類にて周圍を圍み置くべし。

温床は最も進歩せる育苗法と謂ふ

べく、此の法には或は人為の温熱物を用ひ、或は酸酵熱を利用し、或は蒸氣熱を加へ、或は又烟管烟筒を引きて暖氣を通ずる等種々あれども、酸



高設温床

酵熱を利用するを最も普通の法とす。温床を構成せんと欲せば、乾燥温暖の地にして、北方は閉塞し、南方は開放せる所にして朝夕能く陽光の透射する場所たるべし。蔬菜類中温床内に育苗せらるゝものは、茄、蕃茄、塘蒿、胡瓜、南瓜、冬瓜、系瓜、蕃椒、甘藷等にして、胡瓜、西瓜、越瓜、菜瓜等も、時に温床内に養成せらるゝ事あり。温床は其構造に由りて、高設温床及び低設温床の二種に分つ。

高設温床 農家の通常慣行せる法は、適當の地を撰びて、南北五尺東西適宜の床地を設け、之を掘り下ぐると六寸許り、尙ほ一層叮嚀にせんとする場合には、其周圍を幅四五寸位、深さ一尺程に掘り下げて凸形の溝とし、一圓に固く酸熱物を盛り、其上に五寸ばかり細土を盛るべし。周圍には藁稈を圍繞し、北側を高くし、二尺―二尺五寸、南側を低くし、一尺五寸内外、光線と温熱とを受け易からしむべし。而して種子及稱苗を保護する爲め覆を爲す事肝要なり。  
東京府下葛飾郡砂村地方に慣行せる高設温床は、頗る完全なるものなり。其法、幅六尺片覆床、又は八尺(兩覆床)にして、長さ適宜の床地を選び、市

街の塵埃を堆積すること二尺七寸位、之を固く踏みつけて十分に水を注ぎ、前年使用せし腐朽土の篩ひたるものを三寸の厚さに盛り、更に水を注ぎて葉を被ひ、數尺を隔て、油障子を覆ふ。周圍は藁蓆菰の類を繞ひ、塵埃の上部に圍繞物を突出せしめ、床場の四邊は高さ一丈餘りの藁篋にて圍繞す。

## 床内の温度

斯くすれば温床内の温度は大抵一週日内外にて、漸く適當の温度を保つが故に、則ち此時に至りて播種を行ふ。此苗床によれば、毎年一月上旬より、菜豆、豌豆、胡瓜、甜瓜、冬瓜、茄等を栽培し、三月下旬には已に收穫したるが故に、其利甚だ大なり。

砂村一般に行ふ法は、五月の交に至り、床場にて育ひたる蔬菜類を通常の菜園に移植す。即ち蔬菜の一半期は床上に培養せられ、他半期は圃地に栽植するものにして、最も早く採收し得る良法なり。

京都附近の速成栽培用高設温床は、南北一間半、東西十間の地を五寸位掘り下げ、藁屑又は新鮮なる馬糞を固く散布し、其上に最も良好なる肥土に木灰又は塵土を混和したるものを被ひ、日覆をなす。此温床にて育

## 低設温床

苗をなすものは他の地方にも少なからず。

促成栽培を爲す時は、甘藍、胡瓜及び茄の如きは五六回移植を行ひて苗床を替ふる必要あり。然らざれば苗は徒らに長じて、軟弱なるものに變じ、好結果を得る事能はざるものとす。然して高設温床法は、床地の全半地面に突出するを以て、折角の發熱を放散せしむるの患あり。故に多少勞力と費用とを要すべきも、寧ろ第二の低設温床法を優れりとなす。

低設温床 高設温床よりも深く床地を掘り起し、厚く醸熱物を埋没し、床地をして地面より低くからしむるものを低設温床と稱す。高設温床に比して費用と勞力を要する事多大なるも、熱氣の放散を防ぎ、温度を制節し得るの利頗る大なり。位置は牆壁の南側にして、日當よき處を選び、之に東西四間、南北四尺、深さ二尺の溝を穿ち、四隅に角杭を打込み、内壁に板框を据付く。框は北側を三四寸位、南側を二寸位地面に出でしめ、日覆障子、又は硝子覆を設くるに便ならしむ。溝の底には腐熟せんとする厩肥を詰め、後ち落葉を被ひ、其上に尙ほ新鮮なる馬糞と落葉とを交互に堆積しめ、充分に踏み固めて一尺五六寸の厚

さとなし、二三日間其儘に放置して、發熱の均一を待つべし。  
 溫度略定まらば、腐熱せる厩肥を粉砕せるものと細土とを等分に混和し、これを厚く篩ひかくべし。温床内の溫度は、日中は七八十度の間に止め、夜間は尖くも六十度を下るべからず。而して温床内に於て促成栽培を成さんと欲せば、嚴重に溫度を一定するを要す、されば初めの五六日間は絶えず溫度を檢査するを可とす。萬一溫度不足ならば、四隅の杭を高めて框を持上げ、床内の氣層を大にし、熱量を多からしむべし。尙ほ之と共に、框の外圍を二尺幅に少しく掘り下げ、將に醗酵せんとする厩肥を積み込むべし。斯くせば必ず床内の熱量を増加するを得べし。

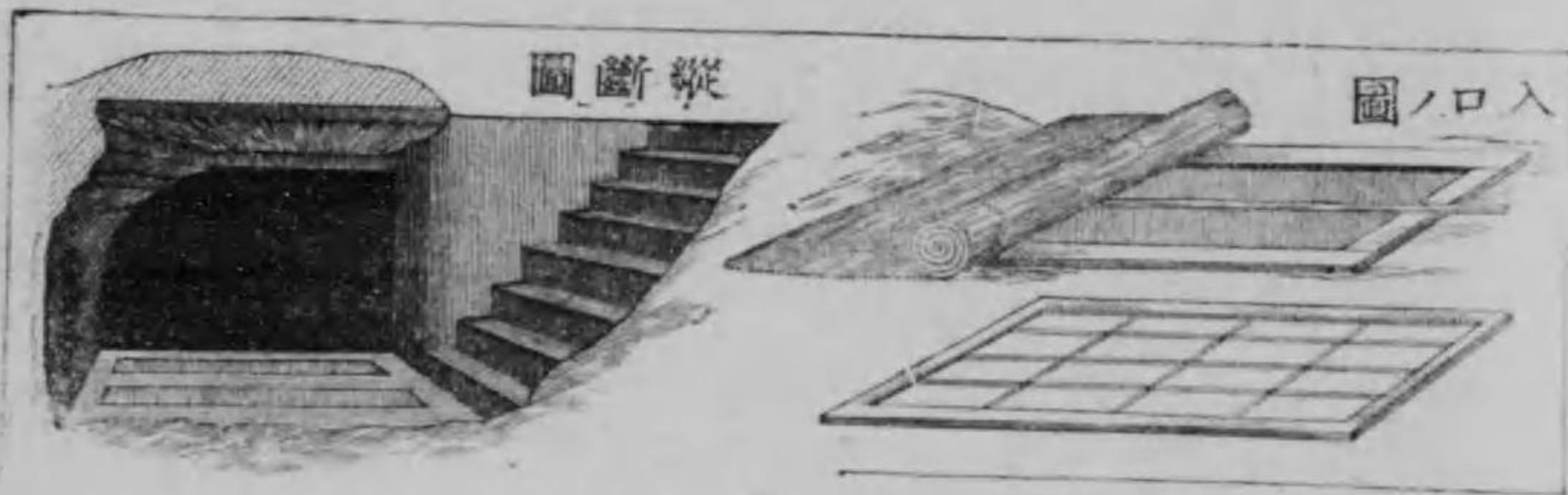
### 第六節 軟白法

軟白法とは、植物の含有せる葉綠素を消却して、綠葉青莖を白色に變せしめ、併せて植物の組織を柔軟ならしむる法を謂ふ。通常野蜀葵、塘蔞、葱、青芋、石刁柏、土當歸、茗荷、薑等の蔬菜類に適用す。其法、季節及び種類に因りて同一ならざれども、今一般に亘る方法を概述すべし。

軟白法

地下軟白室構造法

芽菜



軟白室

普通農家にて行ふ法は、温暖なる場所を選び、北側には屋根圍をなして寒氣を防ぎ、東西に巾一尺七八寸、深さ一尺一二寸、長さ適宜の溝を鑿ち、厩肥堆肥、黃糠等を八寸位埋め込み十分踏固めて後ち細土を入れ、軟白せんとする蔬菜を採り、根部を水に浸して之れに並置して土を覆ひ、その上に粗殼又は落葉を覆ひ、葉莖の類を掛けて溫度を保たしむべし。斯くして保護管理を忽せにせざれば、三四日位に軟白すべし。通常之を芽菜といふ。

良好なる軟白室は、土中を掘り下げて設くるものにして、かくすれば日光を遮るに便なるのみならず、溫度の發散を防ぎ、寒中と雖も能く高温を保つ事を得。

地下軟白室を造るの法は高燥にして湧水又は

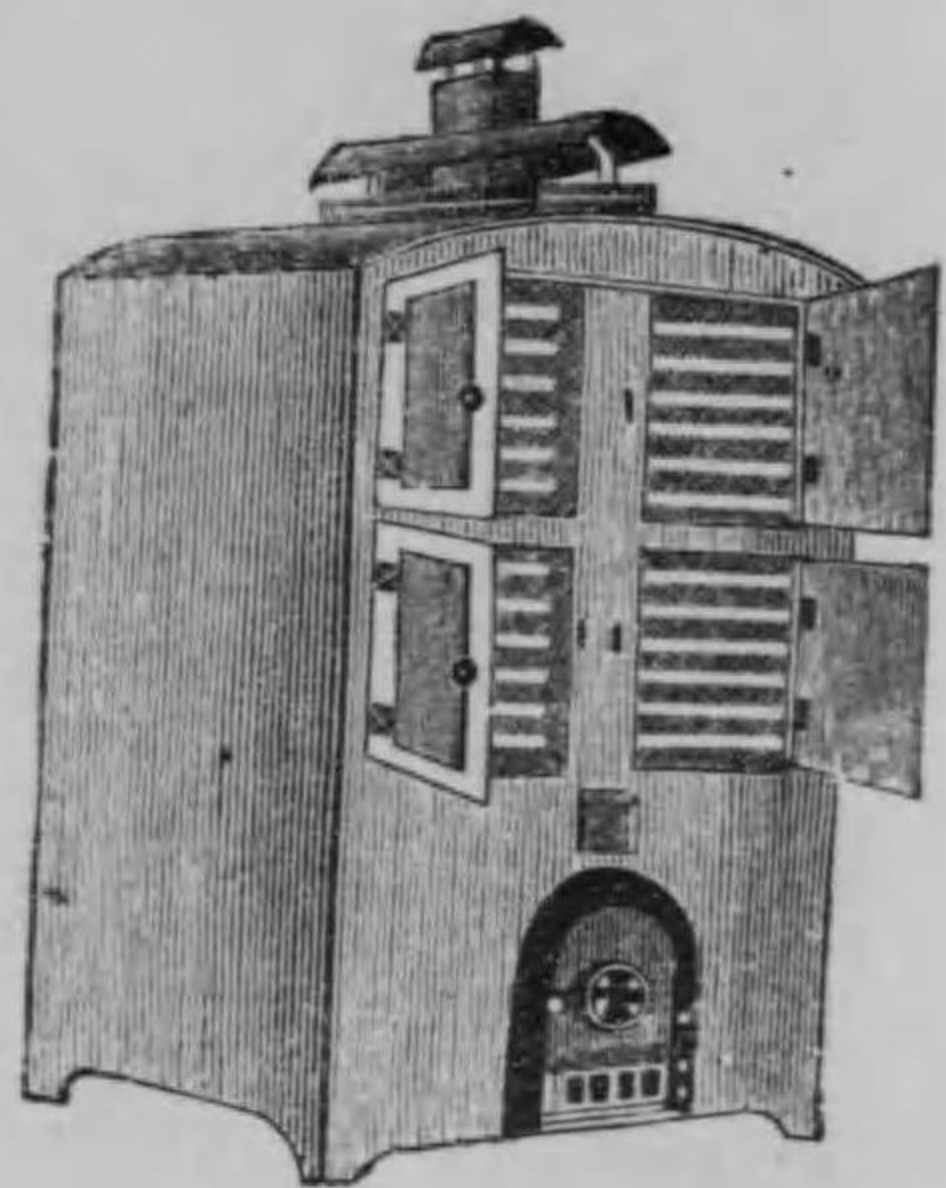
崩土の患なき地に入口を南方に取り、斜に北方の地下に、帆布を投げたる形に孔を掘り下すべし。孔の大きさは人をして漸く直立し得る位とし、孔底と中央及周圍に、一尺巾の道路を作り、左右に軟白に用ゆる床地を設けて二尺位の深さに醸熱物を踏み入れ、更に細土を節ひ掛けて、軟白用の蔬菜を植うるなり。出入には斜に階段を設け、入口には板戸を渡し、温度の低減を防ぐと共に日光の透射を防ぐべし。此種の軟白室は、ただに軟白用を爲すのみに止まらず、又以つて蔬菜及び果樹其他の貯藏室に代用するを得可し。

### 第七節 貯藏法

貯藏法

戦時は勿論、平時と雖も蔬菜を乾燥貯藏する必要あり。蔬菜を乾燥貯藏せんと欲せば、先づ其酸化と醗酵を防がざるべからず。従來我國に行はるゝ貯藏法は、彼の干瓢、干大根の如く、主に陽光に曝乾せしめたるものなるも、要するに此法は良法なりと云ふを得ず。即ち晴天常に連続せば、他に故障なきも、萬一降雨に逢ふ時は、たゞに品位を下劣ならしむる

乾燥器使用法



乾燥器

のみならず、又食用に堪ふる事能けざるに至らしむるを以てなり。歐米に於ては上圖に示せる如き乾燥器を用ふ。此器は下部に窠ありて炭火により熱を送るべき仕掛なり。上段には數段の棚を架し、抽斗を附し、底部に鐵網を張り、網

上には乾燥すべき蔬菜或は果物を並列せしめ、華氏百二三十度乃至百五六十度の温熱を加ふるなり。加熱の折には、時々上下の抽斗を交換せしむるを忘るべからず。此の法によれば、其の色毫も變褪せず、其狀恰も新鮮なる態にて貯藏し得べし。此の他貯藏法には、罐詰法、鹽造法、窖室貯藏法等あれども、茲には之を省く。

### 第八節 蔬菜の類別

蔬菜類を分つて、葉菜類、根菜類、及鹹菜類となす。

蔬菜の類別

葉菜	根菜	瓜菜	穀菜	類別科
葉菜類に屬するものは、 甘藍、石刁柏、土當歸、苜蓿類、京菜、大芥、蒿苣、苦苣、苜蓿、 塘蒿、菠薐草、水芹、疑冬、葱、韭菜、柴蘇、藜蘆、料理菊、江 南竹、	根菜類に屬するものは、 蘿蔔、蕪菁、胡蘿蔔、亞米利加防風、午莖、甘藷、瓜哇薯、青芋、 薯蕷、佛掌薯、菊芋、甘露子、薤、葱頭、百合、薑、山葵、ワサ ビ、ダイコン、蓮、慈姑、	瓜菜類に屬するものは、 西瓜、甜瓜、南瓜、 茄、蕃茄、苺、蕃椒、 越瓜、菜瓜、冬瓜、絲瓜、苦瓜、扁蒲、	穀菜類に屬するものは、 豌豆、菜豆、蠶豆、鵲豆、刀豆、豇豆、	第一、十字科作物 (一)甘藍 (二)蕪菁 (三)蘿蔔 (四)苜蓿類 (五)京菜

葉菜類に屬するものは、甘藍、石刁柏、土當歸、苜蓿類、京菜、大芥、蒿苣、苦苣、苜蓿、塘蒿、菠薐草、水芹、疑冬、葱、韭菜、柴蘇、藜蘆、料理菊、江南竹、

根菜類に屬するものは、蘿蔔、蕪菁、胡蘿蔔、亞米利加防風、午莖、甘藷、瓜哇薯、青芋、薯蕷、佛掌薯、菊芋、甘露子、薤、葱頭、百合、薑、山葵、ワサビ、ダイコン、蓮、慈姑、

瓜菜類に屬するものは、西瓜、甜瓜、南瓜、茄、蕃茄、苺、蕃椒、越瓜、菜瓜、冬瓜、絲瓜、苦瓜、扁蒲、

穀菜類に屬するものは、豌豆、菜豆、蠶豆、鵲豆、刀豆、豇豆、

又作物の屬科によりて類別するの法あり。

第二、 豆科作物 (六)大菜、(七)ワサビ、(八)山葵 (一)菜豆、(二)豌豆、(三)蠶豆、(四)鵲豆、(五)刀豆、 (六)豇豆、	第三、 繖形科作物 (一)亞米利加防風、(二)胡蘿蔔、(三)野蜀葵、(四) 水芹、(五)塘蒿	第四、 茄科作物 (一)哇薯、(二)蕃茄、(三)蕃椒、(四)茄、 (一)料理菊、(二)疑冬、(三)苜蓿、(四)蒿苣、(五)苦 苣、(六)牛蒡、(七)菊芋、	第五、 菊科作物 (一)玉葱、(二)百合、(三)薤、(四)葱、(五)韭菜、(六) 石刁柏、	第六、 百合科作物 (一)胡瓜、(二)南瓜、(三)甜瓜、(四)西瓜、(五)越瓜 及菜瓜、(六)冬瓜、(七)苦瓜、(八)扁蒲、(九)絲瓜、	第七、 胡蘆科作物 (一)甘藷、(二)青芋、(三)薑、(四)藜蘆、(五)柴蘇、 (六)甘露子、(七)菠薐草、(八)薯蕷、(九)土當歸、	第八、 雜類 (十)苺、(十)江南竹、(十)蓮、(十)慈姑
---	---	---	--	---	--	-------------------------------------

第二、豆科作物 (六)大菜、(七)ワサビ、(八)山葵 (一)菜豆、(二)豌豆、(三)蠶豆、(四)鵲豆、(五)刀豆、(六)豇豆、

第三、繖形科作物 (一)亞米利加防風、(二)胡蘿蔔、(三)野蜀葵、(四)水芹、(五)塘蒿

第四、茄科作物 (一)哇薯、(二)蕃茄、(三)蕃椒、(四)茄、(一)料理菊、(二)疑冬、(三)苜蓿、(四)蒿苣、(五)苦苣、(六)牛蒡、(七)菊芋、

第五、菊科作物 (一)玉葱、(二)百合、(三)薤、(四)葱、(五)韭菜、(六)石刁柏、

第六、百合科作物 (一)胡瓜、(二)南瓜、(三)甜瓜、(四)西瓜、(五)越瓜 及菜瓜、(六)冬瓜、(七)苦瓜、(八)扁蒲、(九)絲瓜、

第七、胡蘆科作物 (一)甘藷、(二)青芋、(三)薑、(四)藜蘆、(五)柴蘇、(六)甘露子、(七)菠薐草、(八)薯蕷、(九)土當歸、

第八、雜類 (十)苺、(十)江南竹、(十)蓮、(十)慈姑

本書には第二の分類法たる、作物の屬科により逐次記述すべし。

### 第九節 栽培要項

栽培要項

何れの作物を栽培するにも、最も注意すべきは、作物の病患(病害蟲)と、作物所要の養分の供給如何に在りとす。病患は概して所屬と習性を同ふせる作物を侵す事大なれども、屬科を異にする作物を害する事稀なり。例へば十字花科の作物を害する病患は、莖科の作物を害すること極めて稀なるが如し。

又作物は連年同一地に栽培する時は、自然に其品質と收量とを減退するを以て、年々栽植する作物を改むるを要す。ただに同一の作物のみならず同屬科中の作物といへども亦然り。是同性の作物を同一地に連作すれば、年々同一の養分を地中より攝取するが故に、土壤の狀態を惡變せしむるを以てなり。例へば茄科中の瓜哇薯の後地に、茄、又は蕃茄等を植うるを避くるが如し。又屬科を異にするも、蘿蔔の後地に胡蘿蔔、牛蒡の類を栽植するを忌むが如き異例も亦た少なからず。

## 第二章 各論

### 第一節 十字科作物

十字科作物

甘藍

需要多き外國蔬菜にして、其味、甘美、用途頗る廣く種類亦多し。寒冷の氣候を愛し、土質は下層土に石灰質を含める砂質壤土を最良とす。輕鬆の地は莖棄徒らに長ずるを以て屢々移植を行はざる可らず。甘藍は大



藍 甘 葉 卷

(1)ヘンダーソンアーリーサンマー  
(2)レイド、フラットダッチ

抵移植を行ふを可とす。移植の前には二三回假植すべし。客地に下種するには極めて疎播すべく、翌春に採收せんと欲せば九月中旬に播種し、晩夏に採收せんとするものは早春に下種し、冬季採收せんとすれば晩春五月に下種すべし。

品種

燕菁

蘿蔔

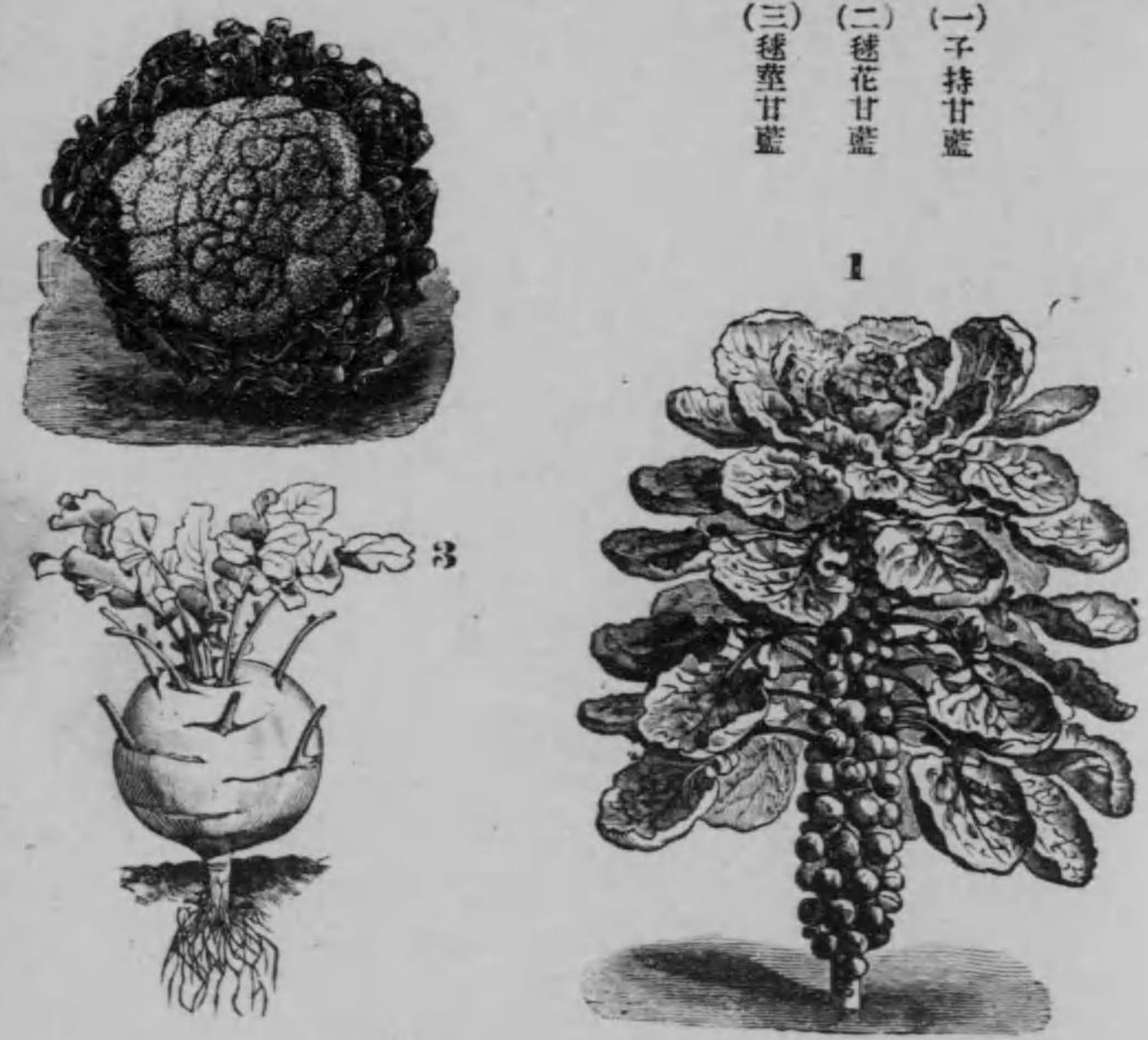
本圃は十分にこれを耕し、多量に施肥し、二尺五寸吸收の畦上に、二尺乃至二尺五寸の間を隔て、移植すべし、品種には一、**徳葉甘藍**（通常甘藍と子持ち甘藍との二種あり通常甘藍には、レイド、ブラツトダツチ、ヘンダーツン、アークリサンマー、ヘンデルツン、オータムキング等あり、子持ち甘藍にはインブルード、ロンクア、インマード、トールフレンチ、インブル）二、**毬花甘藍**（花柳菜）（ワルケレン、ホワイト、アークリ、スレイト、デヤイアン）三、**毬莖甘藍**（アークリ、ホワイト、ウエイナ）四、**緑葉甘藍**（アトガーニツシンク等）の長種あり）の四種あり。

燕菁は外國にては主に飼料として栽植せらる。性寒氣に堪へ、肥沃なる砂壤土に良品を産するも、陰濕なる強粘土を嫌ふ。外國種中、アークリ、レツド、トツプ、スウキアン、ゴールデン、ホール、等有名なり。在來種にては近江燕菁、天王寺燕菁、聖護院燕菁、長燕菁、小燕菁、緋燕菁等あり。町疇に整地せる所に條播し、後、間引を行ふ（大なる種類は點播す）發芽後屢々液肥を施し、徐ろに生長せしむべし、小燕菁は一年數回收穫するに適す。性連作を好まず。

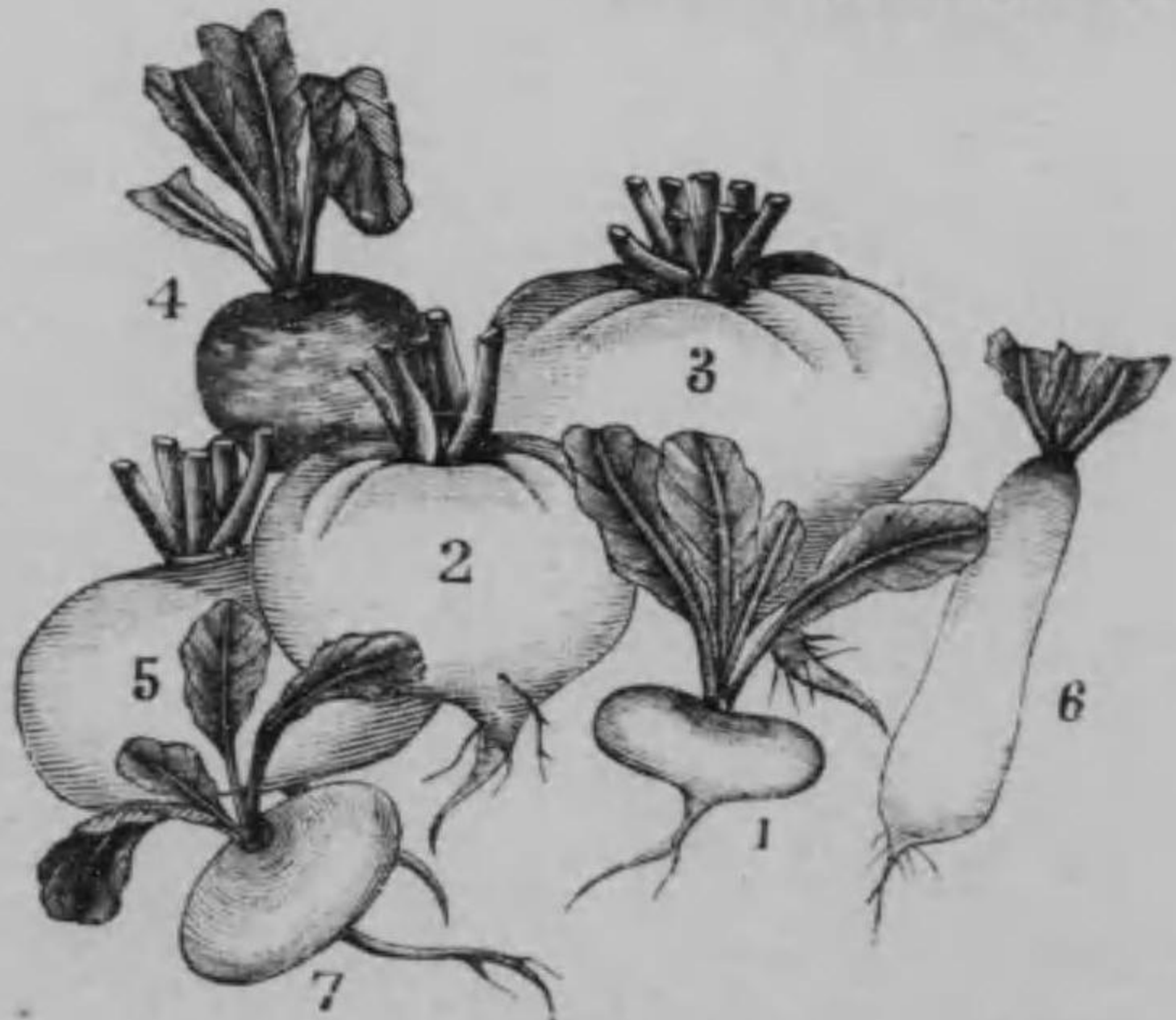
蘿蔔

蘿蔔

- (一) 子持甘藍
- (二) 毬花甘藍
- (三) 毬莖甘藍



燕菁



- 1 小燕菁
- 2 天王寺
- 3 聖護院
- 4 緋燕菁
- 5 近江
- 6 長燕菁
- 7 アークリ、レツドトツプ

品種



- 1 宮重
- 2 櫻島
- 3 練馬
- 4 方領
- 5 聖護院
- 6 守口
- 7 二十日

蒟蒻

本邦の如き濕氣に富める温  
 暖の氣候を愛し、膨軟輕鬆な  
 る深き壤土に適す、品種を大  
 別して、通常種、秋大根、二年子  
 大根、夏大根、時無大根、甘味大  
 根の五種とす。彼の有名なる  
 宮重大根、方領大根、練馬大根、  
 櫻島大根、聖護院大根、守口等  
 は秋大根に屬するものなり。  
 斯く蒟蒻は種類多きを以て  
 其栽培一ならず、即ち八月下  
 旬より九月上旬に秋大根、十  
 月中下旬に三月大根、細根大  
 根を播き、春彼岸前後に時無  
 大根、や、遅れて夏大根七八

蒟類

類 蒟



京菜

山東菜

月頃九月大根を播下する  
 なり。肥料は原肥として厩  
 肥を用ひ、人尿、油粕を補肥  
 とすべし。  
 蒟類  
 秋末より冬期に涉りて最  
 も多く需要せらる、従つて  
 種類多し。輕鬆にして乾燥  
 なる處を嫌忌し、濕潤なる  
 沖積質砂壤土を好む、又粘  
 性壤土なる有機質多き所  
 に良品を産すべし。町噺に  
 整地したる畦上に條播し、  
 後間引を行ふ。葉を結ぶ  
 ものは生長と共に緩く葉



品種



菜白



菜體

にて束ぬべし。  
 苾類には左の種類あり。  
 (イ)山東菜(清國の産にして八月下旬  
 九月上旬に下種す、人尿堆肥米糠を  
 施すべし、栽培宜しければ葉穂を結  
 ぶ) (ロ)白菜(同じく清國及び朝鮮の  
 原産葉穂を結ぶ) (ハ)體菜(清國の産  
 なり俗に杓子菜と稱す) (ニ)三河島  
 菜(東京府下三河島村の産、劔先菜と  
 杓子菜との二種ありて前者は其風  
 味後者に劣る、播種は山東菜に同じ。  
 (ホ)小松菜(下總小松村の産、能く寒  
 氣に堪ふ)九月より十月に播下し冬  
 に至りて採收す、因て冬菜の名あり。  
 鶯菜は之と同一種なるも春季に播

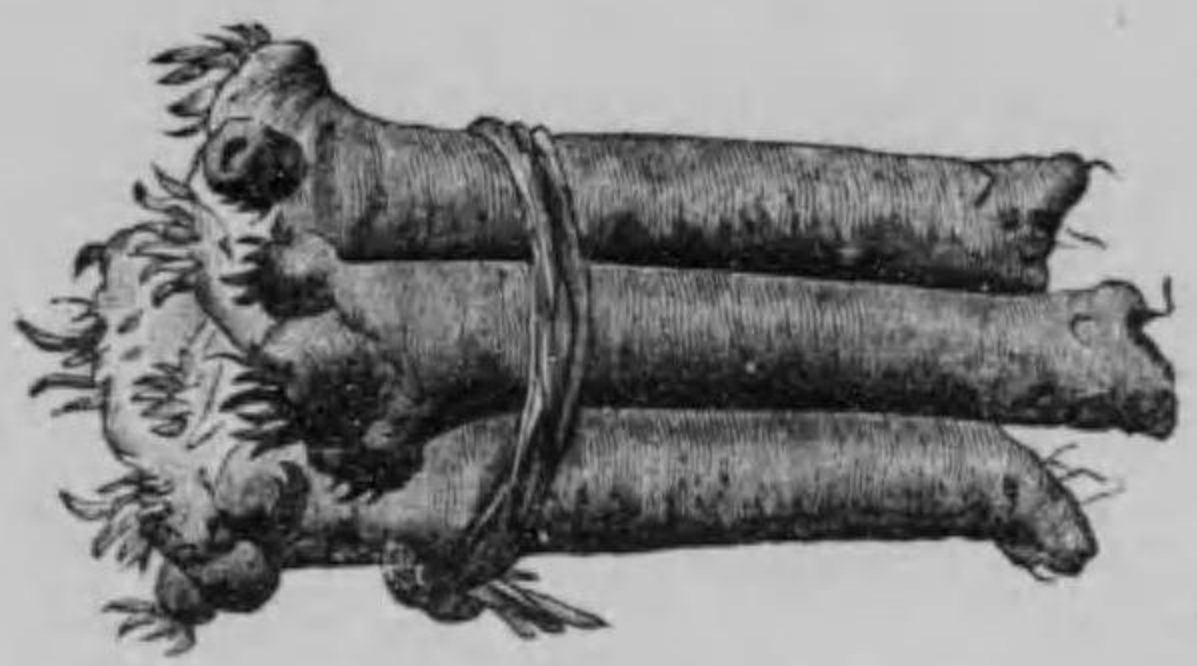
わさびだいこ



菜高

種する故この名あり) (ヘ)京菜(京都  
 附近に栽培せらる、故此名あり。一  
 に千本菜、伊勢菜と云ふ、芥菜の一種  
 なり、湿润なる砂質壤土又は粘壤土  
 に適す。九月中旬頃播下し二三月に  
 採收す) (ト)大芥一名高菜(十月中旬  
 頃苗床に播種し十一月より十二月  
 の間に二尺の畦巾に一尺を隔て、  
 定植す、栽培極めて容易なり。肥料は  
 堆肥、人尿、木灰を用ふ。この一種なる芥菜の種子は芥子と稱して辛料に  
 用ひらる) (ニ)わさびだいこん  
 如何なる處にても栽植し得べし。就中表層深くして乾燥に失せざる砂  
 壤土に好適す。蘿蔔の如き香氣を有し、辛味はわさびに類す故にこの名  
 あり。三月下旬一尺五寸の畦上に、六七寸の距離を保ちて、三寸程に切斷

山葵



シコイダビサワ

せる根を植ゆれば秋に至りて採收し得べし。尙は此の儘一二年を経過せしむれば一層美大なるものを得可し。

山葵 一名山薑菜、又は蔞菜

山間にして谿流を扣へ、水の便利良く、夏冷涼にして冬温暖なる所を好む。山葵を栽培するには、北面せる砂礫に富みたる地を耕し、五寸乃至一尺程砂礫を敷き、常に清水を流し、秋彼岸の頃根元より分けたる藁の小莖を取り、二尺の距離に移植せば、二年にして一株より數十莖を發生す。太きものを根山葵とし、細きものを葉山葵とす。

附記

十字科に屬する作物に取りて、通有性の恐るべき病菌あり。之を根瘤病と云ふ。殊に甘藍と蕪菁とは大なる被害を被ることあり。又害虫には夜盜蟲、紋白蝶、地蠶、蚜蟲、蛆、葉蟲等なり。

附記

菜豆

品種

十字科作物は、異種相交して、雜變種を生じ易きのみならず、採種法頗る困難なるを以て、自家採種を行ふよりも、寧ろ精確なる種子商より、年々種子を仰ぐを安全なりとす。もし自家採種を行はんとせば、採種用の圃地を各品種と遠く離し、容易に花粉をして接する事なからしむべし。

第二節 豇科作物

菜豆

南亞米利加の原産なり。其性氣候を忘むこと少なく、石灰質の粘壤土に好適す。菜豆の品種には其莢硬軟なると、綠黄なると、莖の矮性なると、蔓性なるとの別あり。矮性種は促成栽培及び早收に適し、蔓性種は軟莢及び子實採收に適す。ダッチ、ケース、ナイフ、ケンタツキ、ウオンダー、ロンブ、エロー、シツキス、ウイーク、ベスト、オブ、オール、鵝、菜豆、札幌菜豆等は有名の品種なり。四月下旬乃至六月下旬及び八月の兩期に播種し、軟莢を採收すべし。肥料は成る丈け多く與へ、培養法は豌豆に準ずべし。一反歩一石乃至一石五斗を産す。霜害を恐るゝ事甚だし。

豌豆

豌豆

至る處に栽培せらる、従いて氣候を忌むこと少く、大抵の土地に生育繁茂す。されど瘠たる粘質土及び有機質に富める輕鬆土は良しからず。品種は頗る多く、花に紫白の別あるも、蔬菜用は主もに白色種なり。又蔓性矮性の二種ありて莢にも亦硬軟の別あり。エキストラ・アーリー、トーマス・ラキストン、サー・プレイス、佛國大莢豌豆、チャンピオン、オプ・インザランド、アメリカン・ウ・オンダー、白花豌豆等を著名の品種とす。寒地にては春蒔するも、内地にては秋蒔するを通例とす。即ち十月頃、矮性なれば一尺五寸、蔓性なれば三尺の畦上に二三粒づゝ下種すべし。其距離、矮性種は一尺、蔓性種は二尺とす。蔓性のものには支柱を與ふるか、繩を張りて纏繞せしめ、二三回中耕の後、施肥に注意せば五六月の候に收納するを得。一反歩の收量一石五斗。豌豆は非常に連作を忌むが故に、五六年間は同一地に栽培するを避くべし。

品種

蠶豆

蠶豆

通常蠶豆、大粒蠶豆の二あり、強粘土の外、何れの地にも栽培するを得べし。

豌豆

豌豆

し之を栽培せんと欲せば、秋十月の候、一尺八九寸の畦上に八九寸を隔て、二三粒の種子を下し、一反歩四五升開花前に至る迄兩三回の中耕を施すべし。さすれば五六月に至りて收納するを得。而して嫩莢を食料に供せんには、收穫前に採取すべし。一反歩の收量分を一石三斗内外なり。



(種一の豆鵲)

豆帶裙  
グ、サクロ ユシ

る、之を栽培せんとせば四五月の頃、二尺の畦上に點播すべし。其法蔓生豌豆に同じ。

刀豆

刀豆

蔓草にして軟莢を食用に供す。子實頗る大きく味美なり。刀豆には蔓性種と矮性種との二あり。又子實の白色なるものと、淡紅を帯ぶるものあり。發芽困難なるを以て本葉二三を出す頃、六寸内外の隔りに定植すべし。圃地は二三尺に畦を立つべし。肥培法は豌豆に同じ。温床に下種せずして直ちに露地に栽培するものあり。

豇豆

豇豆

鵲豆の一種にして、ただに嫩莢を食用するのみならず、子實は飯に交へ、或は餡に製して味美なり。温暖の氣候を愛し、粘質壤土に適す。通常種莢豇豆、畑豇豆、採實豇豆の二品種あり。前種には十六、廿六、廿八等有名にして、後種には金時豇豆、奴豇豆、白豇豆等有名なり。五六月の頃麥の間に播下し、八九月頃に採收す。一反歩一石内外を産す。

附記

附記

豇科作物は一般に石灰質土に能く生育す。此科に屬する作物は、根部に特殊の機能ありて、空氣中の游離窒素を利用するが故に、厩肥、堆肥其他

の窒素肥料を施すの要なし。病害には銹病最も通有なり。又害蟲には地蠶、夜盜蟲、蚜虫、豌豆の葉蛆、蠅等なり。豇科作物に屬する蔬菜中落花生青豆(大豆)等あり。

### 第三節 繖形科作物

亞米利加防風

アメリカ防風

清正人參又は白胡蘿蔔と稱す、根身白きも形胡蘿蔔に類似せるを以てなり。表土深き乾燥の地を愛すと雖も、其質強健にして土地を選擇する



ニヨンルゲ

の要なく、施肥亦た多きを要せず。ゲルンシーと稱するものは唯一の品種にして收量最も多し。

栽培至つて容易なり。即ち二

月より七月に涉りて播種し得べきも、通例春彼岸頃に播種す。其法適當の地に一尺二三寸の畦を立て一反歩に二升の種子を條播し、間引を行

胡蘿蔔

ひて四五寸の距離を保たしめ、夏日に際し灌水を行へば晩秋に至りて大なるものを收穫し得べし。

胡蘿蔔

内外共に多く需要せらるゝ根菜にして、本邦到る處に栽培せられざるなきも、品質佳良のものを得んと欲せば、地味と氣候とを選擇せざるべからず、即ち肥沃にして排水よき深き壤土又は粘壤土を好み、濕地に産するものは色澤風味共に劣等なり。マンバース・フレン



胡蘿蔔  
グンシー オフ チンレフ

チ、フオーシング・ヘンダーソン、マ  
ーケット・アロー、ロング・スカ  
レット、瀧の川胡蘿蔔、金時胡蘿蔔  
(大坂胡蘿蔔)、西京胡蘿蔔、札幌胡  
蘿蔔、夏胡蘿蔔、等は有名の品種な

野蜀葵

麥作又は大豆の跡地を十分耕勸し、堆肥、人糞、尿、米糠、燐肥等の原肥を施し、六月より八月に至り、藁の目形に足跡を付けて點播すべし。種子は砂を混して播下し、薄く覆土せる上に藁稈を覆ひ、夕刻灌水すべし。發芽後三四十日間に二回の間引を行ひて一本立となすべし。管理は蘿蔔ならす。九月より十二月に亘りて採收すべし。一反歩の收量は凡そ三四百貫匁なり。

野蜀葵

其形水芹に類し、香味強し。五月上旬より六月上旬まで、麥の條間に堆肥を施して條播し、夏期一二次液肥を施すべし。之を軟白するには秋季生長を止めんとする頃溝中に移植して土を盛り掛け、翌春更に株に土を寄せて培養すべし。

水芹

各地に自生せる植物にして、之を栽培するには冬季暖き湧水の流下する水田を可とす。三月上旬掘り取りたる根株を束ねて地上に堆積し、乾

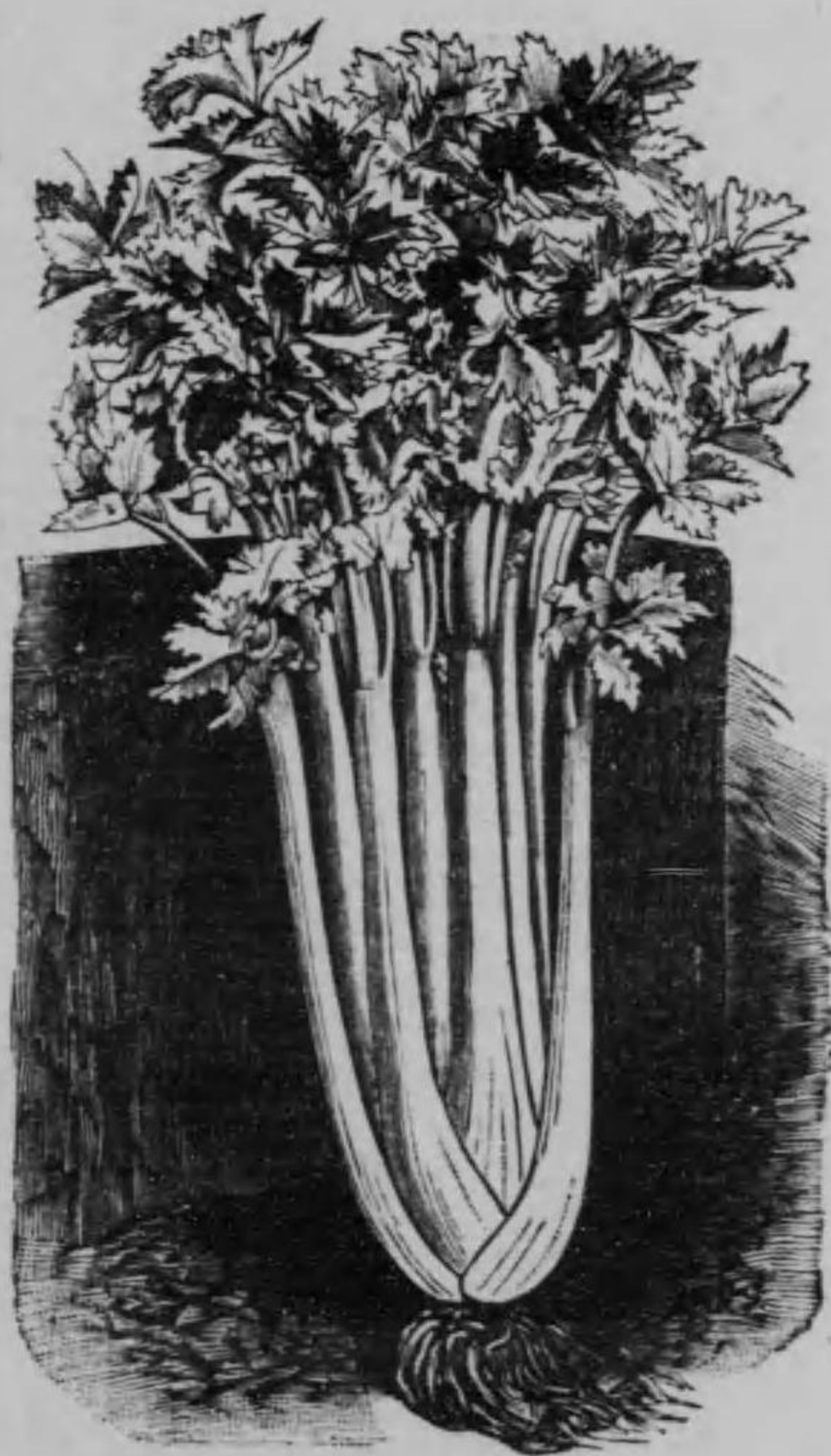
水芹

燥を防がば凡そ二週間を経て發芽するが故に、之を一寸位に截斷し田面一圓に撒布すべし、其際水を淺く漲らしめ置くを要す。慙くて一二寸に生長する迄は常に少量の水を漲らせ、後水量を増し、夏季に際し、二回除草を行へば十一月上旬に至り採收するを得。

塘蒿(二名セルリー)

塘蒿

近時本邦にて漸く栽植せらるゝに至りたる優美なる蔬菜なり。二品種ありて、一は専ら莖葉を食し、一は單に根を食する者とす。ベンダーソ



塘蒿

ン・ゴールデ  
ン・ドワーフ  
ゴールデン  
ローズ・ボス  
トン・マリーケ  
ット等有名  
なり。莖葉を  
食する種類

を栽培するには早春温床に下種し、後ち假植を成し、六七月の頃、豌豆、又は、廿日大根の跡地に定植す。有機物少なき深層の砂壤土を好む。本圃は十分耕肥して肥培を懇にし、二尺五寸に作條して、一尺の隔りに栽植し、直に灌水すべし。後屢々灌水し、成長するに連れて培土し軟白せしむべし。根を食する種類は其栽培法前種と異ならざれども、軟白せしむるの要なく、一二回培土すれば足れり。

附記

繖形科に屬する蔬菜にして、防風洋芹等あるも、茲には之を略す。

附記

第四節 茄科作物

瓜哇薯

茄科作物  
瓜哇薯

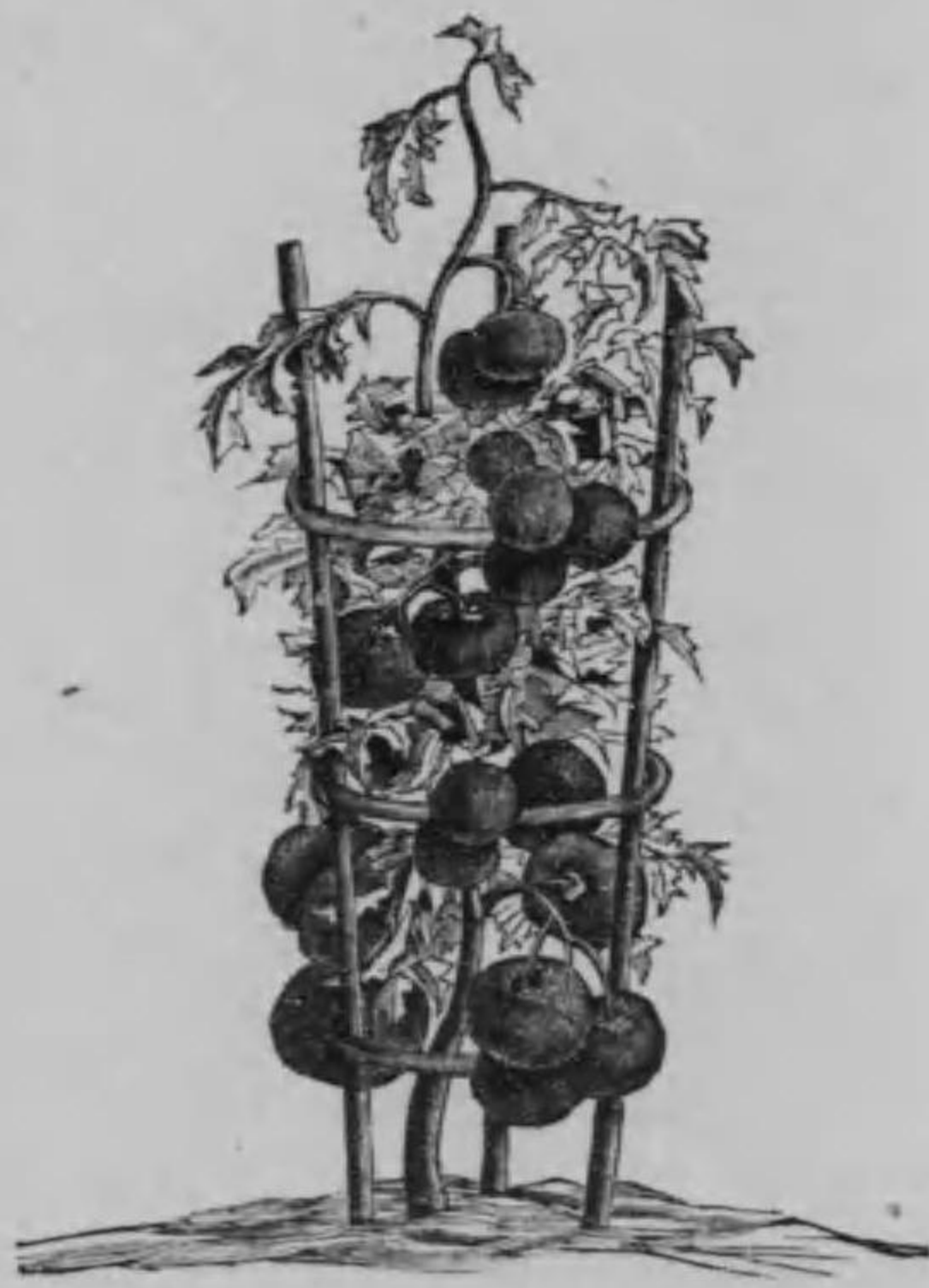
瓜哇薯は一に馬鈴薯と云ひ、瓜哇或は南米智利の原産とも云ふ、慶長の昔本邦に傳來し、其需要の大なる効用の多き、且つ備荒用植物として最も適良なり、性能く寒氣に堪ふれども、温暖の氣候を好み、寒地には品質を損し、收量減少することあり。土質は輕軟なる壤土又は砂壤土を好め

ともよく各種の土地に生育し、殊に新開地の作物として最も良し、アイ  
 リー・ローズ・スノー・フレッキー・ホワイト・エレフワン・アイリー・オハヨー・ビ  
 エチー・オア・ヘ・アロン等は有名の品種なり。之を培養するには春季に栽  
 植し夏季に収穫するを普通とす。其法一反歩に付き三十貫乃至五十貫  
 の種薯を用意し、三四月の候、能く耕したる地に二尺の畦を立て、窒素  
 肥料と少量の磷肥及び木灰を施て、一尺内外を隔て、淺植す。植付後屢  
 々畦間を耕し、土壤を和らげ、二三回培土し花蕾出づれば直ちに摘取る  
 べし。種薯は中形のもの佳とし、栽植前皺を生せしむれば生育大に良  
 好なり。莖葉枯固せるは塊莖の熟したる徴なるを以て、直ちに之を收穫  
 すべし、一反歩の收量凡そ三四百貫なり。

蕃茄(トマト)

歐米にては頗る珍重せらる、鹹菜なるも、本邦にては未だ一般に食用  
 とするに至らず。蕃茄は暖地の原産なるも、本邦にては北海道の寒地に  
 ても之を栽培するを得べし。性肥沃なる砂質地を好む。品種は甚だ多く、  
 大小、色澤熟期によりて之を分つ。イグノタム・プランデー・ワイン・トロッケ

蕃椒



蕃 茄

距て、深植し、時々灌水し支柱を建て、莖頂に花蕾を見るに至り摘心す  
 れば、美大の鹹を得べし。肥料は胡瓜に同じ。

蕃椒

南亞米利加の原産にして、三百年前葡萄牙人によりて輸入せられたり  
 き。品種は、形、細長、長大、短大、色、澤、紅、黄、薄、紫、用途、(生食、煮食、賞観用)に依て  
 別たる。目今多く本邦に栽培さるゝものは、ハッ房、日光、鷹爪、青黄、金柑等  
 なり。早春温床に下種し、二三葉を發するに及んで、假植し、五月上旬に至

ルス・フェボリット・ミカド・マ

チレックス・トロフキデー

ブルクキン等有名なり。

至つて剛健なる作物な

るを以て栽培容易なり。

即ち早春の頃苗床に下

種し、二回假植して後、二

尺の畦上に一尺五寸を

摘心する

茄

り、一尺五寸乃至二尺の畦上に一尺を距て、移植し支柱を與へて二三回の除草中耕を行へば八月頃より採取せらるべし。肥料として、厩肥、人尿を施用す。

茄

亞細亞の原産にして、本邦にては到る處この栽培を見ざるなし。温暖の氣候を愛し、肥沃なる砂質壤土に好適し、粘土質に於ては其質劣等なり。茄子の形狀、色澤大小により數多の品種を有す。千成茄、中成茄、晚成茄、市着茄、佐土原長茄、白茄、清國大長茄、清國大圓茄、ニユーヨーク、インブルー、ツド、ブラツク、ベキン、アロー、ロング、パール等有名なり。

早春の候、一日間微温湯に浸したる種子を温床に下種し、三四葉の頃三寸内外の距離に植ゑ付け後、五六葉を生ずるに至り降霜の患なきを待ちて、晴天の夕刻、若くは曇天を見て移植すべし。原肥には寒凍堆肥、木灰、磷肥を與へ、畦巾二尺乃至四尺、株間一尺四五寸に定植するなり。西ヶ原農事試験場の試験成績によれば、窒素肥料を施したるものは、其畝最も柔軟にして、加里肥料之に次ぎ、磷肥を施したるものは、其皮厚さのみならず風味大に劣れりといふ。之を採收するには朝露の未だ乾かざる時に於てし、採種せんとせば二番成のものよりすべし。茄は非常に連作を忌む。

附記

茄



1



2

1 清國大長茄  
2 ニューヨーク  
インブルーノド

附記

瓜哇薯の疫病菌は、茄其他の茄科作物を害し、茄子の立枯病菌も瓜哇薯をも害す。又蚜蟲、夜盜蟲、椿象、偽瓢蟲等は何れも茄科作物の害敵なり。故に茄科作物は前後連作を避けざるべからず。



### 第五節 菊科作物

#### 料理菊

料理菊は専ら花繻を食用に供す。黄白の二種あれども、普通黄色小輪のものを賞用す。四月頃嫩芽を株分して、肥沃の地に假植し五月下旬に本地に定植すべし。本圃は十分耕肥し、堆肥と少量の油粕を施し、三尺の畦上に一尺を隔て、二三本づゝ栽植し、時々液肥を與ふれば十月中下旬の頃開花するを以て、其時收納すべし。

#### 疑冬

日本の原産にして、到る處の山野に自生のものを見る。秋田疑冬は偉大なるを以て著名なり。輕鬆にして膏沃濕潤なる地を好む。疑冬は色澤により、白疑冬、青疑冬、赤疑冬、の三品種あり。尙東京附近に、ミズ疑冬、八つ頭疑冬の二種類あり。疑冬を栽培するには十分耕したる地に堆肥を施し、五六月の頃、七八寸の隔りに根株を分栽すべし。新植後四五年に至れば、勢力衰ふるが故に他に移植するを要す。

菊科作物  
料理菊

疑冬

苜蓿

苜蓿



#### 苜蓿

春秋兩期に播種し得べきも、通常九月より十一月に跨り二三尺の畦に條播し、間引を行ひて收穫す。肥料には腐熟せる堆肥と、液肥を用ふ。種子は秋播のものより採收すべし。

#### 苜蓿

西洋蔬菜中の主用なるものにして、本邦にても古くより之を栽植す。毬苜蓿、縮緬苜蓿及び立苜蓿の三種ありて、通常苜蓿と云ふは毬苜蓿を意味す。メーキング、ポストン、マーケット、ゴールデン、クイン、シンアツン、ロンドン、ホワイト等は有名の品種なり。苜蓿は春夏秋絶え間なく栽植し得べく、通常床地に播下して後圃地に定植するなり。即ち苗の二三寸に生長したる頃一尺内外に移植し、時々液肥を施し

高苣

苣蒿緬縮



て生長を助くべし。立高苣は繩にて周圍を縛り、土を兩側より寄掛くる事必要なり

苦苣

従前より栽植せられ、秋冬の間に需要多し。グリ

ーン、カールド、ホワイト、カールド、モツス、カール

ド、アール、カール、カールド、インベ

リアル、ホワイト、パタピアン

種等は就中良好の品種とす。

栽培法は高苣に同じ。

牛苣

本邦の原産にして全國到る

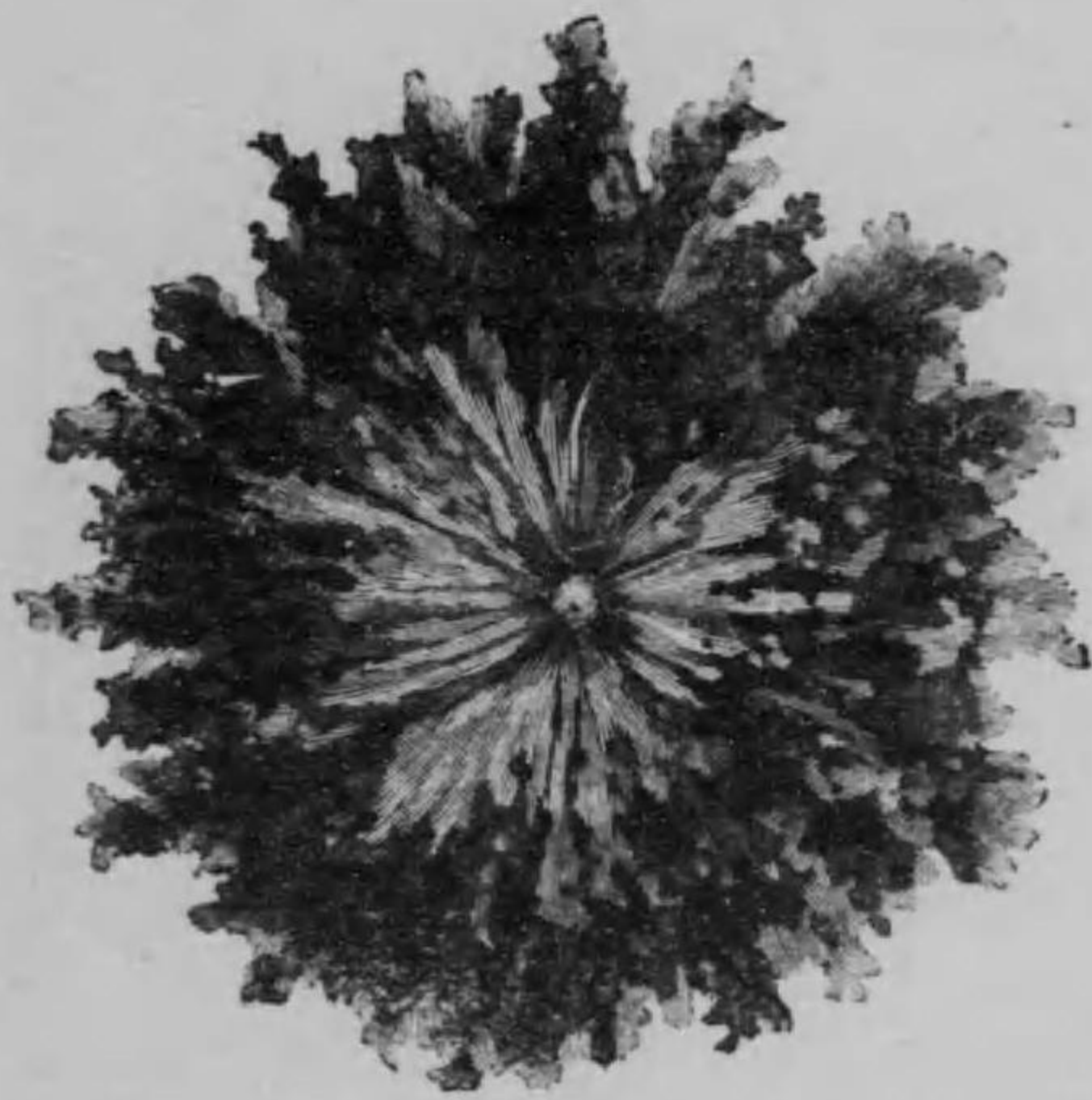
處に培養せらる。柔軟肥沃に

して上層深き地に良種を産

すべく、稍々濕氣を含める壤

土若くは填壙土、又石灰質土

牛苣



苣 苦

を受す。瀧の川牛苣、大浦牛苣、梅田牛苣、砂川牛苣、札幌牛苣等は有名の良種なり。之を栽培せんには、春陽四五月の頃、麥間を耕して之に厩肥を施し、種子(一三年経過せるもの)を一晝夜間浸水し、木灰に混じて下種するなり。後間引を行ひて一本立とし、耕耘肥培怠りなく、排水に注意すれば良好のものを得可し。而して秋の彼岸頃播種し翌年の夏に至りて收納するものを夏牛苣と云ふ。牛苣は連作を忌むが故に少くとも四五年間は同一地に栽培すべからず。

菊芋

菊芋

歐洲の原産にして、一時は流行的に熾に採植せられしものなり。性頗る頑健なるを以て、例令瘠薄の地と雖ども能く繁茂すべし。之を栽培するには春季、瓜哇薯に倣ひて種薯を植ゑ、二三次の除草と土寄せとを行へば容易に多量の收量を見るべし。

附記

菊科の蔬菜類には、等地きくごばう、朝鮮薊、蒲公英等あり。

附記

百合作物

第六節 百合作物

葱頭

葱頭

歐米にては往古より廣く培養せらる。葱頭は地味を選ぶ事厳しきも頗る利益多きものなるが故に漸次本邦農家に傳播栽培せらるゝに至れり。性寒氣を愛し、北海道の如き處に良品を産すれども、炎暑赫灼たる臺灣の地にも亦良品を産す。即ち葱頭は、熱寒何れの地にも好適するものなり、土質は肥沃なる、砂壤土に好適す。

葱頭



- 1 エキストラ、アイリーレッド
- 2 ラーシ、レッド、ウエザース、フィールド
- 3 エルロー、ゲロープ、ダンボリス
- 4 プライス、テーカー



本邦にて栽植せらるゝ良種は、エルロー、グロープ、ダンボリス、ジー

シ、レッド、ウエザース、フィールド、ホワイト、ポルチエガル、プライズ、デーカー、エキストラ、アイリー、レッド、シルヴァー、スキャン種等なり。

葱頭を栽培するには肥沃の地に冷床を設け、一二次液肥を施して、根莖の小指大に成長したる頃本圃に定植すべし。本圃は十分に耕しこれに施肥して、浅く移植すべし。其法

畦幅

一尺五寸乃至二尺

三尺

株の距離

五六寸

四五寸(四列に並べ植ゆ)

一尺五六寸

三四寸

の諸法あり其後乾燥に失せざる様注意し、管理を怠るべからず。葱頭の播種期は收穫時期によりて同じからず。即ち春季より初夏に收穫せんと欲せば十月上旬播種し、中夏より秋季に採收せんには春彼岸前後に播種すべし。十月頃播種したるものは栽培容易なり。葱頭の種子は頗る高價なるを以て、宜しく自家にて採種すべし。其法鱗肉の薄くして形状の正しきものを採り、乾燥なる場所に貯へ、翌春に至りて一尺の距離に移植し、開花するに及んで支柱を立て、結實せしむべし。

百合

百合  
本邦の原産にして、煮食用又は賞観用として培養せられ、特に後者は歐米各國に多く輸出せらる。煮食に適する種類に二あり、一を卷丹と云ひ鱗莖大にして葉腋に毬芽を有す。一を山丹と呼び毬芽を有せず。

卷丹栽培法

卷丹栽培法 秋期十分成熟せし毬芽を執りて床場に播下し、翌秋に至りて圃地に定植すべし。かくすれば翌年の夏季に至りて開花す。此の開花前に花枝を摘除し、毬芽を除けば鱗莖肥大となり。秋期掘り取り、小

山丹栽培法

なるものは尙ほ一二年培養すべし。  
山丹栽培法 六月頃鱗莖を土中に挿植すれば數多の小鱗莖を生ずるを以て、秋に至りて之を掘取りて圃地に定植すれば、翌年の晩夏には採收し得べし。鱗莖を採收するの目的にて栽植せしものは決して開花せしむべからず。

薤

薤は東洋諸國に多く栽培せらるゝものにして、如何なる氣候、如何なる土質にも栽培し得べし。就中火山灰土、砂壤土には最も能く生育す。之を栽培せんには九月中旬乃至十月上旬の候、一尺七寸の條を設け、七八寸を距て、一寸五分の深さに種二粒づゝを栽植し、その後二三回耕耘肥培せば、翌年の六月下旬に至りて收穫するを得べし。

葱

本邦普ねく栽培せられ、何れの土質たりとも適せざる事なし。されど、排水良好なる粘壤土又は輕鬆にして表土深く稍濕氣ある沃土を最もよろしとす。而して砂土は不良なり。

京阪地方にては綠葉を貴べども、東京附近にては白莖を愛す。砂村葱千住葱岩槻葱下仁田葱秋田葱等は有名なる品種なり。之を栽培せんには、膨軟なる床地を選びて、十坪に付き二三合の割合にて水選したる種子を播下すべし。冬より春に渡りて採收せんと欲せば三月中旬頃、秋より冬に採收せんとせば九月に播種すべし。かくて八九寸乃至一尺二三寸に生長したる頃移植を行ひ、白莖の多きを得んとするには、深き條溝に肥培し、薄く土を覆へる上に三四本の苗を一株として四五寸の距離を保たしめ、深く土を覆ひて液肥を與へ、日を経て徐々に土を覆へば二月の後收穫に適すべし。葱は連作を忌むを以て、同一地には兩三年を隔てて培養すべし。

菲葱

本邦には多く栽培せられざれども、外國にては盛に栽培せらる。ゼリョウン、アイトンカツセル、シアアント種等は有名の品種なり。三月上旬冷床に薄く撒播し、四五月の頃五六寸の隔りにて本圃に移植すべし。

石刁柏 洋名アスパガス

菲葱

石刁柏



葱 菲



石 刁 柏

葉は松葉の如く、性土當歸に酷似せるを以て、マツパウドと呼ぶ。優美なるものなり。性鹽氣を好むが故に海邊に好適し、深層にして肥沃なる地を愛す。バルメット、コロツサル、アソントイル種等は有名の品種なり。株分を行ふ時は早く採取し得るの便あるも、三月中旬床地に下種し翌春三四月に至り本圃に移すもよし。本圃は一反歩三百貫の堆肥を要し、五六尺に畦を二尺五寸乃至三尺の距離に定植するなり。かくして秋に至り

て莖葉枯凋する前之を採收す。翌春發芽の際施肥して支柱を與へ秋季に至りて更に刈取り、根邊に堆肥を敷き込み、翌春(三年目)細碎せる腐植壤土を高く盛りかくなれば、手敷を要せずして收穫得べし。

附記

葱の萎黃病、銹病は葱類に普通にして、地蠶、蚜蟲、夜盜蟲等は、一般の百合科作物の害敵なり。而して此等の害敵は大に恐るべきものなるが故に、決して其跡地に同一科に屬する作物を栽植すべからず。

第七節 胡蘆科作物

胡瓜

古來より本邦に栽培せられ、頗る重要視せらるゝ。鹹菜にして、歐米にて亦た多く栽培せらる。性肥沃にして、濕氣を有する温暖なる、砂質壤土に適す。數多の品種あるも、内外種を合して大別すれば、白鹹、綠鹹の二にして、之に早成節成胡瓜と晩成普通胡瓜と長胡瓜との三種あり。白鹹種は鹹の色青白なるものにして、綠鹹種は即ち普通種なり。節成とは節こ

胡蘆科作物

胡瓜

附記

とに結實する種類にして、收穫多し。鹹は小なるも早熟にして風味佳なり。短節成、長節成、白大胡瓜、青大胡瓜等は、就中有名の品種なり。胡瓜は通例早春に温床内に下種す。後一回假植を行ひ、八十八夜前後に至り本圃(麥作地)に定植す。其法畦間一尺一尺五寸を距て、原肥を施し、夕刻に根際ねぎわの土を附して、叮嚀迅速に移植し、一週間の後、補肥として液肥を與ふべし。原肥は堆肥、油粕糠等なり。移植後、榆木うげを與へ、節成種以外は、一鹹を生ずる毎に心を摘み、二、三回の耕耘たがひを行ひ、畦上に藁稈を敷きて乾燥を防ぐべし。

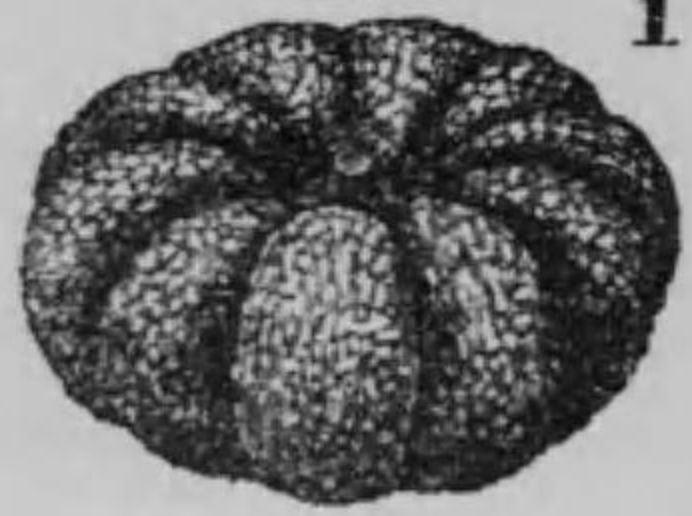
南瓜

南瓜

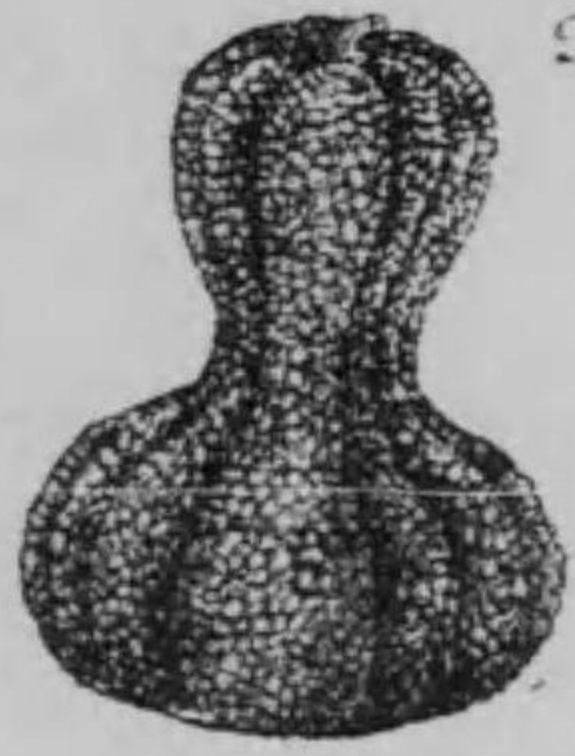
我國にては専ら煮食用に供すれども、西洋にては煮食用の外、飼料、裝飾用等に供す。温暖の氣候を愛し、砂地の他いかなる土質にも生育繁茂すれども、殊に火山土、壤土、粘壤土には好適す。居留木、橋南はしなん瓜、縮緬ちぢめん、早生鹿ヶ谷南ちぢめん瓜等を有名の品種とす。南瓜を栽培するには、平作、柵作の二あるも、大抵平作を行ふ。其法三月下旬温床に下種したる苗を、五月の初めに至りて四五尺の畦上に三尺内外を隔て、深く移植するな

甜瓜

南 瓜



1 縮 類  
2 鹿ヶ谷



り。培養は胡瓜と大差なきも本圃に定植したる後蔓返しを行ひて生熟を速かならしむべし。南瓜は連作を忌まざるも、小形となるの恐あり。

甜瓜

ツク。ニユポルト。ロツキ。フオールド。ポールローズ等は有名の品種なり。甜瓜は移植容易なるを以て、三四葉を生ずる頃三四尺の畦上に三尺を隔て、移植するを可とす。又四月下旬の候圃地に直播するもよし。種子は播下の前、豫め微温湯に浸し置くべし。爾後時々液肥を追施し四五葉を生ずる頃摘心して二枝を發生せしめ各枝五六葉を生ずるに至れば、

往古より本邦に栽培せらるれども、歐米に於ては其栽培頗る盛なり。されば良種亦甚だ多し。銀甜瓜、青皮甜瓜、鳴子甜瓜、支那白皮甜瓜、ロング、アイランド、ビユーテリ、ムロン、シユクラ、ンド、ツール、エクストラ、アーリー、ハツケンザ

西瓜

甜 瓜



1



2



4



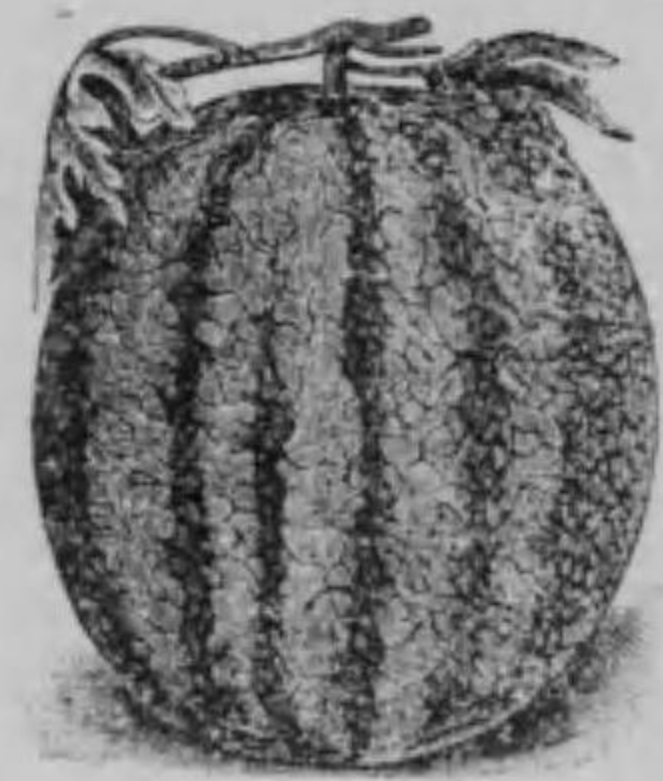
1 ドーオフ、トキツロ  
2 クツサ、ンケツバ、ーリーア、ラトスキエ  
3 ーチユビ、ドンライアケンロ  
4 ズーロ、ルーゴ

再び摘芽し側芽を發生せしむべし。かくすれば結實多く形も亦偉大なり。栽培中は畝めて冗蔓を除き、地上に麥稈を敷くべし。甜瓜は連作を忌むが故に四五年間は同一地に栽培すべからず。

西瓜

亞弗利加の原産なる

も、古くより本邦に栽培せらる。性温暖の地を好み、砂質土には最よく適應し、壤土填壙土之に次ぐ。降雨多き年は結果不十分なるも、又早魃の年には夕刻に際して灌水すべし。内外品種中、早生黒種、早生赤種、晩生黒種、アイス、フリーム、スウキート、ハート、マウンテン、スウキート、ブラツク、スバニツ



瓜 西

スワイト、ハート

形となし、之に播種して切葉を覆ひ、發芽せば之を除き、間引を行ひて一本立とし、六七葉を生ずる頃摘心して二枝を出さしめ、一枝に一畝を結ばしむ、其後の培養法は甜瓜と同じ。卷鬚枯槁し、指にて顆面を弾き、濁音を發する頃收穫すべし。

越瓜及菜瓜

通常越瓜を白瓜と言ひ、菜瓜を青瓜と言ひ、越瓜は東京附近に多く産する鹹菜にして、分つて早中晩の別あり。されど菜瓜は唯一種にして越瓜に比して細長し、栽培法并に摘心法は甜瓜に同じ。

冬瓜(一名かもうちり)

冬瓜

越瓜及菜瓜

苦瓜

支那の原産にして、本邦にても廣く栽培せらる。品種には、普通種、琉球種、鹿兒島種の三種あり。冬瓜を栽培せんと欲せば、苗床に苗を仕立て、五月下旬本葉三四を發したる頃、端末を摘み取りて本圃に移植すべし。爾後肥培を懇にし、布藁をなすべし。七八月に至れば收穫するを得べし。

苦瓜(一名つるれいし)

一種の蔓生植物にして、鹹は熟するに従ひ下端分裂す。故につるれいしの名あり。普通種と細長種との二品種ありて、之を栽培するには中春本圃に直播する法と、床地に播種し、南瓜冬瓜と同時に移植する法とあり。何れも二尺五寸乃至三尺の畦上に一尺五寸乃至二尺を距て、栽植するなり。普通種には支柱を與へ細長種には柵を作るべし。

扁蒲

干瓢の原料として栽培せらる。就中千葉栃木の兩縣は有名なり。品種は通常二種に分つ。一を長扁蒲と云ひ、一を丸扁蒲と云ふ。栽培法は三月下旬温床に下種して後移植を行ふか、四五月の頃定地に直播するか、其何れにしても、畦幅六尺、株間三尺となし、一尺に生長したる頃摘心し、乾編

扁蒲



絲瓜

汁のりを與へ樹勢盛なる頃麥稈を布くべし。落花後四十日にして成熟す。  
へらま 絲瓜  
 蔬菜用として栽培すること少きも、其嫩わかき時油にて炒り、又は味噌漬とせば風味賞すべきなり。通常種及長絲瓜の二あり、甲は纖維用にして、乙は食用なり。四月上旬温床に下種し五月上旬頃移植するか、又は五月上旬本圃に直播すべし。何れにしても二尺の畦を作り、一尺五寸乃至二尺の距離に植ゑ、畦を造るべし。生食用のものは落花後一週日以内に摘み取るべし。

附記

瓜類には、べト病といふ、恐るべき病敵あり深く同種屬の後作を忌むべし。  
てんたうむし 瓜守葉蟲、エンマコ エンマコホロギ、いんこ 飛蝗、かみ 地蚤は 等作物の害蟲なり。

### 第八節 雜類

甘藷かんしょ（旋花科）

甘藷雜類

本邦西南地方にては米に次で之を貴重す。需要効用頗る大にして、又備荒作物に最も適するものなり。元來甘藷は熱帶地方の植物なるも、能く温帶の地方にも生育す。其性温暖にして降霜少きところを好み、輕軟にして表土深き砂壤土に適す。されど熱帶地方なれば敢て地質を選択するの要なし。品種は白、赤、紫の三種とす。川越球かわごえりゅう、琉りゅう、四十日高須たかす、どんこといとせ等は著名のものなり。

三月中旬幅六尺の温床に諸伏いもぶせを爲し、斯くて七八日に生長したる苗を採り餘り深挿せざる様に栽植す。株間一尺乃至一尺五寸、畦幅二三尺なり。肥料は堆肥、油粕、魚肥、磷肥にして砂地の外は一度に施用すべし。爾後數回除草中耕を爲し、蔓返しつるかへを行ひ、砂地には時々灌水を行ふべし。かくすれば八九月より十一月に涉りて收穫し得べし。甘藷は連作すれば收量減少すれども、形狀を整正ならしむ。紋羽病もんひよく、蔓割病つるわかれびょう、甘藷葉捲蟲かんしょのたまき、エビガラスマメ、コマメ、ラクサガメ等は甘藷の害敵なり。

青芋あをいも（天南星科）

一に黑芋くろいもと云ふ、栽培容易にして勞費少く、而も相應の收得ある作物に

して、新開地に移植するに適す。輕鬆にして乾燥に失せざる地を好み、降雨頻繁の年程收量多し。需根用と需莖用との二あり、青芋、八つ頭、蕪芋、唐の芋、ズイキ芋は著名の品種なり。之を栽培せんには四月下旬畑地を耕し、堆肥木灰米糠を施して二尺五寸内外の條を設け、一尺五寸を隔て、種芋を植立せしめて栽植すべし。爾後一二次水肥を施し、兒芋採收用のものは根部より發生する嫩芽を除去すべし。

薑 (薑科)

海外輸出品として收益多し。輕鬆膏腴なる土地にして適度の濕地を保てる處を愛し、暖地のものは一般美大にして且つ香味強し。品種多けれども本邦在來種と清國大薑との二種を最もよろしとす。春期麥の間に施肥し、一尺内外に距りに種薑を植ゑ、發芽後二三回耕して、盛夏には麥稈を布き以て乾燥を防ぐべし。收穫は降霜前に行ふを可とす。薑は連作を忌むが故に、黒芋と隔年に栽培すべし。軟化促成したる薑を軟化姜と云ふ。

蕪荷一名茗荷(薑料)

蕪荷

薑

古來本邦に栽培せられ、性陰濕の地を好む。繁殖は重に株分法による、即ち有機質に富める地に三尺幅の名を連續せしめ、四月上旬、凡そ六七寸の長さに切斷せる地下莖を植ゑ、堆肥人尿を施し、翌春發芽前に蕪芥又は粗殼或に蕪荷の莖葉にて根邊を覆ひ液肥を加ふべし。かくすれば夏秋に跨りて美大の嫩蕾を得べし。五六年を経ば衰弱するを以て新に植ゑ變へて、古根より發芽せしむべし。軟化用に供して可なり。

紫蘇(唇形科)

紫蘇

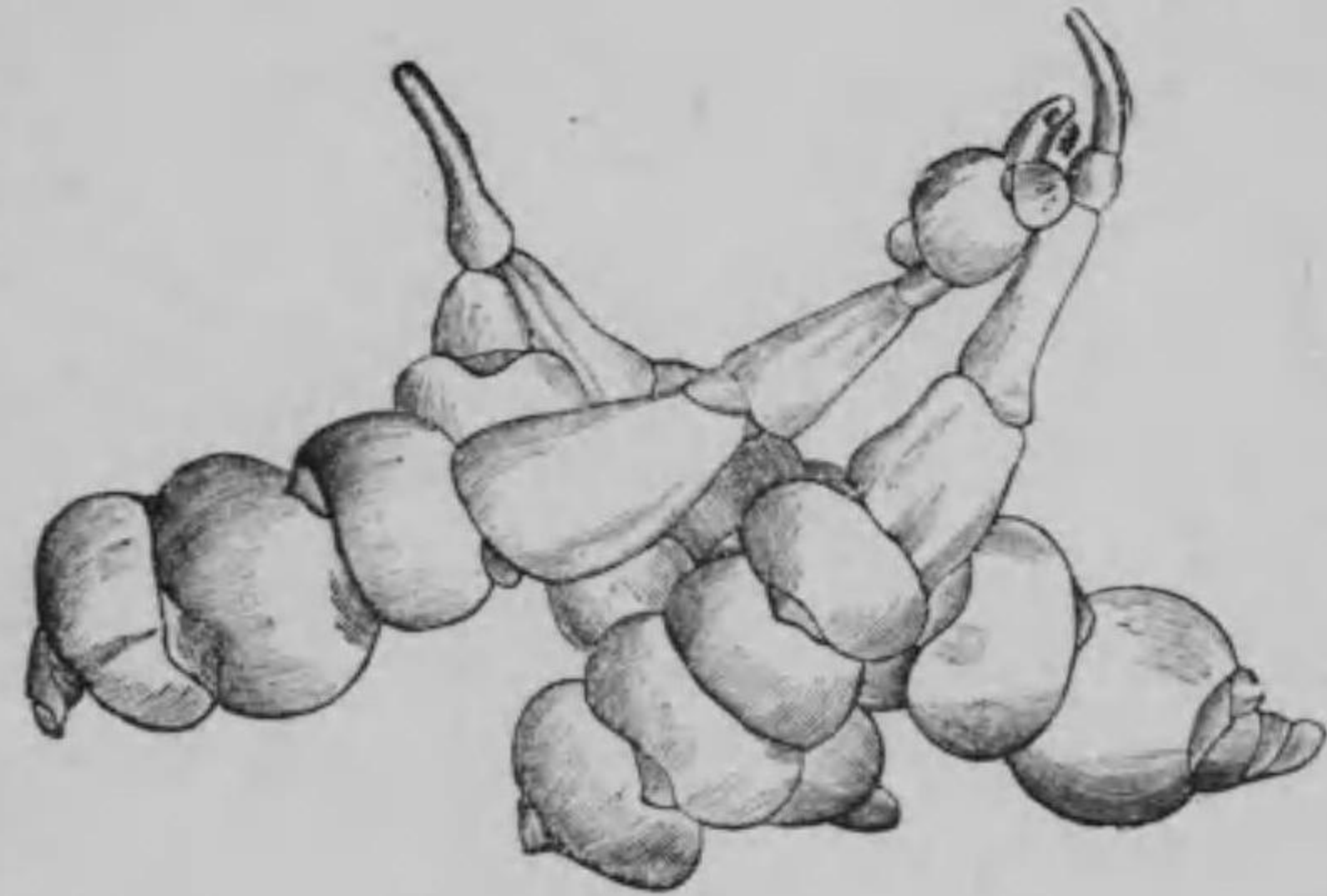
清國の原産にして本邦にては古くより栽植す。西洋にては専ら賞観用に供す。青紫蘇、赤紫蘇の二品種ありて、氣候を厭はず栽培も亦容易なり。之を栽植するには豌豆其他の短期植物の跡地に移植すべし。又、四月中旬直播して三四寸の距りに間引き、人尿尿を施して生育せしむるも可なり。

甘露子(唇形科)

甘露子

清國の原産にして本邦にてはある一地方にて栽培せらる。形薑兒に類するを以て草石薑の名あり。性寒氣に堪へ、陰濕の地にも能く生育す。

菠薐草



甘露子

三四月の頃三尺の畦上に二尺を隔て、一粒を下種すれば、八月下旬頃收穫するを得。堆肥・人糞尿を施すべし。收穫の際、根を殘存せしむれば翌春再び發生々育す。

菠薐草(藥科)

四季常用の蔬菜にして、殊に冬季は重寶なり。菠薐草は雌雄異株にして寒氣に堪へ、肥沃にして乾燥なる砂壤土を好む。通常二季に培養す。一は春種を下し、春夏に涉りて收穫し、二は秋季播種して秋より春に涉りて收穫するものなり。何れも二尺の畦上に條播し、間引を行ひ、時々液肥を施すべし。

薯蕷及佛掌薯(薯蕷科)

薯蕷及佛掌薯

薯蕷を栽培するには葉腋に生ずる零餘子を以てする法と、薯蕷を分切

栽植する法との二あり。表土深き、輕鬆の地を好み、砂地に良品を産す。四月の頃一尺を隔て、種薯を植ゑ、一間毎に六尺餘まり棒を立て、數段の繩を張りて纏繞せしむ、かくして肥培怠りなければ、年末に一年芋を得べし。大なるものを得んとするには更に一年を經過せしむべし。佛掌薯は前種の一種にして、之を栽培するには前種の如く深耕するに及ばず、一年を經過すれば肥大のもの得をべし。

土當歸(五加科)

土當歸

本邦特用の蔬菜にして、通常種と寒土當歸との二種類あり。寒土當歸は普通種に比して肥大甘味なり。普通種には赤芽・白芽の別あり。之を栽培するには、種子・根分・挿伏の三法あり。種子に因るものは春季播種して翌年移植す。培養法は石刁柏の如くすべし。挿伏によるものは九月下旬根元より切りて葉を除き、一尺五寸の壟上に横挿し、年内に根を生せしむ。

莓(薔薇科)

莓

宿根植物にして母株より糸狀の蔓を出し、其末は一節を出して葉を生じ、根を生じて一の株となる、いかなる土地にても生育すれども、肥沃な

四季莓

る深層土を好み殊に有機物に富む砂質壤土をよろしとす。品種は四季莓、大果莓の二とす。  
四季莓は種子にて繁殖せしむ、其法早春冷床に下種し、二回假植を行ひ、翌春一尺の距離にて本地に定植す。四季莓は春秋二季に收穫するを得べし。

大果莓

大果莓は本邦に栽培する西洋莓にして、マルゲリット、ルブルタン、ドクトル、モーレル、プレシデンド、シャープレル、ブランド、ワイン等を有名なる品種とす。種子にて繁殖を行へば變性するを以て株分を行ふ。其法三月頃根部に土壤を附して掘取り、夏季より設けたる床地に方一尺二三寸の距離に移植し、葉を根邊に撒布し開花せば摘花し、蔓を蔓延せしむれば數多の嫩苗を生ずるを以て、七月頃之を假植し、九月頃一尺三寸の畦に一尺五六寸を距て、栽植し、翌春葉を敷き、開花後蔓を除去し、培養を怠らざれば五月頃より採收し得べし。

江南竹

江南竹(孟宗竹)禾本科

清國の原産にして本邦にては寒地を除きて到る處に栽培せらる。性寒

蓮

氣を忌むこと甚だし、これを以て日常りよき膨軟肥沃なる地を好み、砂地并に乾燥し易き地は不適當なり。初夏二年生の新竹を掘り取り、八九尺の高さに切り、五坪に付き一本の割にて、堆肥落葉等を多施せる所に定植すべし。かくて時々塵芥、落葉等を與ふれば三年を経て多數の筍發生すべし。

蓮 (睡蓮科)

印度の原産にして、蔬菜用の外、觀賞用として栽培せらる。泥土深くして有機質に富める水田には自然に成長す。されど粘土質并に砂質にては其生育不良なり。蓮を繁殖せしむるには子實と根芽とに由るも、普通根芽に二節を附したるを採り、四月下旬、水田の水を流して、干鰯、大豆、人糞尿を施し、一坪に二本を挿し、二三日を経て水を湛へ、七月に至りて少許の干鰯を施し、絶えず五寸乃至八寸位水を湛ぎ、十月中旬頃より採掘に着手すべし。連年引續きて栽培せんと欲せば、六尺を隔て、一線に採掘し、六尺づゝは其儘となし置くべし。種子にて繁殖せしめんと欲せば、外殼を仁の見ゆるまで磨り研きて播下すべし。

慈姑

慈姑 (澤瀉科)

蔬菜として本邦及支那に栽培せらるゝ宿根草にして、水利の便ある肥沃の地を選び、十分耕耨して栽植すべし。品種は根の白色正圓なると青色楕圓形なるとの二あり。之を栽培するには、四五月の候、將に發芽せんとする種慈姑を、一坪に付き三十六個の割にて、淺く植ゑつけ、十二三日毎に除草すれば、漸次生長すべし。爾後は根を切らざるやうに注意せば、十一月より翌春に涉りて收穫する事を得。慈姑も亦連根の如く、適宜に種を殘存し置けば、毎年新植するの要なし。

附記

本項に述べたる各作物中、連根、慈姑は共に水田に栽培するものなれば、さく稻と輪作するを良しとす。江南竹は新換栽培法により、永く連作するを得べし。薯蕷土當歸及莓は三四年毎に他の科中の作物と輪作するをよろしとす。甘露子は連作するも可なれども、七八年後は他の作物と輪作すべし。其他甘藷、青芋、薑、藜蘆、紫蘇、菠薐草等は第一項其他の作物と適宜輪作するをよろしとす。

附記

果樹栽培

## 第二編 果樹栽培

果樹栽培は蔬菜に比して栽培年限著しく長しと雖も、亦農家の副業たるべき價値を有す。從來本邦にては、果物を以て間食物となし、たゞ一の嗜好品と爲せしに過ぎざりしが、今や肉食の盛なるに隨ひ、これが需要益々増大し來りぬ。されば農家は、居宅の附近又は堤塘空地等を相してこれに適應の果樹を栽培すれば、其利益亦少なからざるべし。今左に副業としての果樹培養法を述べべし。

### 第一章 通論

#### 第一節 苗木の植附

果樹の苗木は果樹園又は適當の場所に栽植するを可とす。其季節は秋季落葉後より春季發芽前迄の間なれども、大抵春季に行ふもの多し。果樹を植ふるには、枝梢の刈込を行ひ、不用の根を截斷するを要す。而して大木を移植せんと欲せば、三年前より、根廻しとして、其根周の三分の一を

苗木の植付

掘り、次年は殘餘の半を掘り、更に年を経て悉く掘り、根際に十分土を附し移植灌水して之に支柱を與ふべし。

### 第一節 果樹繁殖法

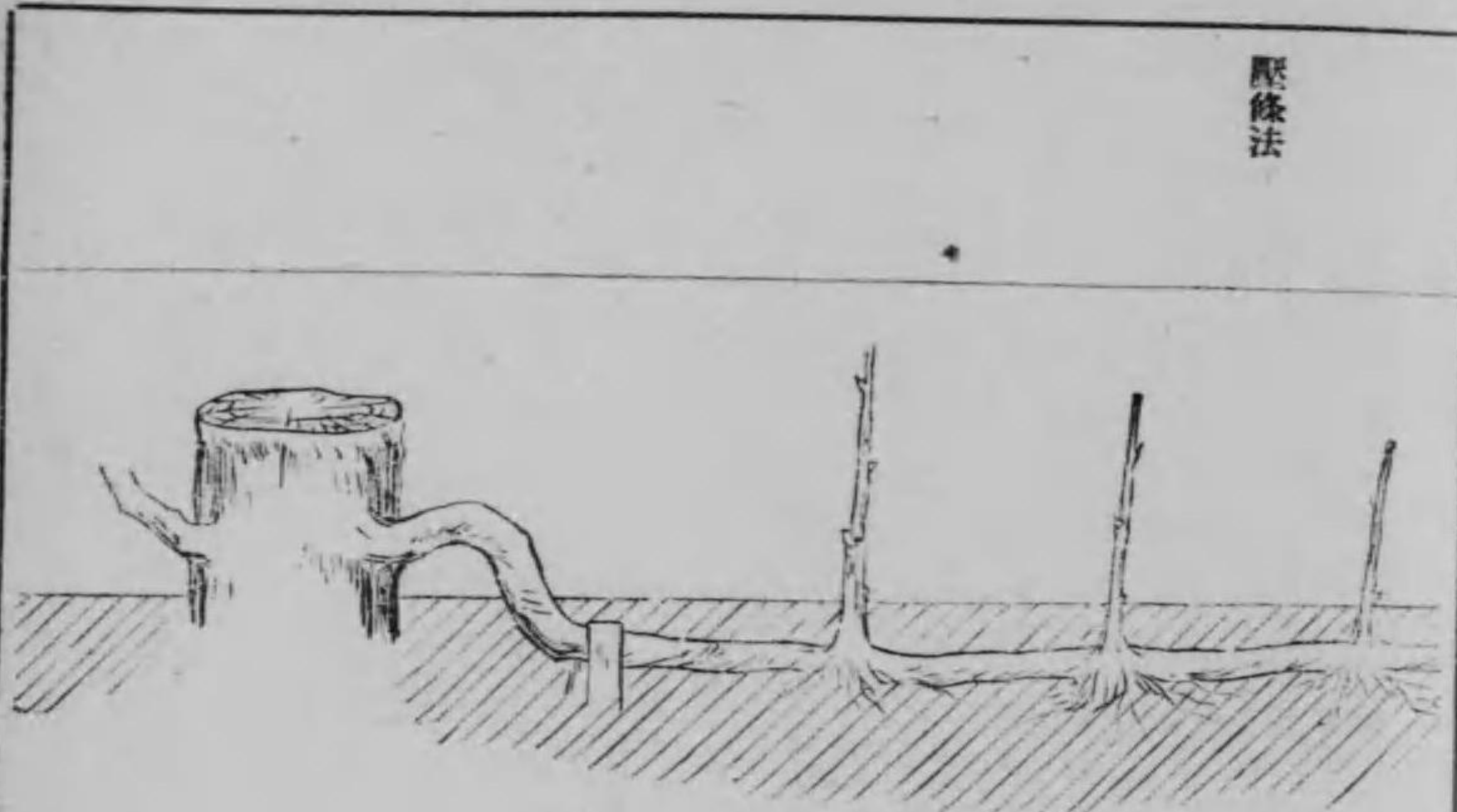
#### 實生法

果樹繁殖法  
實生法

實生法とは種子を播下して繁殖せしむる方法にして、凡ての作物は皆な多くこれによりて繁殖せらる。然れども果樹には往々種類によりて、種子を有せざるものあるのみならず、實生を行ふに於ては、性狀劣惡に陥り易きを以て、砧木用の外之を行はざるを普通とす。

實生を行はんと欲せば冬期より圃場を選びて耕し置き、翌春に至り、其種子の大なるものは之を條播し、其少なるものは之を撒播すべし。然る後時々灌水し、稈葉を被ひて濕氣の發散を防げば、やがて發芽するを以て被覆物を除き、時々除草を行ひ稀薄の水肥を與ふべし。而して砧木用のものには斷じて根際に土を寄するを避けざるべからず、然らざれば外皮をして粗雜ならしめ、接木の際非常の困難を感せしむべし。かうし

壓條法



法 條 壓

て育成せる苗木は翌春砧木用となす。

#### 壓條法

根の出易き果樹に行ふ繁殖法にして、果樹の枝條を地中に誘引壓下し、これより發根せしむるなり。壓條は春夏の兩期に行ひ、春期に行ふものは前年生の枝梢を用ひ、夏季に行ふものは、其年に發生せる枝梢を用ふ。即ち圖の如く地面に近き枝を曲げて地中に誘引し、之に被土して濕氣を與ふれば、やがて細根を生じ、強健なる苗木を得べし。總て壓條を行ふ場合には、小刀にて傷を附くるか、剝皮するをよろしとす、かくすれば發根を容易ならしむるの利あり。若し又貴重なる樹木にして、下枝の發生なきものに壓條を行はんとせば、鉢又は二分せる竹筒に土を盛りて、壓條せんと欲する

枝を傷けて之を挿み、鶏卵にて煉りたる土にて包み、繩にて緊縛し、絶えず濕氣を與ふれば其目的を達し得べし。壓條には撞木取、傘取、壅土取等あり。其苗は圃地に假植して後本圃に移すべし。

根合法

根分は株分の一なり。彼の櫻又は懸鈎子の如く、根際より分枝するの性あるものを根と共に母樹より離し、一個獨立の苗木とする法を云ふ。

挿木法

樹木の枝梢を切りて土中に挿入し、以て根を生せしめて獨立の苗木を得るの法にして、主として發根し易き果樹に行はる。

挿木には普通芽挿、枝挿の二あり。芽挿は多く泰西諸國に行はれ、枝挿は多く我國に行はる。其他根挿、葉挿等あるも、我國に行はるゝもの稀なり。枝挿は通常稚枝を用ひ、時機によりて春挿、夏挿、秋挿の別あり。

挿木は播種の際と同様、温熱、濕氣、空氣の三者を要するものなれば、管理者はこれに注意せざるべからず。挿木法には其種類頗る多けれども、その主なるものは左の如し。

挿木法の種類

一、筒挿 一に玉挿とも云ふ。挿穂の下端に筒の如く煉りたる赤土を丸め、こを挿すものにして、發根し難き種類に行ひて好果なり。

二、割挿 樹脂多き種類に行はる。其法挿穂の下端を縦に二裂又は四裂し、其割目に土塊を挟みて挿木す。

三、床挿 濕多き陰地に床を作りて、之に一尺乃至一尺五寸位に截斷せる挿穂を密挿し、日覆又は寒防を爲すべし。この法は、發根し難きものに行はる。

四、埋挿 葡萄の如き發根し易きものに行はる。埋挿は穂の三分の二位迄挿入す。

五、肉挿 種苗を繁殖せしむるに困難なる珍品奇種に行はる。春季發芽の頃、挿木とすべき穂の一部を直徑の三分の一程に挿削し、更に又反對の方向を同じ位削除し、其残りに粘土を塗り、紙にて包み、割竹を添加して折傷の患なからしむ。而して傷部に肉の發生したる頃下部より切断し、陰地に挿して日覆を施せば發根甚だ容易なり。此他、撞木挿、泥挿、横挿等あり。

接木法

接木法

接木の効用

他の枝條を取りて、砧木又は砧枝に接合する法にして、果樹繁殖法の最も普通なるものなり。今其の効用を擧ぐれば。

- 一、母樹の良性を失はしめずして、多數に繁殖せしむることを得、又た開花成熟期を速かならしむ。
- 二、老樹の勢力を恢復せしむ。
- 三、品質を佳良ならしむ。
- 四、矮性にして羸弱なる樹木をして強大ならしめ、又徒らに伸長する樹木を矮性ならしむ。
- 五、早生種を晩生種となし、晩生種を早生種に變せしむ。

接木を行ひて充分なる成績を得んと欲せば、共に健全なる接穂、接砧を撰ばざるべからず。而して接木の相癒着するは、樹幹内の木皮と、心材との間に在る軟薄なる發生層てふ部分の癒合するに由るなり。又接木は砧木の種類により生着の難易、結果の良否を生ず。今左に各種の穂に適應する砧木を示さん。

穂及砧木

穂 砧木

穂	砧木
苹果	梨・山梨・榎・大榎・ホケ・實生林檎等
梨	山梨・實生梨・榎等
柿	實生柿・君遷子等
枇杷	實生枇杷・榎等
榎	山梨・實生梨・實生榎等
蜜柑	柚・枳・殼・橘等
梅	桃・梅・李・杏等
桃	桃李・杏・巴丹杏等
櫻桃	實生櫻桃・山櫻・吉野櫻等
李	桃・杏・梅等
杏	杏・桃・梅・李等
葡萄	山葡萄・エビヅル等
栗	シハ栗
柘榴	柘榴



砧木は大抵實生苗の二三年を経過したる、周圍一寸五分乃至三寸位のものを  
用ふ。砧木には居接砧と堀上砧との二ありて、芽接は多く居接砧に行ひ枝接は堀上砧に行ふ。

接穂も亦砧木の如く其良好なるものを選まざるべからず。即ち前年に發生したる若梢の内に、生長旺盛なるものを選びべし。接穂を遠隔の地に送らんと欲せば穂の兩端に接蠟下に説明すを塗りて、蕪菁蘿蔔等の如きものに挿入し、竹筒又は箱中に濕土を入れて之を埋め、土の代りに水苔にてもよし、専ら乾燥を防ぐべし。而して送附し來れる接穂が萬一乾燥の爲め凋萎し居らば一二時間水中に浸して其勢力を恢復せしめ、もし接木に行ふ迄餘日あらば、濕ひたる蓆に包みて土中に埋め置くべし。

接木の期節、春夏秋の三期に行へども我國にては多く春期に行ふ。今普通に行はるゝ果樹切接法の期節を示さん、

種類 期節  
苹果 三月十日より同廿日頃迄

接種の荷造

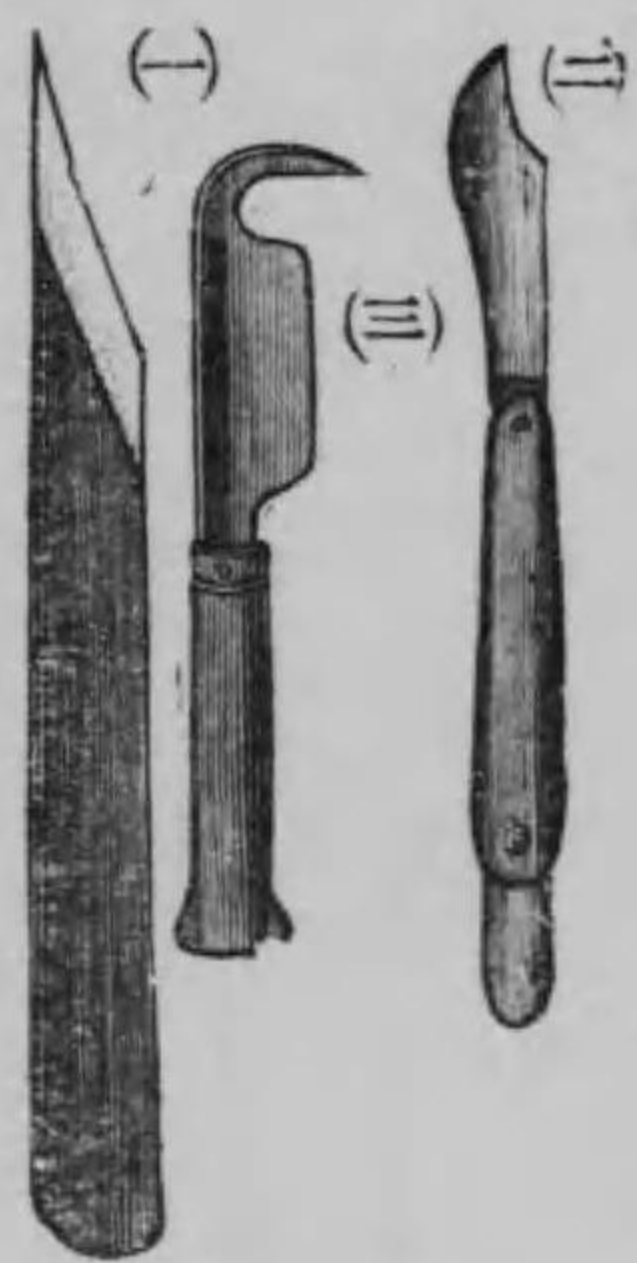
接木の期節

櫻	三月一日より同十五日頃迄
柿	四月十日より同廿日頃迄
枇杷	三月廿日より四月五日頃迄
榲桲	三月十五日より三月廿五日頃迄
蜜柑	四月廿日より同三十日頃迄
梅	三月一日より同十五日頃迄
桃	同
櫻桃	同
李	三月五日より同廿日頃迄
杏	同
葡萄	三月廿五日より四月十日頃迄
栗	三月十五日より同三十日頃迄
柘榴	三月廿日より同三十日頃迄

北海道にては之より凡そ一ヶ月位遅れしむをよろしとす。而して芽接法は五月乃至九月に行ふを常とす。

接木用具

接木用具 は小刀、鋸、鋏、接繩とす。鋸は大なる樹木、砧木、小枝を切るに用ひ、鋏は砧木の枝根及接穂を切り、小刀は切斷面を平滑に削るに用ふ。



刀 木

鋏は通常剪定鋏せんていばさみを使用し、小刀は切出しを使用す。接繩は大低打葉を貴び、芽接には疊用の蘭を用ふ、

接蠟 濕氣を導く患なく温

一、切出小刀、二、芽接刀、三、割接刀  
熱を招く恐れなき爲め接合部に塗沫するものなり。其製法種々あれども。

松脂十五匁

豚脂とら若くは牛脂十五匁、

蜜蠟三十匁

素焼鍋に松脂を温めて溶解せしめ、之に蜜蠟を加へ、後豚脂を加へて製す。

の調合法を最良とす。但し接木術に熟練なる人は接蠟を用ふるの要なし。

接木の方法

接木の方法

枝接と芽接との二法あり。今枝接法より説明せん、

切接法

一、切接法

最も普進に行はるゝ方法にして施術容易にして、接着の

歩合も亦頗る多し。其法春期發芽前二三年生の砧木の根元二三寸を殘して上部を切截し、所謂發生層を切下ぐる事一寸、尙内部の下方を薄く



法 接 切

削り取るべし。接穂は長さ一寸五分乃至二三寸一芽又は二芽を有するものにして、其下端を斜に切下し其側面を削り去る事八分乃至一寸、又

割接法

其反對の部分二三分程の長さに、深く木心に切下げ、之を口中に含みて砧木の裝置を成し、後之を砧木にさしこみ、兩者の發生層を相接觸せしめて、上部を打蕪にて緊縛し、接蠟を塗抹せる布片にて縛るべし。

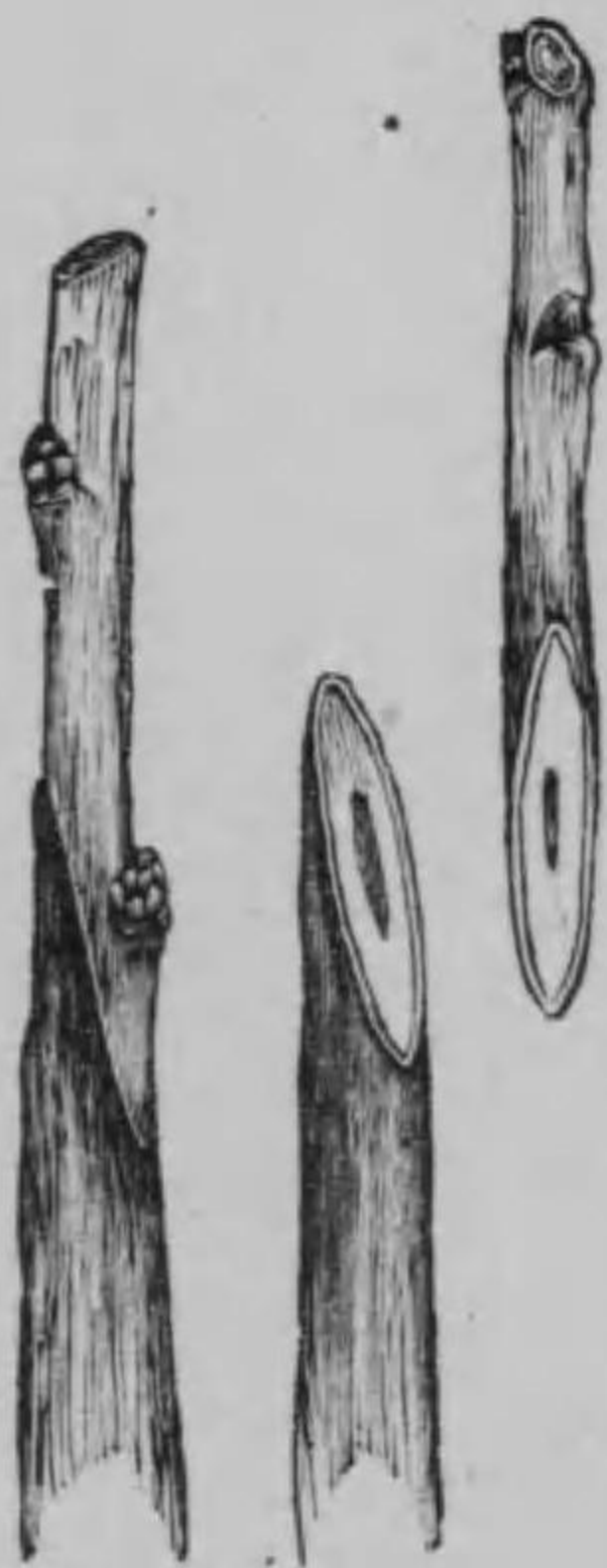
搭接法

二、割接法 接穂は兩側より楔形くさびがたに削り、砧木を二つ又は四つ割とし、内面を削る事少し許り、之に接穂を挿入し砧木の葉にて上部を覆ひ蕪にて緩縛すべし。

三、搭接法

砧木接穂同様の大きさを有するものに行ふ、兩者を一寸位

合接法



法接搭

に滑に削りて相密着せしむる法なり。  
四合接法 切接に類似す。其法砧木の接断面を稍や斜ならし

鞍接法

め一側面を一寸許切取り、接穂も之に應じて切截し、以て密着せしむ。  
五鞍接法 搭接の如く砧木接穂の大きさ等しきものに行ふ。其法砧木を楔形に切り、接穂を鞍形に削り之を密着せしむる法あり。二の法は施術に熟練を要するが故に廣く行はれず。

舌接法

六舌接法 割接と搭接とを兼ねたるものにして、其法先づ砧木と接穂を搭接の如く削り、断面の三分の一の處を切割りて舌状となし、舌と舌とを密着抱合せしむ。

挿接法

七挿接法 湿润なる土地に穂を挿植したるまゝ、之を砧木に接合せしむること左圖の如し。此法は穂接の勢力弱くして萎凋し易きものに行ふ。

腹接法



鞍接法

八、腹接法 直ちに切口を接かず、



法接舌

これよりや、下部の皮を切り開き、接穂を楔形に削りて其間に挿入する法なり。木の枝梢の一部

寄接法



法接挿

枯死して空虚となりたる場合、又は多年結果せざる樹木、又は他の良種と接換する場合に多く行はる。  
九寄接法 一に呼接と云ひ樹枝を互に寄せて、束縛癒合せしむ、其法接木を

根接法

成さんとする砧木の側に接穂に供すべきものを植え、腹部を少し削りて密着せしめて縛り置くべし。接着の後は接木の下部を切離すべし。  
十、根接法 舌接に類似せるものにして、砧木は根部を使用す。砧木の少き場合又は定数の砧木を以て一層多くの砧木を得んとする際に行ふ。

芽接法

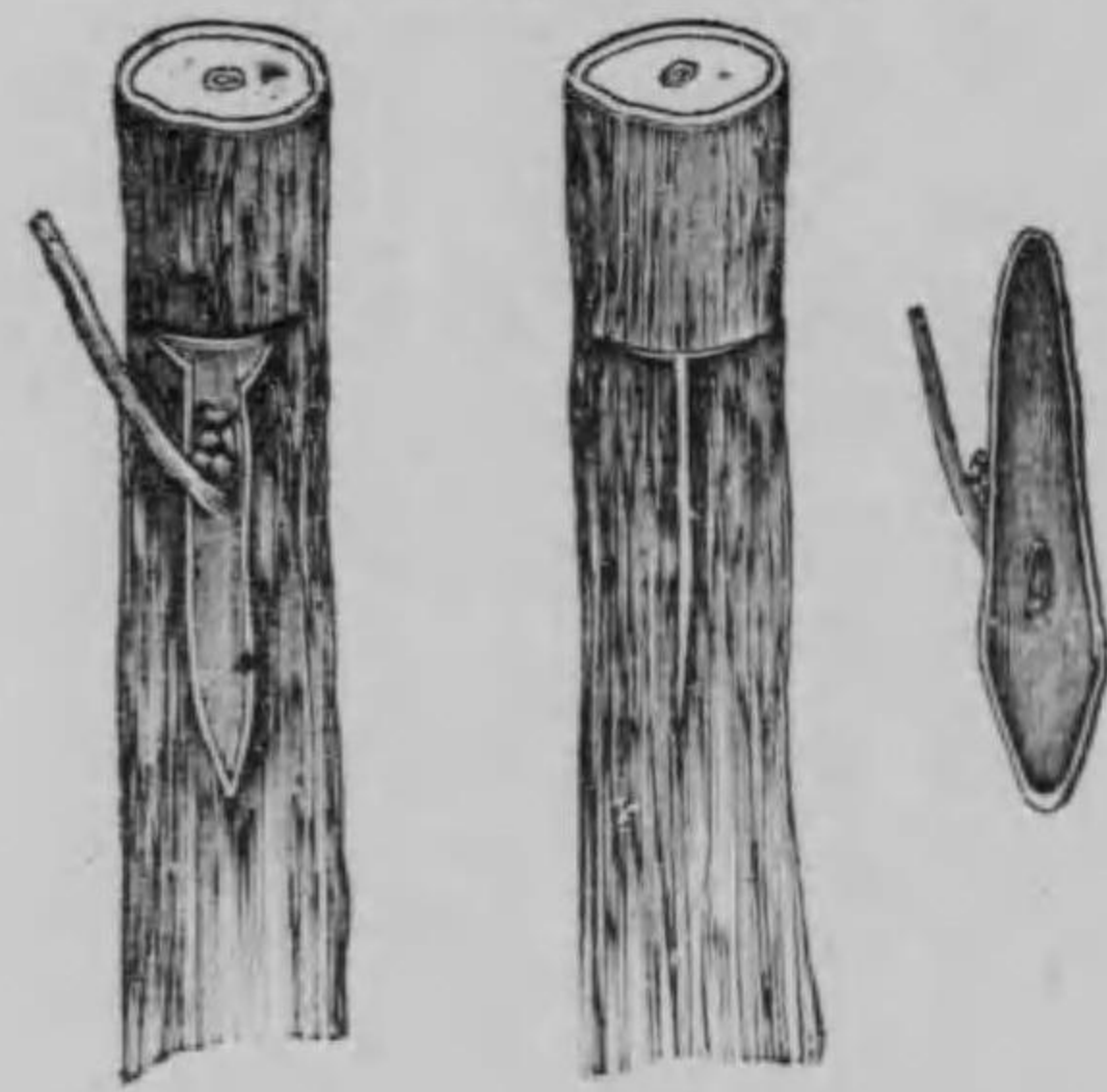
十一、芽接法 接穂の芽に周囲の皮を附着せしめ、砧木の皮下に挿入するなり。

芽接の方法

芽接に用ひる砧木は一年生乃至四年生のものを用ひ、必ず同科同属同種類のものたらざるべからず。而して接芽は常春の發生にかゝる枝梢中、中央部に存在するものを選び、砧木の接部は必ず北向ならしむべし。芽接を行ふには朝夕又は曇天にして風なき日を可とす。而して砧木の皮を剥ぐには竹篋又は角篋を用ひ、接芽を截切するには鋭利の小刀にて芽の上部又は下部を去る五分内外の處に横に切れ目を入れ、皮部及び發生層を切り、之を上下反對の方向より削り取り、厚薄なき様注意すべし。削りたる芽は枝接に於ける如く、之を砧木に挿入する迄口

芽接法の効用

法接芽形字丁



圖レタキ接 木 砧 芽接

に含むべし。砧木に接芽を挿入せば、砧木の皮をして能く接芽に密着せしめ、打藁にて緩縛すべし。芽接の効力を擧ぐれば、

- 一、もし其手術を誤るも、再三之を行ひ得べく、砧木を衰弱せしむる事なく、且つ活着の歩合多し。
- 二、手術容易なり。

三、多數の砧木に稼接せしむるの利あり。

四、活着早く、従つて癒合迅速なる故、接合部の折傷する事なし。

芽接には左の種類あり。

一、丁字形芽接法、平滑なる新枝の皮を竹篋又は角篋にて丁字形に開張し、之に接芽を箆挿して打藁にて巻縛するなり。此法は尤も普通に行はるゝ芽接法なりとす。

芽接法の種類  
丁字形芽接法

上字形芽接法

二、上字形芽接法

丁字形と反對に砧木を負傷せしむれば可なり。

十字形芽接法

三、十字形芽接法

砧木を上部を短く、下部を長く十字形に負傷せしめて芽接する法なり。砧木の割に接芽の大なる場合に行はる。

剝皮芽接法

四、剝皮芽接法

砧木の一部を剝ぎ取りて接着せしむる法なり。此法に環状芽接法と方形芽接との二あり。甲は接芽の周圍を環状に剝皮するを云ひ、乙は之を方形に剝ぐなり。

内山芽接法

五、内山芽接法

砧木の皮に、上部より淺く削目を入れ、接芽を之と同様に削りて嵌挿し、砧木の皮を覆ひて下部より順次卷縛するの法なり。

内山氏の發明にかゝる、手術容易なるものにして多數の苗木を芽接するに行はる。

### 第三節 剪定及整枝

剪定及整枝

剪定とは果樹の枝梢を除去するの法にして、唯に不用の枝芽を除去するに止らず、枝形を整へ、樹液の循環を平等ならしめ、日光の映射、空氣の流通を佳良ならしめ、以て美大なる果實を多量に收穫するに在り。今其

利益及必要

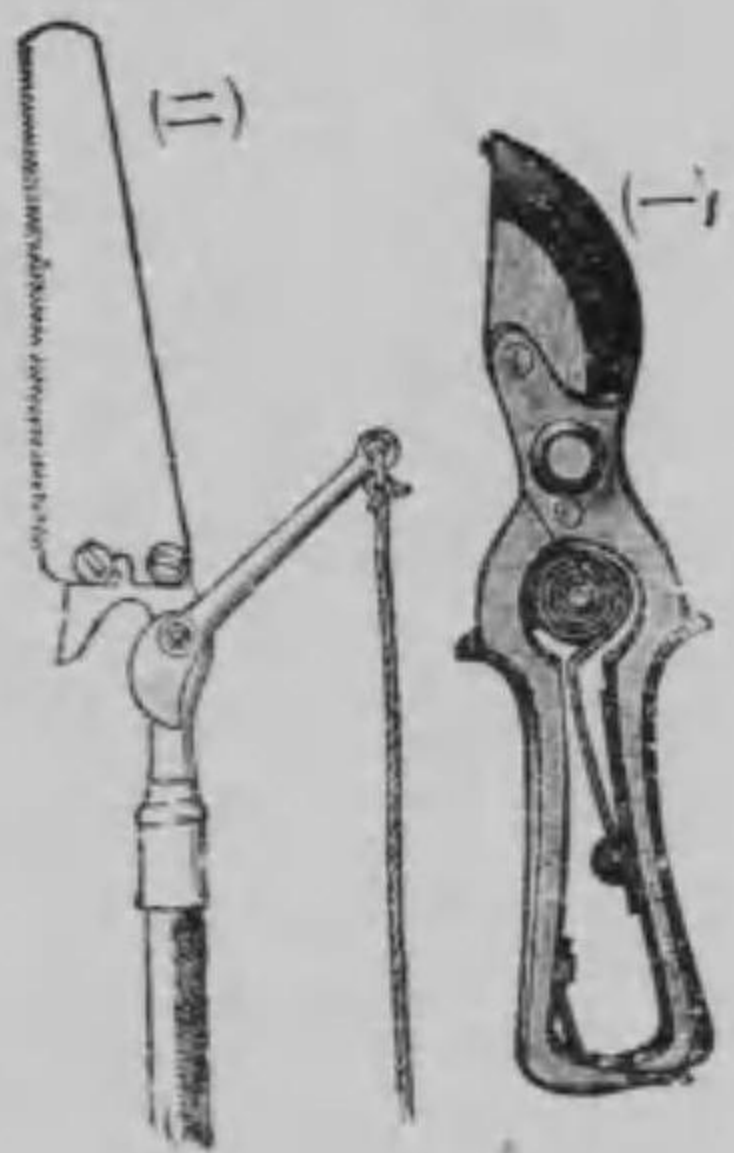
利益と必要なる條件を擧ぐれば左のごとし

- 一、剪定法は果樹の生育を強盛ならしむ。
  - 二、剪定法は樹枝を整へ其生育を均一ならしむ。
  - 三、剪定法は花蕾及果實の數量を増し、且其品質を良好ならしむ。
  - 四、剪定法は管に品質を良好ならしむるに止らず、其産額を増加せしむ。
  - 五、剪定法は生長過度のものを抑制し、以て早く果實を結ばしむ。
  - 六、剪定法は地積を節約せしむ。
  - 七、剪定法は病蟲害を減少せしむ。
- 又剪定を行ふに當り注意すべき必要條件を擧ぐれば左の如し。
- 一、樹勢強壯なる枝は之を壓下し、弱枝は壓上すべし。
  - 二、摘芽は多く強枝に行ひ、張枝には行ふべからず。
  - 三、強枝に生せる葉は勉めて之を除き、弱枝の葉は勉めて保存せしむべし。
  - 四、強枝の果實は長く成熟せしめ弱枝のものは速に採收すべし。

剪定の種類

- 五、強枝は日蔭ひかげに向はしめ、弱枝は日光に向はしむ。
- 六、無用の枝は勉めて切取り、果實を結ばしむべき枝は其梢のみを摘去るべし。
- 七、剪定の時機は發育衰へたる時機に於てすべし。
- 八、花蕾多く生ずる時は適宜に之を除くべし。
- 九、剪定を行ふには利刃を用ひ、斜に切斷して必ず滑ならしめ、其上端は芽と同じ高さとし、其部を芽の基部と同一の處にあらしむべし。
- 十、果樹は移植の際、支根を適度に短截すべし。

剪定鋏



剪定とは、剪枝、支根切除、摘芽、除果等の總稱にして、通常冬期及夏季の兩期に行ふ、而して剪定と整枝とは鳥の兩翼、車の兩輪の如く互に相離るべからざるものなり。今左に整枝の方式を述べん。

整枝の種類

整枝は唯に外觀を裝ふに止らず、小地積より比較的多量の産額を得るものとす。之を大別して立木作垣作、棚作の三とす。立木作中には、圓錐形（ピラミット）仕立法、盃狀仕立法、圓頭形仕立法、扁頭形仕立法等あり。垣作中にはカンテラ、コルドン仕立法、パルメット仕立法、扇狀仕立法、水平仕立法等あり。棚作とは本垣の周圍に枝條を排置するものにして、本邦にて古昔より、葡萄、梨等に行ふの法なり。

垣作の方法

果樹の類別

第四節 果樹の類別

果樹は之を、一、仁果類、二、核果類、三、漿果類、四、乾果類の四類に分つ。

- 一、仁果類
  - 一、苹果、二、梨、三、柿、四、枇杷、五、温梓、六、柘榴、七、柑橘類等。
- 二、核果類
  - 一、梅、二、桃、三、櫻桃、四、李、五、杏、六、棗等。
- 三、漿果類
  - 一、葡萄、二、無花果、三、グロースベリー等。

- 四、梨果類
  - 一、栗
  - 二、胡桃
  - 三、榛
  - 四、銀杏
  - 五、榧
- 今右順次之を記述すべし。

### 第二章 各論

#### 第一節 仁果類

苹果

各論  
紅果類  
苹果類

西部亞細亞及び東部歐羅巴の原産にして我國に輸入せられたるは明治五六年の頃なり。苹果は常に生食に供するのみならず、干果、鹽藏、砂糖漬とし或は苹果酒、舍利別を製す。性寒氣を好み、排水良しき砂質壤土を愛するが故に、特に乾燥堅實の處を撰むべし。土地良好なれば氣候の如何に關せず能く生育す。品種には早中晩の別ありて、アストラカンルーシュ(紅魁)・ジョセフキン、クローター(祝)又は中成子(紅絞)・紅玉(千成)又は滿紅(柳玉)・柳王又は蔓長(赤龍)・鳳凰卵(生娘)日の出(國光)・晚成子等は有名のものなり。苹果の繁殖は接木法(切接芽接)に由り翌春に至りて五六寸を距て採穂の附着せる方を南向として之を假植すべし。本圃には肥料を施

苹果の種類

梨

し三四間を距て、定植すべし。かくすれば四五年にて成果を見る。仕立法は立木作を可とし、肥料は秋季より春季の間に施す。綿蟲、介殼蟲、果蠹蟲、惧冷、尺蠖、烏蠅、象鼻蟲及び萎黃病、兔野鼠、鳥等の被害あり。

梨

古來より内外共に賞用され、外國にては酒造用、菓子用等其用途頗る廣し、梨はその性寒地好む。故に溫地にては北面の傾斜地、寒地にては南面の傾斜地に栽培すべし。排水良好なる深層肥沃の砂質壤土を最もよろしとす。多雨又は乾燥を忌むこと甚だし、品種は外國種よりも寧ろ内國種を貴ぶ。内國種中泡雪、世界一長十郎、大平力、彌玉、水赤龍、明月初霜を良好のものとし、繁殖法は専ら接木法による。而して實生及挿木により得たる苗を砧木に用ひ、接木は切接及芽接にして栽植法、苹果と同じ。仕立方は種々あれども、我が邦にては古來より棚作を行ふ。剪定法は梨樹に取りて甚だ必要にして、晩秋に行ひ、勉めて葉芽を減じ、花芽を多からしむべし。施肥は苹果と同じく、人尿、油粕、米糖、干鰯を用ふ。之を收穫するには晴朗の日を卜し、果實を損傷せざる様にすべし。何れの果實も皆

同じ象鼻虫の害に罹る際は澁紙にて果實を包み置き收穫の前に至りて除去すべし。病害虫は翠果と異ならず。

柿

東洋の原産にして古來より本邦に栽培せられ、其用途頗る廣し。性氣候を選ばず寒晝の變化甚だしからざる所の外、何れの地にも培養せらる。砂質壤土を愛し、粘土之に次ぐ。品種には甘柿、澁柿の二ありて鶴の子霜丸、百目柿、無核衣紋、蜂屋柿、御所柿、禪寺丸、ヒガキ、信濃柿、君遷子、代々丸等は就中著名のものなり。主として接木法により繁殖せしむ。柿樹は普通喬木仕立となせり、而して樹姿は長圓錐形扁頭形を可とし、隔年に剪枝を行ふ時は柿樹の常癩たる年によりて豊凶あるを防ぐ事を得べし。甘柿は澁味全く去りたる頃を見計ひて收穫すべし。介殼虫、イラ虫、金龜子の害を被ることあり。

枇杷

東洋の原産なり。温暖をる氣候に適し、海邊に於て良種を出す。土質は粘質砂土を最良とす。乾燥の地なれば結果多く、風味佳良なるも大果を得

難し。肥沃にして適濕の地は美大の果を得るも味淡泊なり。本邦種よりも清國種を良好とす。唐枇杷、田中枇杷等を有名の品種とす。實生又は挿木によりて繁殖せしむる事あるも、通常枝接法を行ふ。是れ栽植するには二間半乃至三間の距離を保たしめ、盆狀又は扁頭形に仕立てて能く新古の枝梢を見分け(春芽發生せる枝に花を附く)。夏期剪定を行ふべし。天牛の幼蟲、鐵砲蟲等の害を被ることあり。

楓棗

楓棗は生食用として栽培するよりも、砧木用又は製造用に供せらるゝ事多し。本邦何れの地にも適せせるなく、殊に寒地に適し、有機質に富める砂壤土を愛す。繁殖法は接木により、砧木用のものは壓條、挿木を行ふべし。

柘榴

東印度の原産にして食用及び觀賞用として廣く世界に栽培せらる。種々濕潤にして硬き壤土を愛し、輕鬆にして乾燥なる地に適せず。其性强健なれども寒地を忌む。花に紅色なると、白色なるとあり、果實にも亦甘



味なりと、酸味なりとあり、甘實柘榴、水晶柘榴は就中良種なりとす。繁殖法は實生又は挿木による。春秋の候剪定を行ひ、人尿、堆肥、塵芥を施す。

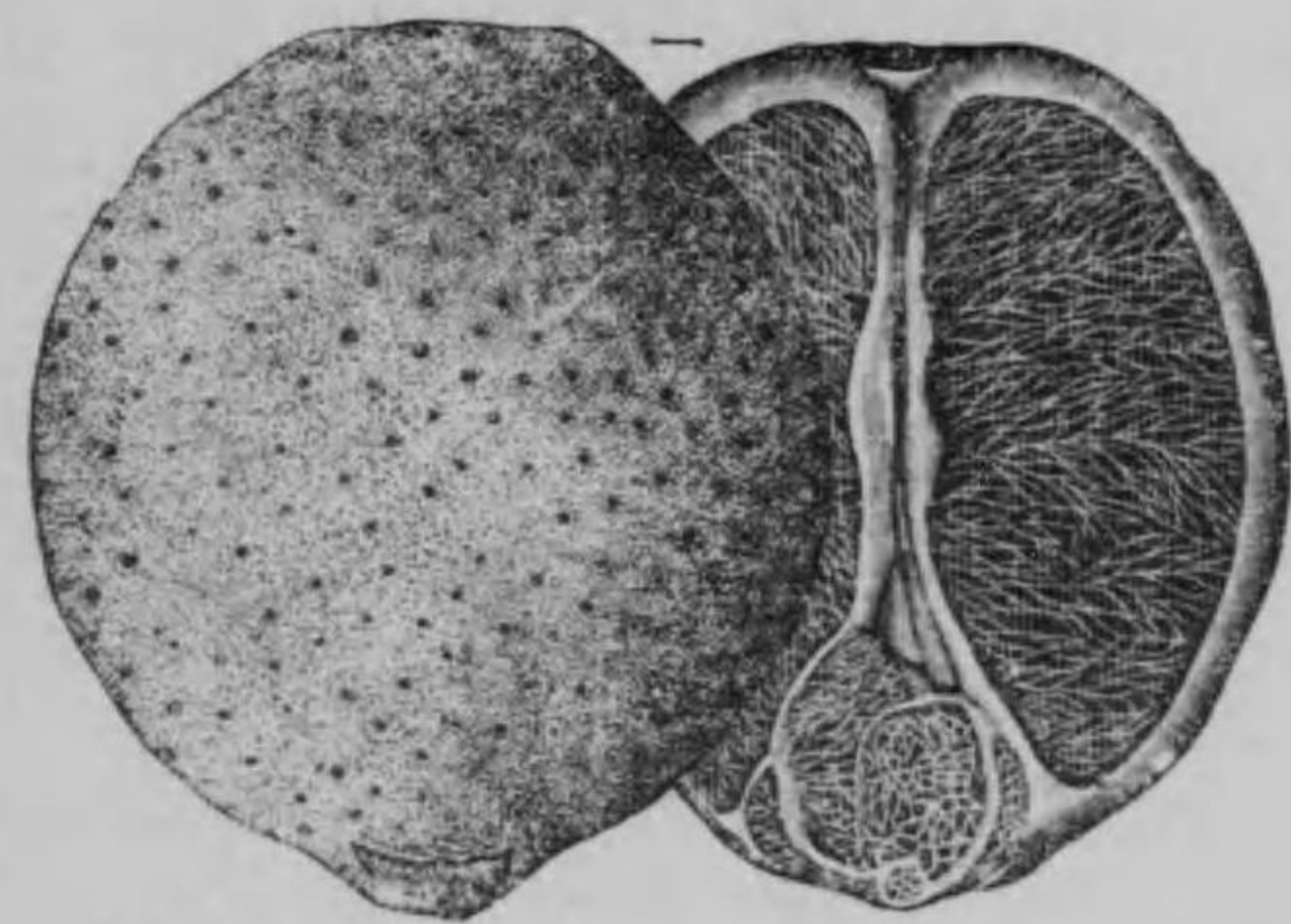
柑橘類

古來より本邦に嗜好せられし果物にして、現時多く海外に輸出せらる。生食の外、需要頗る多し。氣候溫暖にして西北山を負ひ、東南海に面し強風又は寒風の少き處を可とす。土質は高燥にして排水宜しき輕重適度な

柑橘類  
種類

蕃殖法

ル プ ー ネ



る壤土を可とす。柑橘は其種類頗る多きも其主用なるは、溫洲蜜柑、紀洲蜜柑、夏蜜柑、八代蜜柑、紅蜜柑、包橘、向青橙、朱欖、文旦、金柑、柚、佛手柑、香欖、檸檬、オレンジ、ワシントンネーブル、オレンジ等とす。接木、挿木、實生、及び壓條法によりて之を繁殖せしむ。接木を成せし苗は第三年目に至り三四月頃之を本圃に移植す。肥料は人尿、油粕、厩肥、干鰯、鱗肥を施用すべし。

柑橘は彼の梨、桃の如く、葉腋に花を生ずるにあらすして、枝梢の末端に開花結實するものなれば、剪定の際には殊に注意を要す。從來本邦の習として、柑橘類には剪定を行はざれども之を行ふときは樹の老衰を防ぎ、結果を多からしめ、且つ品質を佳良ならしむるの効あり。又柑橘の枝梢は繁茂し易きを以て、常に注意して風光の疏通をよくし、豊年には摘果法を行ふべし。類は能く貯藏に堪ふ。病害は煤病、害蟲には介殼蟲、蚜蟲、鐵砲蟲等其主なるものとす。

第二節 核果類

梅

核果類

其花の瀟洒として香氣の馥郁たるのみにあらず、實は梅干、蜜漬糖藏及び菓子原料として廣く需用せらる。本邦にては古昔より之を賞用せり。梅は各地の風土によく生育すれども、温暖にして風害少き肥沃なる砂質壤土を可とす。其品種四十餘種あれども、實梅には豊後、白加賀、太平梅等あり。又觀賞用には一歲、八朔(一名皆紅香篆梅等)を主なるものとす。

實蒔、挿木、接木によりて之を繁殖せしむ。他樹に比して剪定を要する事少し。蝸蝓、蚜蟲、介殼蟲、避債蟲は梅樹の害蟲なり。

桃

花實共に美にして我邦古來盛に之を培養せり。稍々暖地を好む故に本州の北部には不適當なり。此樹は河川の沿岸、砂多き地にして餘り肥沃ならざる地を好み、有機質の多き所を嫌忌す。即ち肥沃の地なれば繁茂に過ぎ、樹脂多くして美果を得る事難し。今内外の主なる品種を示せば、

水蜜桃(上海、天津、蟠桃、白蜜桃)アイムスデンジュ

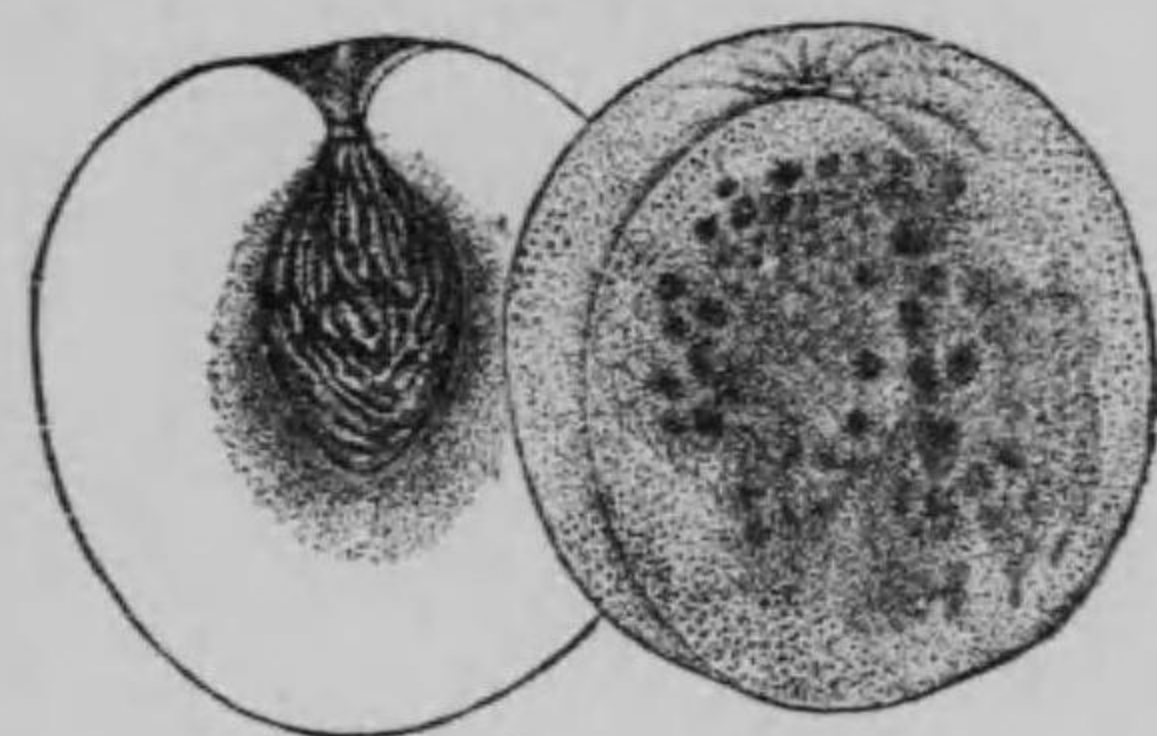
ーン。アイリリー、リュエル、アイリリー、アメリカン、ク

ローフオールド、ミユール、セラースクリング、歴山

王油桃(無毛桃)等なり。

桃は専ら接木によりて繁殖せしむ。而して其仕立方は立木作には盃狀を普通とし、垣作にはカンデラブル、バルメット、ホリアンタルを通例とす。桃樹は樹勢強盛なるを以て、剪枝と樹脂の摘

桃蜜水海上



桃

種類

除とに注意すべし。桃實は貯藏に堪えざるを以て、朝夕顆の冷えたる頃之を採收すべし。蝸蝓、果蠹蟲、象鼻蟲、介殼蟲、縮葉病、黒腐病の害敵あり。

櫻(洋名ナエリ)

我國の櫻樹に似たるも果は美大にして甘美なり、生食用の外櫻桃酒を醸す。十年前より我國に栽培され、輒近に至りて益々盛大となれり。これ

櫻樹は其熟期早きを以て利益多きが故

なり。櫻桃は其栽培區域廣く、寒暖兩地に

適するが如し。高燥なる壤土又は砂質壤

土を好み、粘重なる濕土を忌む。本邦にて

は東北地方及北海道に良品を産す。品種

はブラックタターアン、アイリスチエー

フ、ガバーナーウード、アイリリー、パープル

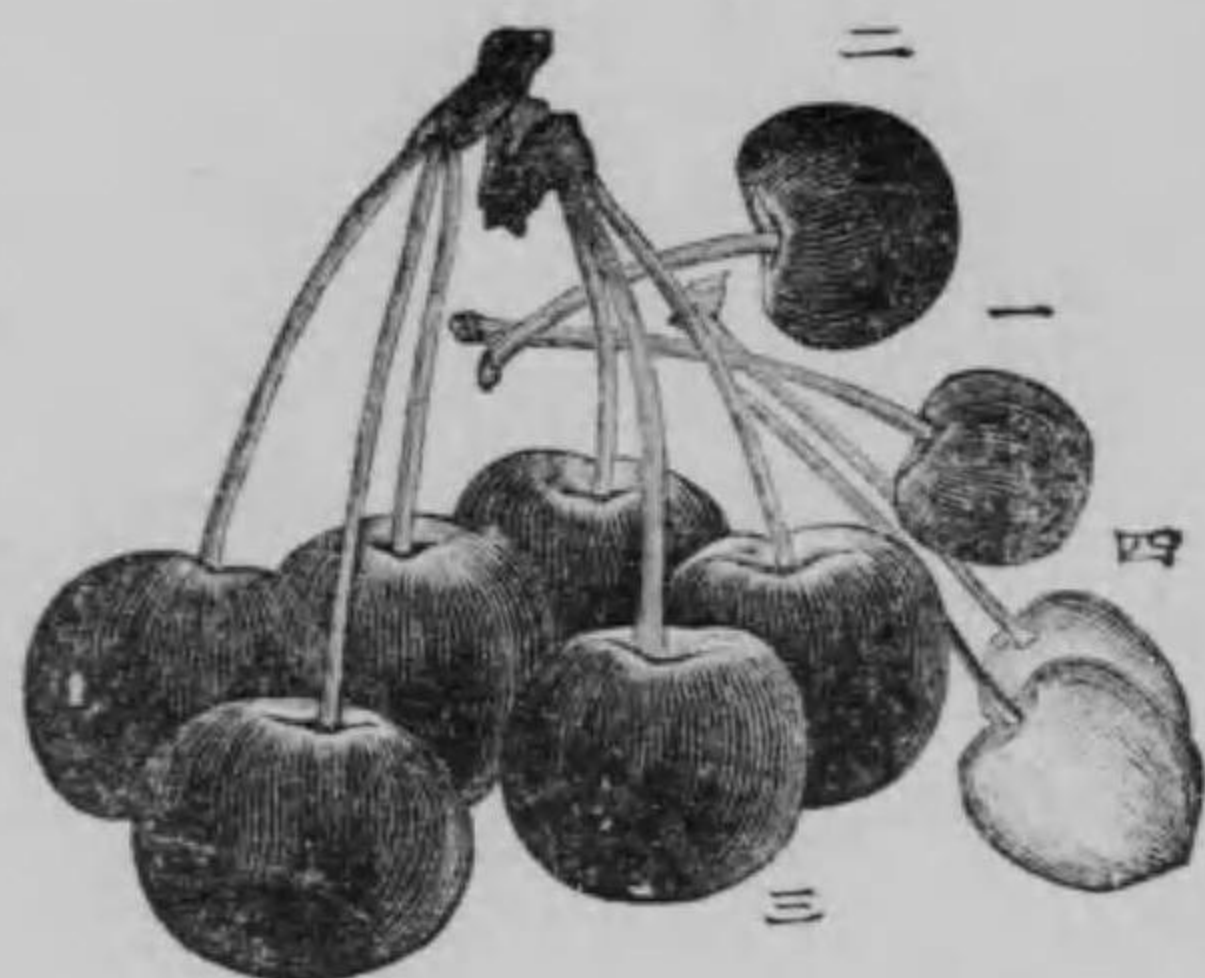
ギーニー、アイリリー、リッツモンド、エルト

ン、モンロー、レート、チニーク等有名なり。

之を繁殖せしむるには、實生、萌蘖又は接

櫻桃

桃 櫻



- 一、アイリリー、パープルギニー
- 二、ガバーナーウード
- 三、アラネグ、タータリアン
- 四、エルトン

李

木法により、品種及び風土によりて長幹或は短幹に仕立つ。

李

生食の外、乾果に製し、ジャム及び砂糖漬となす。本邦至るところ栽培し得べく、土質も亦選ぶところなしと云へども、粘質壤土を最もよろしとす。巴丹杏、牡丹杏、ヨネモ、シルバ、ブルー、フレンチ、ブルー、エツグ、プラム等は有名なる品種なり。接木、挿木に由り之を繁殖せしむ。移植、剪定は共に十二月より二月に涉りて行ふべし。仕立法は桃に同じく、人尿、油粕、干鰯を施肥す。介殼蟲、避債蟲、蚜蟲、蝨、煤病、フクロミ病の害敵あり。

杏

生食の外、ジャムを製し、砂糖漬となし、又は乾杏となす。等種々の調理に用ふ。温暖乾燥なる砂質壤土を好み、濕潤の地を嫌忌す。外國産は概して大果にして風味亦勝れたり。ライマ、アーリー、アフリコット、アーリー、ゴールデンセント、アンプロイズ等は就中著名の品種なり。繁殖法は接木法による。栽培、剪枝は李に同じ。施肥は落葉後になすべし。時に晩霜の害に罹る事あれば注意すべし。

棗

棗

生食するの外、之を乾果となすべく、薬用にも供せらる。暖地の産なるを以て嚴寒に堪ふる態はず、肥沃にして適濕の地を好み、乾燥の地は不適當なりとす。品種は本邦種、西洋種等數種あれども、特に清國産の大棗を優等とす。分株は挿木を行ふて之を繁殖せしむ。

第三節 漿果類

葡萄

葡萄は生食用として人を喜ばし、むるのみならず、葡萄酒、シャンパン、ブランデー等十數種の酒を醸し得べく、或は干葡萄となし、又は調理用に供する等其需要頗る多し。其最適の地は夏秋の候温暖にして雨量少く、大氣乾燥し且つ日射よろしき所とす。土質は礫質の壤土を好み、殊に加里鹽類に富める地を愛す。地勢は東南に傾斜せる強風の恐なき處をよるしとす。葡萄は培養に意を用ふるに於ては、たとへ風土不適當なる處にても良結果を得るに難からず。本邦の風土は能く葡萄に適すと雖ど

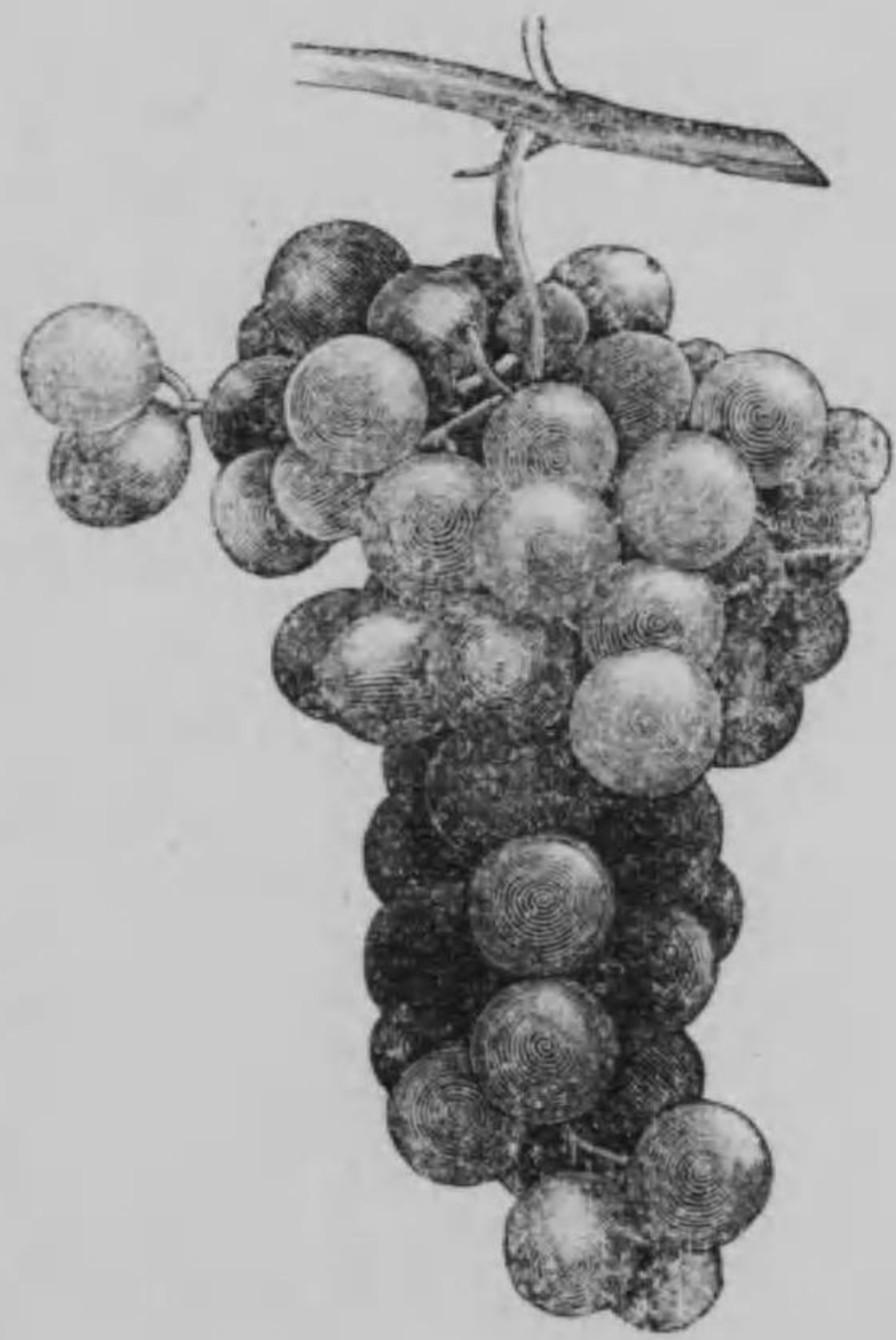
漿果類  
葡萄

種類

蕃殖法

も、開花期に降雨多きを以て、其割に結實少なし。葡萄の品種はほとんど二十種あるも今その主なるものを示せば、甲州葡萄、パレストアイン、チャンピオン、ブラック、ハンボルク、ブラシク、シンファンデル、アームスダイヤモンド、ホワイト、スウキートウオーター、ハーバート、イサベラ、ダイア

スルミ



ナ、ミルス等なり。葡萄は挿木及び壓條法によりて繁殖せしめ、本邦にては之を棚作となす。其法甲州葡萄の如く能く繁茂するものは、あらかじめ一坪一本の割に大なる穴を穿ち、底部に砂礫を敷くと五寸許り、更に腐熟せる堆肥を入れ、土を被ひて定植し、根際に藁、干草等を布くべし。而して其苗の傍に支柱を樹て、周圍六尺の四隅に杭を打ち、高さ六尺の處に竹竿を横へ、更に一尺五

シイタスレバ



六寸を隔て、縦横に鐵線か竹竿を渡して棚を造るべし。而して生長せる苗を三四尺の高さに切り、て數枝を出さしめ、翌春二枝を残して二三尺の高さに切りとり、各々二枝を出さしむべし。かくすれば四條の主枝を得るを以て棚の四隅に誘引し、各主枝を一尺五六寸に切り、三四枝宛を誘引し、中一本を其隅に配し、他の三枝を其左右に誘ふべし。年々かく

壓條法

すれば遂に棚面を被ふに至る。  
 壓條を行はんには晩秋より翌春迄の間に新梢の長く延びたるものを地上に誘引して、蔓の中程、一尺—一尺五寸許りを地中に壓下埋伏せしめ、剥皮法を施して新梢を出さしめ、夏期に至りて一二を残して之を切り、秋に至り一尺五寸許りに切りて翌春定植するなり。  
 本圃に定植せる後は徒枝を除きて日光並に空気の疏通を計り、専ら果實の完熟を計るべし。而して時々耕耘を行ひ、米糠、人尿、酒粕を施すべし。ウドン病、ベト病、菌核病、フキロキセラ、烏蠅、介殼蟲、天牛、蝸、象鼻蟲、金龜子等は葡萄に寄生し慘害を逞うす。

無花果

温暖の地を愛すれども柑橘に比すれば尙北地に栽植する事を得べし。濕潤にして肥沃なる砂壤土を好む。品種中、白色、青色、黒色の別あれども、ラーシ、ホワイト、ジェノア、マルセーユ、ブラック、フィックを良好の品種とす。之を繁殖せしむるには壓條分株挿木を行ひ、多く他樹と混淆し、樹形已に定らば、根際より生ずる萌芽を除き、其他空枝を除くに注意すべし。

無花果

し。生食用のものは果實裂くるに及びて採收すべく、乾果を製せんとせば之より早く採收すべし。

須具利

之を須具利(グロスベリー)、房須具利(カーラント)の二種に分ち、甲は葉腋に小圓又は長圓の果を結び、味甘酸にして漿液多く生食に適す。乙は葡萄の如く顆粒連結して穗状を成して下垂し、頗る豊産なり、赤黒の二種あるも赤種を良好とす。微酸を含み生食に可なり。高燥の壤土を愛し、寒地よりも暖地を可とす。挿木及壓條によりて繁殖せしめ、定植せんには六尺に三尺を距つべし。

須具利

第四節 乾果類

栗

本邦各地の山野に自生し、果實並に木材を供給す。氣候土質を選ばざれども温暖にして高燥乾固なる壤土を愛す。樹勢旺盛にして栽培容易なり。品種には早熟、中熟、晩熟、大、小等の種々あれども本邦種の丹波栗、米國

乾果類

種のグリッフィン、歐洲種のコンツル、バラゴン等を良種なりとす。繁殖法は播種による。播種期は秋及び春なれども、概して春を可とす。剪枝は手にて行ふべく且つ栗は主として新梢に結實するを以て、密生せる枝及び徒長枝等の外は濫りに剪定すべからず。

### 第三編 工藝作物栽培

工藝作物栽培

工藝作物は一に特用作物とも云ひ、製造工業の原料となるものにして、穀蔬蔬菜の如く直ちに日常諸般の用に供すること能はず、必ず一度加工を経たる上にあらざれば使用に堪へざるものなり。其需要は社會の進歩工業の發達と共に年を追うて益々増加し、今や國家經濟上重要な作物となるに至れり。之れが栽培には尠なからざる勞銀と熟練とを要すれども、農家は其の閑散の時と勞力とを利用して、副業を營むに最も適當せり。工藝作物の種類は頗る多く、或は専門の經營に適して、副業的栽培に適應せざるもの尠なからざれば、これに最も副業に適切なるもの數種を選び、その概要を記述することとせり。

#### 第一章 茶

##### 第一節 品種

茶の種類

茶の種類の

茶は南部及東部亞細亞の原産なり。古代支那に於て之を薬用及飲料に供したりしが明の世初めて煎茶を發明するに到れり。吾國に於ける栽培は七百餘年前榮西禪師之を南宋より携へ來りたるに起因す。榮西之を肥前の齋振山に植ゑて、岩上茶を作り、その種子を明惠上人高辨に分ち僧高辨之を山城桐尾に植う、後足利義滿之を宇治に分植せり。故に榮西を茶の開祖と稱し、高辨を煎茶の始祖と爲す。現今吾國の茶園にして有名なるは、山城の宇治、近江の信樂、政所、伊勢の薦野、駿河の安倍、蘆久保、武藏の川越、狭山等なり、之を五ヶ所の茗園と稱す。外國にては近年東印度錫蘭瓜哇等は頗に隆盛を來し、支那及本邦を壓せんとす。

支那東印度錫蘭及臺灣等の茶は悉く紅茶にして、地球上最も多く産出せらる、吾邦の茶は綠茶にして、少額の支那産を除くの外他に其類を見ず、全く吾邦の特産なり。

茶を大別して左の三種とす。

一、印度茶（名アツサム茶） 葉の色淡くして稚葉を生ずること多

く、長さ支那茶の二倍程あり、葉脈細柔にして支那茶の如く硬化速かならず、開花結實少なく、製茶の味強烈なり。

二、支那茶 主に支那及本邦に栽培せらるゝものなり。

三、間種 印度に多く栽培せらるゝものにして、支那及印度茶の雜種なり。

本邦に於て栽培せらるゝもの、内左の三種は最も良種と稱せらる。

- 一、縮葉種 葉形柳葉に似たれども、其周圍縮みて裏に反り上面は細波狀を呈す。
- 二、大花無實種 茶葉伸長し、幼芽の色は淡紅にして、出芽頗る多く、葉肉厚く花大にして少なく、實を結ぶこと稀なり。
- 三、柳葉種 播種發生の後一二年間は、葉圓けれども、年を経るに従ひ細長となり、培養宜しければ葉肉厚く出芽多し。

### 第二節 栽培

茶は厚皮香科に屬する常緑の灌木なり、支那及本邦のものは高さ六七

栽培

茶の樹



素テインと稱する一種の成分を含有するを特色とす。其他芳香油類及タンニンを含有し、爲めに薬用にも供せらる。一般に茶は排水能くして乾燥に失せざれば、大抵の土地に生育すれども、就中砂質粘質の壤土に最も適す、マンガニースの含有は茶園の土質に必要にして、表土深く腐植質を有し且つ石灰に富める處ならざるべ

尺に過ぎずして分枝多けれども印度に生ずるものは、能く二三丈の高さに達し分枝すること少なし。花は白色にして佳香あり。十月頃より翌年二三月頃迄絶えず開花す。葉及び稚芽には茶

茶素

茶園

からず。

茶園を設けんとせば南方に傾斜し、日當り良き地勢にして河に臨み排水の宜しき處を選定すべし。本邦著名の茶園が皆な河に臨める丘岡に在るは、此理にして低濕の地は其最も嫌忌する所なり。

茶園は豫め深く耕鋤して雑物を去り、土壤を膨軟ならしむべし。其播種には二種あり株蒔及び條蒔是れなり。

一、株蒔 には輪蒔、四角蒔、三角蒔の三種あり

輪蒔 は古來宇治地方に於て専ら行はれたる法にして、其法五尺内外の幅に畦を作り、畦上に四尺位を距て、直徑一尺許の輪形に二十粒程の種子を蒔くなり、此の法は中耕に不便なるを以て漸次廢たれ、近來は

四角蒔 によるもの多くなれり、四角蒔は五尺前後の畦幅に三四尺を距て、一尺平方の四隅に三四粒宛播種するものなり、又三角蒔 は四角蒔と同様にして唯だ四隅を三隅に播種する差あるのみ。



要するに株蒔は隣畦の播種互に並列せざる様に基の目形に爲すこと  
肝腎なりとす。

條播法

二、條播法、は大規模の栽培に行ふ法なれども收量前法に及ばず、  
其法は幅三四尺の畦上に播種すると五尺の畦上に二條づゝ一二  
寸を距て、互播する法との二種あり、發生後適宜に間引きして四  
五寸を距つべし。

播種

播種には春蒔、秋蒔の二種あり、春蒔は三四月の頃種子を十日間許  
水に浸して後播種し、秋蒔は専ら暖地にのみ行ふ。

播下の場所は深さ一尺許りの穴を穿ち、人尿尿、堆肥等を施した後覆  
土したる上に蒔き、之れに一二寸の土を覆ひ、薄く藁を布くべし、又  
た茶は初年の保護特に必要なるを以て、苗床にて仕立つる時は安  
全にして佳良の結果を得べし。

肥料

播種の初年には施肥の必要なく、二年目には春秋二期に人尿尿を  
施し、三年目以後は毎回施肥するを要す、  
肥料は窒素肥料を主とするものなれば人尿尿最も適し、油粕、堆肥、

草肥等之に次ぐ

人糞は收量を増加せしむるのみならず、色澤を美ならしめ、尙ほ他肥  
の及ばざる香味を興ふるの効あり。

米糠は茶に甘味を興ふること著し。

施肥法は春期發芽前に芽肥と稱し人尿尿或は油粕に米糠を混じて施  
し、一番芽の摘採を終りて再び人尿或は油粕に米糠を混じて施すべし。  
尙ほ夏季に於ては青草を株間に布き置き、秋に到り耕して之を埋め、其  
上堆肥、油粕等を多量に施し、冬期には寒肥を施すを普通とす。

種子發生後は雜草の繁茂せざる様にし、早魘の際には灌水し、冬期は防  
寒、防霜の手當を怠らず、又た間作は三年間を限りとす、畦間の土壤は能  
く膨軟ならしめ、冬期寒肥を施す時幹の凍傷を防ぐ爲め株元に土を寄  
せ置くべし。

茶は植付後十餘年を経れば次第に老衰して收量を減するものなれば、  
深耕法及び萱蒔法を行ひて樹勢の回復を圖るべし。

深耕法、は十月下旬乃至十一月上旬降霜の期を見計ひ、茶樹の周

深耕法

萱刈法

園に伸び居る枝の端の直下に當る地に、五寸を距て畦間に深さ一尺五寸の溝を穿ちて根を切斷し、其溝中に表土、堆肥、塵芥等を埋め十日間程風化せしめたる後掘上げたる土壤を覆ふべし。

萱刈法は深耕根切法と同時に、行ふを可とす、其法は根元より凡そ七八寸の所にて本幹枝條共に刈り去るなり、斯くする時は盛んに新枝を發生し三年目に至れば摘葉に適するに至る。

又た茶樹は四年目の春頃より剪枝を行ふ要あり、之れ當に樹形を整へ各部の發育を一樣ならしむるのみならず、葉質を良好ならしめ、收穫を増さしむる効あり、其法は高さ二尺五寸乃至三尺餘の饅頭笠形に刈込むを普通とす。

玉露園の管理

玉露茶及碾茶挽茶園にては摘葉前覆掛を爲すを要す、其法は四月上旬頃迄に竹にて棚を作り、簀を掛け日中は捲き上げ、夜間は之を擴げ其芽の長さ凡そ一寸許りにして二三葉開きたる頃より、全く擴げ切りと爲す、而して四月下旬頃より四方を蔽にて園み日光の直射を防ぎ置くべし、其後降雨ある時は大に葉色を美ならしむるも、降雨なき時は簀の上

より灌水すべし。

總べて茶は栽培に注意せざれば、頗る變性し易く忽ち其特質を失ひ劣種に變ずるものなり。

第三節 害蟲及摘葉

害蟲及摘葉

茶樹は植付後三年目の春に於て、樹形を整へん爲め一回僅少の葉を摘み、四年目より始めて普通の摘葉をなすなり。

我國にては五月上旬より中旬に至るの間、新葉四五葉を生せる頃一番摘を爲し、其後一ヶ月許を経たる頃二番摘をなし、直ちに剪枝し、夏土用の頃三番摘を行ふを普通とす、但し三番摘は樹勢強きもの、頂上部にありて發育よき芽のみ摘み取るべし。

一番摘は二番摘の倍量の收穫あり、三番摘は二番摘の半分に過ぎず、而して葉質は摘採の番を重ねるに従ひ次第に劣惡となる、宇治の玉露及び碾茶は一番摘のものなり。

茶葉を摘み取るには、拇指の爪と人差指の腹との間に、狭み取るなり、

茶葉摘法

摘法



には八十貫、九年目には二百五十貫にして其の後は増加著しからず、宇治地方にては八十貫を極度とす。  
 葉摘は多く婦人の業にして、一日一貫乃至二貫の功程なり、早朝より午後二時頃迄に摘みたるものを其日の製造に供し、其後は翌日に廻すなり貯蔵中は乾燥するも鬱蒸するも共に宜しからず。茶樹の害虫の主なものは浮塵子茶、蝸蝓、葉捲蟲、茶葉蟲、椿象、髓蟲等なり。

上等の茶を製するには三葉掛と稱して枝端より三枚目迄のものを摘み取るべし、總て摘取は必らず晴天の日を選ひて之を行ひ、新芽となすべき腋芽を害せざる様注意するを要す。  
 生葉の收量は一反歩に付き四年目には二三貫、五年目には五六貫、六年目には十二三貫、七年目には三十貫、八年目

除蟲菊 品種

第二章 除蟲菊

第一節 品種

除蟲菊は波斯の原産にして、菊科に屬する宿根草なり、莖の高さ二尺餘に達して叢生す初夏の候より白、赤、或は淡紅色の花を開く。主なる品種に左の二種あり、

一、波斯種

花大にしてまゝ、白色或は絞りあるも普通は淡紅色なり、

除蟲菊



葉は恰も胡蘿蔔に似たり、花の數少ないけれども大にして

收量多し、夏期に至れば莖葉枯凋するの性あれば夏期に害を逞うする微菌に襲はるゝこと少なく、莖葉枯凋するを以て冬期間防寒の設備を要せず概して栽培容易なるも効力少なし。

莖の地に近き部分の色に依りて紅莖、淡莖、紅、帶紫紅莖等の種別あり。  
 二、ゲルマチア種 花は白色にして稍や小さく全體の形狀野生の野菊  
 に似たり、收量前者に同じ、開花期は前者に比して二三週間早く、冬期間  
 莖葉を地上に抽出するを以て、防寒の設備を要す。  
 土際の莖色に依りて淡紅莖、紅莖、及び綠白莖の三種に區分す、就中淡紅  
 莖種最も普通なり、花は小なるもその數多し。

### 第二節 栽培

栽培

我國至る處之れが栽培に適應せざる地なきも、概して溫暖乾燥の氣候を  
 好み、排水能き砂質壤土最も之れに適し、陰濕の地を嫌忌す。  
 除蟲菊の繁殖法は實播及分株による下種するには地を深く耕しよく  
 土塊を碎き適宜の平床を作り、一坪に付き精撰したる種子三勺内外に  
 約十倍の細砂を混じて下種し、薄く覆土したる上に藁を被ひ降雨なき  
 時は灌水すべし。

播種期は北海道は八月、奥羽地方は九月、關西地方は十月中旬より十一

月中旬頃を適當とす、下種後一週間乃至二週間にして發芽す、其際被藁  
 を除去し、尙ほ防霜又は防寒の設備を爲すべし。

株分は最寒と極暑の候を除き何れの時期にも行ひ得べきも、暖地にて  
 は十月より十一月、寒地にては九月を以て最も適當なりとす。

苗を移植するは暖地にては二月、關東地方にては三月、奥羽北海道にて  
 は融雪後速かに行ふべし、植付は畦間二尺株間一尺として一反歩に付  
 き四千五百株内外を普通とす、肥料は腐熟せる堆肥、過磷酸石灰を原肥  
 として施すべし、植付の際は豫め灌水し、移植後も兩三日間は毎夕灌水  
 するを要す、

屢々除草中耕を行ひ根付きたる頃稀薄なる液肥を施し、秋期尙ほ一回  
 施肥す、斯くて翌年より花を收穫し得べく、其後年々春秋二回人尿、過燐  
 酸肥料を施すべし、五六年に及べば株古くなり繁茂せざるものなるを  
 以て、株分を行ひ新株を他に植付くべし。

### 第三節 收穫及び病蟲害

收穫及び虫害

花の收穫は其満開の時をよろしとす、遲きに過ぐれば收量多けれども、大に其有効成分を減じ、早きに失する時は收量少くして且つ製粉稍や青色を帯ぶるの缺點あり、摘みたる花は五六時間日光に晒して凋萎せしめたる後、陰乾を爲し、雨天の際は文火にて焙爐にかくべし、莖葉は成るべく速かに刈取るを要す、然る時は新芽の發生を促し、且つ莖葉にも亦多少の有効分を含有するを以て、之を混和物として利用することを得べし、一反歩の收穫は乾花にて凡そ十五貫乃至二十五貫とす

病虫害の主なるものは根に寄生する線蟲及び莖葉に寄生する數種の黴菌なり。

### 第三章 薄荷

#### 第一節 用途及び品種

薄荷は高さ一二尺に達する宿根草にして、花は穂状をなし淡紫色なり、主なる産地は北米合衆國にして、英・獨・佛・清及び本邦之に次ぐ、本邦の主要なる産地は廣島岡山山形及び北海道にして、山形は一時盛んに

薄荷用途及び種

栽培せるも近年に至りて大に衰へ、北海道は年を追うて盛んなり。

薄荷の葉莖には薄荷腦及び薄荷油なる成分を含有す、此成分は普通に薄荷と呼ぶものにて強烈なる特殊の芳香を有し、これを味へば清涼の氣を感じ神心を爽快ならしむ、又た薬用としては疼痛下痢嘔吐を治し且つ殺菌の効あり故に腦油ともに鎮痛興奮殺菌清涼の藥劑として廣く用ひらる、尙ほ工業用としては齒磨粉菓子其他の食料品に混じて香味用に供し、清國漢口地方にては刻煙草に混じ、又た佛國にてはリキユール酒の如き甘味の酒類に容れて香味用とす。

近來工業用としての需要頗る増加し、重要な貿易用農産物なり。

歐米に於て栽培する薄荷は本邦のものに比して薄荷腦分を含有すること少なしと雖ども、香味緩和にして苦味少なく品質優良なり。

本邦に於て栽培する主なる種類は左の四種なり、

- 一、赤丸種 葉形圓く、花瓣紫色にして、莖は赤紫色を帯び、性纖弱なり。
- 二、赤柳種 葉形柳葉に似て、葉裏鈍紫色を帯び、花瓣白色にし

て莖は緑色、性繊弱なり。

三、青柳種 葉形は前種に似て、莖花も亦同じく殆んど野生に近し。

四、青丸種 葉形圓く、花瓣淡紫色を帯び、莖は緑色にして、性強健なり。

就中赤丸種は廣く栽培せられ、最良質の腦油を多量に含有す。

### 第二節 栽培蕃殖

栽培蕃殖

薄荷の栽培には溫暖にして乾燥なる氣候をよろしとす。雨量多くして陰濕の地は腦油分の成生を妨げ、収量を減するを以て不適當なりとす。廣島及岡山縣地方のものは腦油の含有量最も多く全國に冠たるは此の理に由る、土質は壤土若くは粘質壤土にして排水宜しき處最もよしとす。

薄荷は宿根草なれば連年同一の畑に栽培し得べけれども、三四年の後には収量を減少し遂に収支相償はざるに至るものなれば、二三年にし

て他作物と轉換するを要す。

蕃殖せしむるには専ら分根法に依る、分根法には、秋期分根法及び春期分根法の二種あり、秋期分根法は概して収量多けれども、氣候の寒冷なる處又は排水の不良なる處には、霜害と腐敗の虞あるを以て不可なり。種根を採取するには豫め圃場にて良質の莖を撰び置き、秋期若くは春期分根せんとする時、之を掘し出し多漿充實にして屈撓すれば折斷するに容易なるものを選び用ふべし。

一反歩に要する種根の量は風土の異なるに従ひ相違あるも、精撰根四十貫乃至五十貫とす。植付法等は各地一様ならざれども、先づ植付前圃場を充分に耕耙し、畦幅一尺五寸乃至一尺八寸株間を三寸乃至五寸とし堆肥を充分に原肥として施し、五寸位に切りたる根を二三本宛一所に植付け軽く土を覆ひ、尙ほ其上に藁を布きて防寒の用意となし、發生後は人尿及び油粕を施すべし。

### 第三節 病害蟲及び刈取乾燥

病害蟲及び刈  
取乾燥

薄荷には害蟲至つて少なく病害には葉澁病あり。刈取は二回若くは三回之を行ふ、而して此時は莖葉中に含有する腦油の量最も多量に達したるものならざるべからず、其徴候として一番刈の際は葉色黄緑を帯びて莖は堅し、二番刈も一番刈と同一にして三番刈は花の眞盛りなり。刈取りの時期は暖地に於ては六月中旬、八月中旬、十一月中旬の三回にして、寒冷なる地にては七月下旬及十月下旬の二回とす。刈取りには天氣晴朗の日を撰み、朝露の乾きたる後に於てすべし。刈取りたる莖葉は繩に編み連ねて、陰干となすなり。其間醗蒸酸酵等なる極深く注意するを要す。一反歩の収量は一番刈五十貫乃至八十貫、二番刈八十貫乃至三十三貫、三番刈は百貫以外にして乾燥したるものは生葉の約三割に當る。

### 第四章 黄蓮

#### 第一節 品種

本邦の山野に自生する宿根草にして、根は山葵に似たり、春期舊葉の傍

黄蓮  
品種

より花軸を發生し、三四寸に伸長し、頂端に數々の小白花を開きたる後、舊葉枯凋して新葉之に代るなり。

根は乾して黄色の染料に供し、又た藥用に用ふ。味甚だ苦し。近來藥用として需要頗る多く、本邦に於て用ふるのみならず、支那印度其他歐米諸國へ輸出するに至りたるを以て、野生のみに依らず栽培するもの漸次増加せり、其産地は北陸奥羽丹波播磨等なり。左の數種は主なるものなり。

- 一、ミツバ黄蓮 一葉柄に三個の小葉を付く。
  - 二、菊葉黄蓮 葉形大に、菊の葉に似て、刻目少なし。
  - 三、細葉黄蓮 形、芹葉に似たるも、葉及全體の形狀小なり。
  - 四、芹葉黄蓮 葉形恰も芹に似たるを以て此名あり。
- 以上の内、芹葉黄蓮最も普通に栽培せらるゝ品種なりとす。

#### 第二節 栽培及採取

黄蓮は性強健にして土質を撰ばず、栽培容易なるも、日光の直射を嫌ふ

栽培及び取

のみならず枯死するを以て、陰地若くは樹陰地に適す。之を播種するには秋期若くは初冬の頃、種子一合に細砂九合を混じたるものを一坪に三四合の割にて適宜の苗床に下種し、施肥耕耘除草を怠らずして生育を促し、播種より三年目の秋本圃に移植するなり。本圃は約一尺をへだて、畦筋を立て、これに六七寸づゝに穴をうがち、堆肥油粕をほどこし、苗五六本を一株として植ふべし、耕耘施肥等の手入を勉むれば四五年にして採取に適す、其採取は秋九月乃至十月頃をよろしとす、一株づゝ掘りて土を落し、莖葉鬚根を去り、日光に當て、乾すべし。

一反歩の収量は二十貫より四十貫内外なり。

### 第五章 人參

#### 第一節 產地

人參は高さ二尺位にして、花軸の頂端に細小なる白花を叢生する宿根草なり、實は赤くして、大さ小豆の如し、根は肥大なる直根なり。

人參  
產地

人參



人參は往時支那の南部及び朝鮮より輸入せるものなれども、その後吾國に於て盛んに栽培せらる、然るに近時吾國の需要頗に減少し、専ら支那、朝鮮へ輸出の目的を以て栽培せらるゝに至れり。

我邦に於ける主なる產地は奥羽東北北陸山陰の諸地方なり。

#### 第二節 栽培及び病害蟲

人參は性炎暑と日光の直射を嫌い、好んで寒地に生育す、排水極めて良

栽培及び害虫



好にして有機質を多量に含有する壤土に好適し、濕地は決して佳良のものを産せず、時として枯死腐敗の虞れあり。

栽培するには、町噺に耕勸し、多量に堆肥、人尿尿を施したる圃場に、畦巾二尺五寸より三尺、高さ七八寸の高畦を作り、(但し畦と畦とは二尺を距つべし)五寸位宛に小孔を穿ち、之れに四五日間水に浸し、日光に當て發芽を促したる、種子一二粒づゝ下ろして、淺く覆土すべし、其播種の期節は秋は十月中旬より十一月中旬頃迄、春は三月中旬より四月中旬頃迄をよろしとす、發生後五月に至れば、日覆屋根及び側面に、日除けを設くるを要す。其高さ初年は一尺二三寸とし、次年より漸次高さを増し、四年目には三尺位とす。生長中は耕転手入を怠らず、充分に施肥し、三年に至りて花梗を出すを以て早く之を摘み去るべし、而して四年目の秋九月頃初めて塊根の採收に適するものとす。

人參の蟲害は根を害する針金蟲葉を害する象鼻蟲鐵炮蟲等にして、病害は根腐病、屢萎病、愈裂病、赤腐病等なり、就中根腐病は最も恐るべきものなれば、若し其兆ある時は三年目位に掘採るを可とす。

### 第六章 櫨

#### 第一節 用途及品種

櫨  
用途及品種

圖解  
一、雄花  
二、雌花  
三、果實



櫨は吾邦野生の喬木にして高さ二三丈に達す、花は少くして夏開き房狀にして枝梢に叢生す、實は秋に至りて熟し豆粒大となる、其色暗黄若くは灰褐色にして、皮厚く俗に蠟と稱する脂油に富む核も亦油分多し、之を以て純良なる木蠟を製す。

櫨は本邦暖地の山野に野生するものなれども近年木蠟の需要増加し關西中國九州地方に於て盛んに之れが栽培を爲すに至れり、就中最も良質のものを産するは伊豫なり。

櫨の木蠟は不純物を含有すること少なく、華氏百三十二度の高温にて溶解す、其用途は從來主として鬢附

を製し蠟燭を作るに過ぎざりしに、現今は器械の錆止織物及糸の蠟引金屬器の艶出蠟燭寸蠟紙石鹼造花等に用ひられ、其用途頗る廣く、將來有望の産物なり。

蠟の品種は其數多けれども左に主なるもの三種を掲ぐ

- 一、松山種 筑後の産なり、蠟分多くして子粒黄色を帯びて肥大なり、黒松山、赤松山の變種あり。
- 二、葡萄種 紀州の産なり、子粒大に灰色を帯び白粉を被ふ、品質好良にして收量多し。
- 三、伊吉種 筑後の産なり、大伊吉、小伊吉の二種あり、大伊吉は品質中等なるも收量最も多く核は蠟分に富む。

### 第二節 栽培及び病害

#### 栽培及病害蟲

蠟は性暖地を好むを以て畿内以北の地は全然之れに適せず、適土は排水好良なる砂質壤土にして日當り良き丘陵又は河岸とす。

蠟の蕃殖は砧木に接木するをよろしとし、實生又は野生木を移植する

は結果不良なり、砧木を得るには蠟實を臼にて搗き、核のみを篩撰し之を灰汁又は炭酸曹達の溶液中に數日間浸漬して蠟分を去り、更に一二週間清水に浸し灰に混じ、一坪に付き一合乃至一合五勺の割にて苗床に下種す、翌春に到り八九寸を距て、移植し、後三年目の春に至りて接木を行ふ、接木法は、砧木を一尺位に切り、其根際より數寸の所に良穂を撰びて腹接を爲すなり、早春を好適の時期とす。

接木を行ひたる翌春之を本圃に移植す、其法は一反歩に二十本乃至四十本割のにて、春彼岸前後深さ二三尺徑四五尺の穴溝を掘り堆肥、塵芥等を多量に入れて植付け、能く踏み付け尙ほ添木を施すべし。若し植付後直ちに開花する者あらば、勉めて之を摘み去るべし。二年目に至り地上二尺許の所より切斷し、數多の枝梢を發生せしむ、然る時は四年目頃より結實を始め爾後二三十年間は盛んに收穫せらる。其後は次第に結實を減ずるを以て、接替を行はざるべからず。其法は枝を稍や長く切斷し、其切口の下位に四五本の良種を腹接し、活着の後は生長の旺盛なるもの二本を残して、他は切り去るべし。

肥料は春秋二期施すべし、堆肥、油粕、人尿、米糠、草木灰等を普通とす。子實は十月に至りて成熟するものなれば、此機を逸せず採收すべし、其際決して枝を折り取るべからず、採收後は充分日光に晒し乾燥して貯藏するものにして、貯藏の年月古き程品質好良となる。收量は一反歩百貫乃至二百貫を普通とす、  
病蟲害には白澁病、蚜蟲、蠹の葉蟲、葉蚤、避債蟲等あり。

### 第七章 蓼藍

#### 第一節 品種

蓼藍は東部亞細亞の原産にして、丈け二三尺に達する一年草なり、吾邦古代より栽培し、昔時は摺磨の篩磨最も著名の産地なりしが、後阿波に移植するに及び偶然風土の好適したる爲め、盛んに栽培せられ、阿波の特産物の如くなるに至れり、然るに近年に至り外國より藍靛盛んに輸入せられ、價格比較的低廉なると、運搬使用に便利なる爲め、大に内國産を壓倒し、我國の藍作に甚なからざる打撃を與へたり、輸入藍靛は主

品藍

栽培

として印度藍を原料として製造するものにして、外國にては支那、佛蘭西、濠洲等にも栽培せられ、吾邦にても阿波の外各地に於て栽培せらる。品種は柳葉種及圓葉種の二種あり。  
柳葉種に屬する主なるものは青莖、小千本、赤莖、小千本、上粉百貫とす。

此種は葉先尖り性概して強健なり

圓葉種には小圓百貫、椿大圓等の別あり。

此種は葉形圓し、

其他水藍と稱し水田に栽培するものあり。

#### 第一節 栽培

本邦到る處蓼藍の栽培に適すれども、性暖地を好み炎熱、溼潤の氣候に於て最も良く生育す、適土は有機質多き砂質壤土とす。種子は採收に困難なるを以て商人より購入して、水選法に依りて適良のものを選別使用すべし。

藍は苗床に苗を生育せしめ移植するものとす、種子は七八日間水に浸し、後揚げて水分を去り之に細末とせる鯀粕を混じ、一坪五勺の割合にて適宜の苗床に播下すべし、其時期は暖地は二月中旬より三月上旬寒地は四月中を適當とす、

播種後三週間程にして發生す、密生せる部分は間引きして雜草を除去すべし、其後尙は一回間引をなし苗を一寸位宛に距て、仕立て、發芽後五十日程を経て苗の五六寸に長じたる頃移植するなり、

藍は多く麥の間作として栽培するものなり、二尺五寸位の畦巾にて麥を植ゑたる畦間に一尺五寸乃至二尺五寸を距て、藍苗を移植す、若し植付の距離を狭くするときは、藍は徒らに上方に伸長し、下葉枯凋して收量を減するものなり、

移植の期節は五月下旬より六月中旬迄をよろしとし一株に七八本乃至十本を纏めて植付け後軽く覆土すべし、

植付後旱天續く時は萎凋して生育せざる虞あるを以て、時々灌水を忘るべからず、施肥は阿波にては五番肥迄行ふ而して五番肥を止肥と稱す、

刈取乾燥及蟲害

肥料は鯀粕を藍の特効肥料と爲すも、近來價格著しく騰貴したるを以て、大豆粕或は智利硝石に少量の過磷酸石灰を加へたるものを施して、鯀粕に劣らざる收量ありと云ふ、

第三節 刈取乾燥及び蟲害

藍は植付後七八十日にして、止肥を施して二十日内外を経れば、葉は濃綠色を帯び且つ一種の香氣を放つに至る、是れ刈取好適の徴候を示すものなれば、速かに此期を失せず刈取るべし、若し此期を失すれば葉色淡青に變じ、爲めに藍分の含量を著しく減少するに至るべし、

刈取りは天氣晴朗の日を撰ぶべし、根際より三寸位を刈り二三株を合して一小把に束ね、其儘積み重ね置かずして直ちに乾燥することを要す、故に刈取りの程度は一日に乾燥し得る丈けを前日に於てすべし、刈取りたるものは五分位の長さに刻み、藍の上部三分の一を上葉とし其以下を元葉として別ち、蓆に擴げて陽乾すべし、陽乾中は時々竹箒を以

て反轉す乾燥すれば箕にて葉莖及葉莖附着のものとの三種に区分し、莖は棄つべし乾燥中は夜露又は降雨に當てざる様に注意すべし。乾葉にして濃黒色を帯び且つ甘き香を放つを良品とし、之に反して色薄く香及び艶なきを下品とす。一反歩の收量は乾葉にて一番二番刈を合して七八十貫を上作とす。害蟲は夜盜蟲根切蟲象鼻蟲髓蟲蚜蟲等を主とし、就中髓蟲及び蚜蟲は往々大害を爲すことあり。

### 第八章 山藍

山藍

山藍は一名琉球藍と稱し、熱帯地方の原産にして支那福州より吾邦へ到來せりと云ふ、主に琉球大島薩摩地方に栽培せらる。高さ二三尺に達する宿根草にして、彼の有名なる琉球大島薩摩飛白は之れにて染めたるものなり、葉は橢圓形にて葉肉厚く濃綠色にして光澤あり。山藍は炎熱多濕の暖地に於ては土質を撰はず極めて強健なる作物なるも、寒冷にして乾燥なる土地には全く適せず。

山 藍



山藍は實を結ぶこと稀有なるを以て、之れが蕃殖は専ら根分若くは挿木法に依るを常とす、植付くるに

は土地の濕潤なる時期を撰ぶべし。刈取りは葉稍や帶黃綠色を呈し、其表面に皺縮を生じ成熟の徴候を顯す時を俟ちて、初夏及び秋季に之を行ふべし。

紅花

第九章 紅花

紅花は一名吳藍くわなんと稱し、印度の原産なり、薊あざみに似たる草にして、其花も亦た薊の花に似て橙黄色だいごうじきなり、高さは二三尺に達し、まゝ五六尺に及ぶものあり。

此花より染料を製するものにて、植物質染料くわいぶつしつしきりょう中貴きものなり。近來外國より餅紅花もちべにばなの輸入あり。

主なる種類は左の如し。

- 一、あざみぼたん 莖伸び花多く收量尠なからざれども、荆棘とげ銳ければ採收の際指を傷くる恐れあるを以て栽培するもの少なし。
- 二、大しめぼたん 莖小さく花附前者に劣れども、採收容易なれば、却て收量多し。
- 三、小しめぼたん 前二者よりは小にして收量少なく、半額に充たざれども紅の品質優良なり。

栽培せんとするには、秋末に於て肥沃の地を充分に耕耜し、肥料を施し畦を作りて十一月初めより十二月初めに下種すべし。種子は播下前酒中に一晝夜程浸し置くを要す、一反歩に六七升の割合に下種す。種子は鳥類の嗜好こうごするものなれば、發芽する迄之れを保護すべし、發芽して苗二三寸許になりたる時鶏尿けいじょう干鱒かじか又は油粕を粉末となし施肥す。苗の伸長後に人尿を施す時は葉萎縮ちぢまして生長を阻害そがいするを以て注意すべし。

花は六七月頃開く、花の色半ば紅色を呈し、全圃の約五分の三に當る花の總て紅色を帯びたる頃を見計ひ朝露の未だ乾かざる時に花を摘採とみとすべし。然る時は柔軟なやまにして摘採に容易なり、強雨の候は開花後適期を待たずして摘採すべし。  
一反歩約百三十貫前後の花はな瓣びらを收む、又た種子よりは食用並に燈火用に供する油を搾取しぼりし得べし。

第十章 蒟蒻

蒟蒻

蒟蒻は往古より吾邦各地に野生したるものにして、幕府の頃茨城・福島地方に栽培を試みたることあり。後明治の初年に至り、精粉製造法の發明せらるゝに及び、蒟蒻の需要頓に勃興し、従て栽培又た盛なるに至れり。

蒟蒻は大低の土地には栽培し得らるべけれども、左の注意を怠るべからず。

一、粘土質壤土には、種根一個の量二百匁以上のものを撰びて、栽培する時は收量増加し、且つ光澤ある佳品を得べし。

一、砂地には二百匁以下のものを植うべし。

三、墟土(赤黒)には親根より分離し未だ芽を發したることなき、一年生の子根にして百匁以下のものを可とす。

種玉は掘株後撰種と同時に、日光に當て一日間乾して發芽の部分に損傷を與へざる様丁寧に積載し、爐に火を容れ乾燥せしめたるものを貯藏す。

種根を植付んとするには、十二月中旬頃深さ一尺位に耕耘し置き、五月

上旬に又た四五寸に鋤返す、溝渠は能く深へて、水の疏通を良くし、種玉の腐敗せざる様にすべし。

畦幅は種根三百五十匁以上のものにありては、二尺五寸位とし、各畦の距離を三尺乃至五尺とす。百五十匁以上にありては、巾二尺、畦間の距り二尺五寸位とし、百五十匁以上は一尺八寸位、株間を一尺五寸とすべし。特に注意すべきは、同一の大きさの種根は同一區劃に纏めて植ふ付くる事なり。

馬糞を原肥となし、人尿・鶏屎若くは蠶屎を人尿に混じたるものを補助肥と爲すべし、又た完全肥料を施すも可なり。

掘株は降霜の期節となり、莖葉の枯凋したる時を最も適當とす。一反歩平均三百貫の收量あり。

養豚

### 第四編 養豚

陶朱公曰く、速かに富まんと欲せば、須からく五符を飼ふべしと。宜なる哉言や、五符とは牛馬猪羊驢にして、猪は即ち豚なり。幾千年の昔、支那に於ても既に養畜の富源たることを知れり。況んや肉食の熾なる、現在の吾邦に於てをや。五符中、牛馬の飼養は専門的畜産に属するを以て本書には之を省略し、茲に副業として養豚に就き、其一斑を記述すべし。

養豚の利益

- 今養豚業の利益及び特質を擧ぐれば、
- 一、養豚を行へば廢物を利用するを得べし、豚は動植兩性の食物を喰ひ、決して他の家畜の如く食物を選ぶ事なきを以て、庖厨の殘物、雜穀の掃寄せ、根菜類の片塊、其他蔬菜の下葉、魚鳥の臟腑、牛馬飼料の殘滓等、あらゆる廢物を利用して飼料となすを得べし。故に農家は必ず兩三頭乃至五六頭の豚畜を飼養するを要す。
  - 二、大小農何れの農家にても之を飼養するを得べし。
  - 三、其肉は永き貯藏に堪ふ。

養豚の特質

- 四、農家は自己の飼養せる豚畜を屠りて以て滋養分を攝取することを得べし。
- 五、豚には殆んど廢棄すべきところなし。即ち皮は靴となし、毛はブラシを造り、骨は象牙の代用となすべく、腸は以て腸詰を造り、其他膀胱と云ひ、血液と云ひ、一も廢棄すべきものなし。
- 六、豚舎より農家に好肥料を與ふ。
- 七、繁殖力頗る強大なり。
- 八、其飼養至つて容易なるのみならず、他の養畜業に比して飼料を選ぶこと少なし。
- 九、他の養畜業と衝突する患なく、却つて飼料の殘滓を利用して養豚を行ふを得べし。
- 十、資本を要する事少なし。
- 十一、氣候を撰ぶの要なし。
- 十二、小面積にて其飼養を行ふを得べし。



第一章 豚の發育

豚の發育

我邦にてブタと名づくる所以は、蓋し肥大なるを形容したる語にして彼のブタ―したるてふ語より來れるならん。豚は他の家畜と同じく有史以前より人に知られ、其祖先は猪より出で漸次今日の形態に進歩したるなり。豚は動物學上、脊椎動物、哺乳動物、有蹄類、偶蹄類、不反芻類、猪科、豚屬に屬す。

豚の體量

概して豚畜生兒の體量は一斤乃至三四斤あり、成熟したる豚畜の體量は普通廿五貫乃至五十貫なれども最も大なるものは二百十七貫餘に達す。豚の年齢を知るは頗る難事たるも、其齒及皮膚によりて稍々之を察知するを得べし。齒の完備したるものは、上下顎同數にして四十四枚を有するなり。即ち門齒十二枚、犬齒四枚、臼齒二十八枚なりとす。而して其發生及び脱換は他の家畜と同じく、年齢に伴へども、不規則なるを免れず。

齒

豚は年を経るに従ひて成齒は不規則に缺損するを以て、老牡豚は鼻皺

遊牝及び交尾

を生ず。而して老牝豚は其腹深く垂下せり。

豚の遊牝期は四季ともに起り三十時間乃至四十時間繼續す、此際交尾せしめざれば一二週を経て更に發情すべし。之を交尾せしむるには靜なる場處に一對の牝牡を入れ、交尾終れば兩者を分離せしめ、牝豚には四五時間食物を與ふべからず。妊娠期間は、大抵四ヶ月、普通は百十六日、短かきを百十二日とす。豚は一年二回、三月と九月とに分娩せしむる様にすべく、即ち十二月と五月とに交尾せしむるやう注意すべし。産兒の數少きときは四五匹、極少なきときは一二匹、多きときは十八匹、甚しきは二十二匹を産することあるも、普通は五六匹乃至十匹なり。産兒は直ちに母豚をして哺乳せしむるも、往々母豚の爲め嚙殺さるゝ事あるを以て、先づ最初一匹を放ちて母豚の舉動を視ひ、萬一不穩ならば母豚の四肢を緊縛して哺乳せしむべし。さらば母豚の性は漸次愛戀の情に變ずべし。

第二章 豚の種類

豚の種類

豚に歐羅巴豚と亞細亞豚との二あり、甲は歐羅巴の猪より進化し、乙は印度の猪より進化せるもの、亞細亞種は歐羅巴種よりも善良にして、彼歐米に於て有名なる改良種は皆支那豚より出でしものなるが、現時は却つて亞細亞に種豚を逆輸入せり。

### 第一節 亞細亞豚

亞細亞豚

#### 一、日本崎面豚

千八百六十一年に始めて歐州に入り、英國にて斯く命名せられたるも其實日本の原産に非らず、原種雜種を問はず肺結核に罹る事多きを以て之を飼養するもの少し。

#### 二、支那豚

蕃殖力強く、改良に要すべき總ての性質を具有せる良種なり。毛色は大抵黒色なるも稀に黄色又は帶黄黒色を呈す、生後六ヶ月乃至八ヶ月にて成育して體量二十七貫乃至三十四貫に達す。頭部極めて短廣。頬の肉附多く、額は殆んど直立せり、屢々受胎せざる事あるを支那種

唯一の大缺點とす。

#### 三、本邦種

一を谷頭種と云ひ米國チエスター、ホワイト種と、英國大白ヨークシヤとの雜種なり。一を琉球豚と云ひ、之には島豚、唐豚の二あり。

### 第二節 歐洲豚

歐洲豚

歐洲豚は1、縮毛種、2、羅馬種、3、短耳種、4、大耳種、5、英國種、6、米國種の六種に分つ。

#### 一、縮毛種

匈牙利にて多く飼養せらる。バコニエル・モルダウ豚は有名なり。

#### 二、羅馬種

早熟なれども纖弱なるを免れず、佛蘭西、伊太利に産するものは體質大なり。此の種は放牧するを以てメリノー豚の名あり。

#### 三、短耳種

大耳種に反し耳は前傾又は上向し、其形頗る小なり、體格中庸にして

早熟なり、獨逸及匈牙利にて飼養せらる。バイニルン、メルブ豚は有名の品種なり。

四、大耳種

耳は廣大にして垂下し、頭は長狭褐色の長粗毛を有し、體質健全、蕃殖力に富む。發育遲緩なるも二三歳の後百貫以上に達す。露西亞、ポーランド、瑞典、諾威の寒地に飼育せらる。本種を改良して、マルシユ豚、タムオルス豚を得るに至れり。

五、英國種

主として支那種を用ひて、改良に改良を加へ、交雜に交雜を重ねたる結果、今日の如く大中小、黑白斑等の良好なる改良種を得るに至れり。即ち英國種は體質の大小、皮色の如何に由りて、

- 甲 小種……………イ 小黒種
- 乙 中種……………ハ 斑種
- 丙 大種……………ホ 大白種

に分つ。

(イ)

小黒種、其發育小白種よりも速なり、體形小白種に類す。  
エ、セ、ツ、ク、ス、豚 性強剛にして脂肪分多し。在來のエ、セ、ツ、ク、ス豚は肺病に罹り易きを以て

在來 エ、セ、ツ、ク、ス、豚 = 支那豚 =

ニ、メ、ー、ン、マ、ヤ = 改良エ、セ、ツ、ク、ス、豚

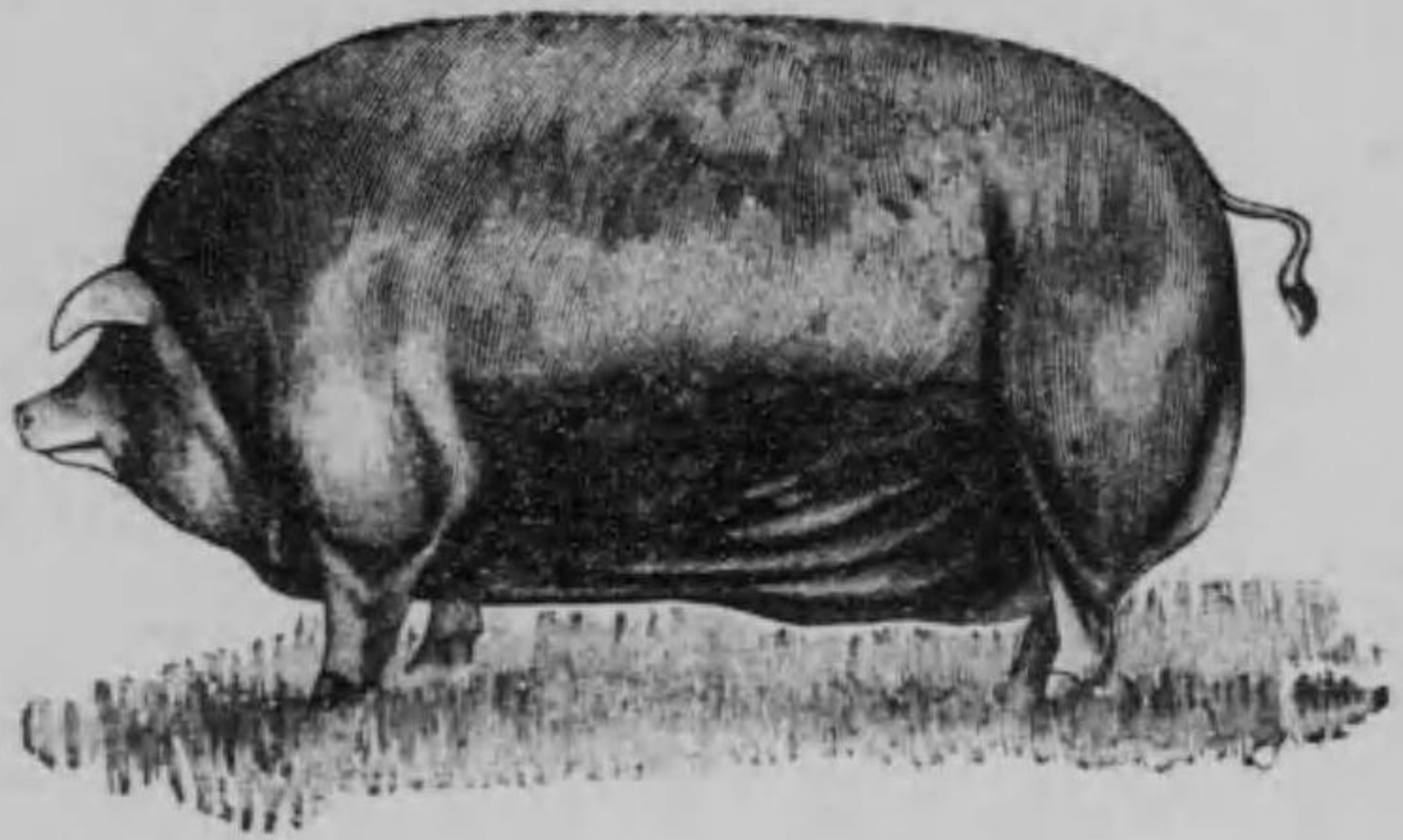
の方式にて改良したるものなり、日本に適す。サ、ツ、フ、オ、ー、ル、豚、サ、ツ、セ、ツ、ク、ス、豚亦、此種に屬す。

(ロ)

小白種 支那種の交雜より得たるものなり、發育速にして八ヶ月乃至十ヶ月にして成熟す。其頭短く後頭に至るに及び漸次廣く且つ多肉となる、額骨と鼻骨とは直角を成して少しく短縮せり、四肢廣く小にして繁殖力弱し。

小形、ヨ、ク、シ、ヤ、豚は小形白豚中良好の品種にして、我國に好適す。色純白にして頭短く、口は廣く、鼻は前面より壓し縮められたる觀を呈せり、蕃殖力強く、肥腹早く且つ體質強健なり。生後八ヶ月乃至十ヶ月を過ぐれば肥育法を行ひ得べく、體量廿五貫内外に達す。

ヨークシャ



(ハ) 斑種 斑種中有名なるをヨークシャとす。ハークシャは改良せられたる斑種中最も良好なるものにして、體質強壯繁殖力強く能く日本の風土に順化するの性を有す。頭は少しく短き傾あるも頗る廣く充實せり。額は少し直立し、鼻は眞直にして長く其端廣し。耳は小にして前向に直立し、頸は強大にして充實し肩は廣く胸廓は丸く長く且つ深し肋骨は張り、四肢強く、目は蠟色又は栗色なり。其暗黒の皮膚は黒色の毛を生ず。頭部に白斑を有し、四肢及尾端に白色を有するものを良種とす。其肉美にして肥腴すれば五十貫乃至八十貫に達す。改良種中一二を下らざるの良種なり。

(ニ)

白種

中形

ヨークシャは體質強健にして繁殖力強く、生肉製

肉兩用に適す。

(ホ)

大白種

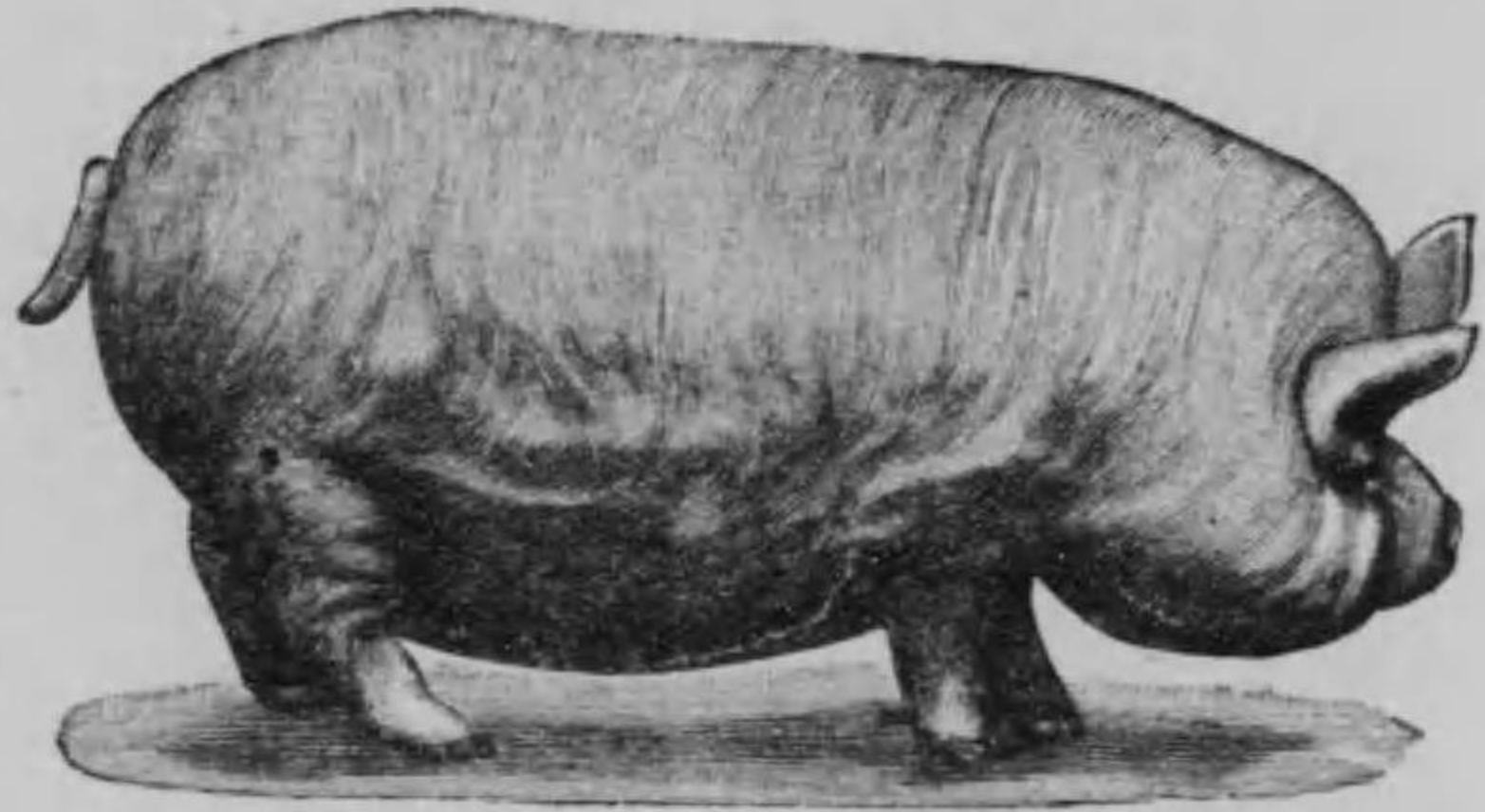
大白種中良好のものは大形

ヨークシャなり。頭稍廣く額骨と鼻骨とは鈍角を成し、直立せる耳を有す。四肢短く腿は豊廣にして腹は垂下せず。繁殖力甚だ強く、肥腴すれば四十貫乃至六十貫稀に百貫以上に達す。此外大サップォル豚あり。

六、

米國種

米國は其初め多く豚畜を輸入せしかども、精勵其改良に勉めて効果空しからず、今や他國に向つて輸出するに至れり。ポイランド、チャ



バークシャー

イナ、チエスタ、ホワイットの二品種を有名とす。其他ピクトリア、チャ

シヤ種等亦名あり。ポイランド、チャイナは米國種中尤も良好なる黒色種にして、支那種と米國在米種との雜種なり。頭は短小にして尖り、耳は小さく前に傾垂

チエスターホ  
ワトイ



せり、兩眼の間廣くして、まぶたのにく 脰肉能く發達し、頸の充實見事なるのみならず、肩は廣し、四肢短強にして皮膚はバラ色を呈し、毛は黒よりも灰色を呈す。四肢顔面、尾の先端に白毛あり、因て六點白と云ふ繁殖力左迄弱からず、氣候風土の變化に馴れ易く、性温和にして多食し早く肥満す。肉はハムとして頗る良好なり。本種は他種を改良するの用に適す。

チエスターホワイトは繁殖力非常に強き種なり。

之を要するに亞細亞種として支那豚(生肉製肉)、英國種中、エセックス、小形ヨークシャ(共に生肉用)、バークシャ、中形ヨークシャ(共に生肉製肉兼用)、大形ヨークシャ(製肉用)、米國種中、ポールランド、チャイナ、チエスターホワイト(共に生肉製肉兼用)は日本に好適し、就中バークシャと中形ヨークシャとは前途益々有望の種類なり。されば此兩種によりて日本豚を改良するを要す。

### 第三章 管理法

管理法

豚畜管理の要は之を強健に發育せしめ、又た四周の有害作用を除くに在り、故に管理者は十分の注意を以て之が務を執るべく、特に改良されたる豚は在來種に比して體質軟弱なるを以て、格段の管理を爲さざれば、わろくなる 退化せしむるにあり。

豚舎の構造

豚を飼養するには、しやがばん 舍飼、はんしやがばん 半舍飼、及び野飼の別あるも、我國にては一般に舍飼を利益ありとす。舍飼を行ふには是非とも豚舎を築くの要あるべし。一見豚は不潔なるが如く思惟せらるれども、其實清潔を好むは、せまき 狹隘なる畜舎内に於ても、せんじょ 寢所とたんじょ 脱尿所とを分つを見ても明なり、故に豚舎は常に清潔に保つべく、之を築造するには、適良の温度を保たしめ且つ空氣の流通光線の透射を好くし、寒風の侵入なく、且つ動物體にけがやう 傷症其他危険の虞なきやうにすべし。而して冬は暖に、夏は涼しく南向か或は東向を可とす。豚舎の屋根は瓦葺又は萱葺となし寒風の吹き來る方にたき 建木又は樹木、いけがき 生垣等を設け、用水の便利なる處を撰ばざるべからず。

今最も簡單なる豚舎の構造法は、間口奥行何れも六尺四方なる單舎にして、豚舎數により其長さは自由たるべし。されど肥育室の間口は四尺とすべし。前仕切の高さ二尺五寸、床と二寸離れしめて取外しに便ならしめ、其上に八寸を距て、取外し得べき装置にて横棒を嵌む。而して中仕切の高さは三尺乃至三尺五寸、前方の桁下は五尺、後方の桁下は三尺、床は八分板を敷きて前方に四十分の一の勾配を有せしめ、室の前面に小溝を設けて之を溜に通せしむ。

豚舎

豚舎の構造中、最も注意すべきものを床とす。床は廉價にて、耐久の性に富む堅牢なる物品を貴び、餘りに滑かならずして清潔を保ち得べきものたるべからず。床の最も清潔を保ち得べきは漆喰敲にして、煉瓦石、木、之れに次ぐ。而して木造以外の床は冬期寒威にふれ易きを以て多く褥藁を與ふるを要す。床は必らず前方に向つて四十分の一の勾配を附し、排泄物の流失に便ならしめ、之に通じて舎外に尿尿溜を設くるを要す。

養豚上の注意

舎飼の豚畜は時々舎外に出して運動せしめ、舎内を清潔に洗淨し、褥藁

を取代ふるは勿論、夏期は一層の注意を拂ひ畜體を清洗すること肝要なり。豚舎には單舎に對して複舎といふものあれども、こは我國には稀にして遙に單舎に及ばざるものなり。

豚舎を清潔にすると共に蠅の襲來を豫防するは、尤も肝要なる事なり。蠅は豚體を嘗め、甚しきに至つて之を剝皮せしめ、又種々の病源をも齎すことあるを以てなり。

豚をして管理者に馴れしむるは飼育法又要用の事に屬す。されば飼育者は親切丁寧に愛撫し時々豚體を梳拭すべし。かくすれば産兒の際大なる利益を得べし。

豚畜は多數を一室に飼養せば互に鬭爭するを以て、如恁際には石炭末を喰はしむべし。又鼻先にて土を掘り、柵壁を破壊する如き惡癖を有するものには、鼻端に金輪を嵌むるか、針金を鼻に挿し貫し、この惡癖を矯正すべし。然らざれば顔面長くなり、爲めに良豚の特質を失ふべし。

### 第四章 繁殖法

#### 第一節 選擇

繁殖法  
種類の選擇を行ひて良好のものを飼育せざれば利益を得る事難し。即ち肉食用のものには早熟種にして體軀小なるものを選び、製肉用としては大形のもの、即ち大種、英國種、又は其雜種を選ぶべし。要するに繁殖用の種豚は其種の特徴を具へ、身體健全なる遺傳力強きものならざるべからず。今左に蕃殖用牝牡に就て講述すべし。

#### 第二節 蕃殖用種の特徴

##### 牡親

特徴  
善良なる牡親の有すべき特徴は完全美偉なる體格を有し、其の牡親たる凛々しき威風を有せざるべからず。而も活潑にして顔面短廣、體軀の長幅相整ふと共に、肩、腰共に廣く、特に前體の十分發育せるものを可とす。而して前肢の間廣く、胸は伸張し、皮膚清潔にして腿の發達よく、生殖

器の完全なる情慾の十分なるものを選まざるべからず。

##### 牝親

牡の雄々しきと共に、牝は牝らしからざるべからず。即ち頭部軀幹は牡と同じきも、體は概して牡より長きを要す、これ體の長さものは乳房の數多きのみならず、優に受胎し得べければなり。且つ性柔和にして後體の發育十分なるものを選ばざるべからず。

繁殖用の豚種は成るべく其の一族中、缺點なき、且つ兄弟の多きものを選ぶべし。則ち兄弟の多きものは、産仔の數大なるべき良性を遺傳せるを以てなり。而して繁殖用のものは春季に生れたるものを選ぶべし、これ春季に出産せしものは、氣候温暖にして發生宜しく、且つ飼料潤澤なるが故に、すべて故障なき發育を遂げ居るを以てなり。但し初産のものは斷じて蕃殖用に供すべからず。熟練家ならば能く稚弱の際に其良否を判定し得べきも、這は頗る難事なり。而して前述の如く完全なる親豚を得る能はざる場合には、兩者の形質を斟酌して適當の配偶を定むる事肝要なり。

種豚の管理

第三節 種豚の管理

如何に良好の種豚を得たりとも、其管理法よろしからずば何等の效果なきものなり今左に管理の概略を述べし。

牡親

牡親は一室に一頭を限り、飼養舎は遠く隔離せしめて、猥りに他豚又は牝豚の見えざる様にせざるべからず。而して其室は必ず廣濶なるべく、決して狹隘なる室中に入れ、運動に不足を感せしむるが如き事なきやう注意し、時々運動場に放ちやる事肝要なり。牡豚は猥りに多くの牝豚に配するを禁じ、一期節間十二三頭の牝豚に配せしむるを極度とすべし。牡豚にして餘り肥滿せば、情慾減耗するのみならず、交尾巧ならずが故に、滋養分多きに過ぐる飼料を與へざるを良とす。

牝親

牝豚の管理亦頗る肝要の事に屬す。其法牡豚と大差なく、交尾を行はしむる時の外、牡豚と同居せしむべからず。交尾後受胎せる牝豚は之に靜

分娩

第四節 分娩

かなる住居を與へ、比較的養分少く容積大なる飼料を與へ、猥りに肥滿せしむべからず。然らざれば出産の際困難を感ずるのみならず、産兒も亦小なり、妊娠中は時々運動をとらしめ、物に驚かしむる事なく、専ら舍内を清潔にし、外氣の變動に感せしめざるやうにすべし。(妊娠中は冬は暖しめ、且つ馬鈴薯を與へんとせば其芽と青色の部分を除くべし。然らざればソラニンと稱する毒の爲め往々流産するの恐あり)

分娩の二三日前には乳房著しく腫起し、其當日に至れば啼き騒ぎて舍内に立ち、藁を喰ひて自ら産褥を造らんとするものゝ如し。是に於て管理者は直ちに切藁を與ふべく、其量多きよりも却つて少きを可とす。然らざれば兒豚は藁中に埋没して斃死するの恐あり。又産褥は暗く且靜ならしめ、管理者の外安りに他人の出入を禁ずべし。豚は至つて安産をなすものにして、愆くて一兒を生むや、五分乃至十五分を経て更に一兒を生み、凡そ一時間乃至二時間の後全く出産を終る。是に於て管理者は懇に其疲勞を勞り、飼料を與へて意氣を回復せしむべし。産後兩三日は



専ら淡泊なる飼料を與へ、初より濃厚なるものを與ふべからず。母豚は往々仔豚を食するを以て、管理者は之を防ぐべき手段を講せざるべからず。

一頭の母豚は普通七八頭の仔豚、多くとも十一二頭の仔豚を乳育するを以て、産兒多き場合には、之を同期に生産せし他の母豚に託して乳育せしむるを可とす。されど母豚は能く己が兒と他豚の仔とを區分し、他豚の仔は直ちに嚙殺すを以て、豚を養育せしむるに先づ、仔豚の體に養母豚の小便を撒布するか、又は褥藁にて身體を擦るべし。此れ沖繩地方に於ける良好の方法なりとす。

### 第五節 母仔豚の管理

#### 母仔豚の管理

生産せし仔豚には直ちに柔かなる褥藁を與へ、又は柔かなる藁を布ける籠の中に移して母豚と離し、哺乳せしむる時母豚の處に伴行きて之が壓殺踏殺を避けしむべく、又は二室の中央を、小格子にて劃し、又は小なる孔を設けて仔豚の避難室を設くべし。仔豚未だ小なる時は決して

#### 母豚食料

長き褥藁を與ふべからず、然らずんば仔豚は褥藁に足を奪はれて跪倒すべし。母豚の仔豚を嚙喰するを防ぐには仔豚の躰軀に石腦油を塗抹すれば之を免るを得べしと云ふ。

産後の母豚には妊娠中と同じく、煮たる瓜哇薯、甘藷其他の根菜類、糠、碎麥を與へ、仔兒の吸乳を増すに従ひ漸次其量を増し、決して酸敗したる飼料を與ふべからず、又飼料を激變せしめざる様に注意すべし。仔豚は生後二週日の間、暴風雨及び嚴寒酷暑の外、午前十時より午後三時迄、母豚と共に廣き運動場に出して適宜の運動を執らしめ、以て新鮮なる大氣を呼吸し、發育を熾ならしむると共に、筋骨を堅固にし、強健の性を養ふべし。

#### 仔豚食料

仔豚は生後二三週日を経ば食物を喰ひ始むるを以て、先づ燐酸石灰及び大麥を與ふる事肝要なり。是は骨の生成上及び齒の發育上頗る必要なり。後、瓜哇薯、甘藷、燕菁、蘿蔔又は葉菜類を細かに割みたるものを與ふべし。仔豚の食餌は母豚に食荒さるゝが故に宜敷避難所に置き、格子又は小孔をくゞりて、仔豚のみをして之を喰はしむべし。仔豚は往々下痢

を起すことあるを以て、木炭及チヨークを飼料に混じて與ふべし。仔豚は通常八週日を経て斷乳せしむ。而して斷乳前二週日前に去勢を行ふ。此際放牧を避くべし、然らざれば往々危害を醸すに至るべし。仔豚には絶えず大麥を與へ、四ヶ月をふれば普通の飼料を與ふべし。

### 第五章 成豚の管理

成豚管理法

生後四ヶ月を経れば成畜と見做すべし。成畜となれば食を撰む事少しと雖ど決して酸敗又は乾燥したるものを與ふべからず。飼料は殘滓粕瓜哇薯碎穀糠大麥を朝晝夕の三度に與へ、充分の運動を執らしむべし。蕃殖用牡豚は四五ヶ月を経て他の成畜と分離せしむべきも、牝豚なれば七ヶ月迄他の成畜と雜居せしむべし。成畜を雜居せしむるには、強者は強者、弱者は弱者と、二様に區分して各々一室に飼養するを要す。舎内は前述の如く之を清潔にするを勉むべし。成畜中粗暴なる牡豚を見れば直ちに之を牝豚の群に投じて共に牧場に放つべし、かくすれば自然に温順となるべし。斷乳後二三週間を経て遊牝期を來す。

豚の食物は常に温めて與ふべし。されど性愚鈍にして餘りに熱き時も、不知不識之を食し火傷を生ずることあるものなれば注意すべし。又冬季に至れば水も温めて與ふべし。

豚の食物は氣候の寒暖に因りて多少其趣を異にすべし。即ち冬季には體温を維持する爲めに夏よりは多くの炭水化物飼料を増すが如し。而して食慾減せば嗜好物たる食鹽及砂糖を加味すべし。凡て食事の際は至極丁寧に取り扱ひ、而も愉快に多食せしむるやうにし、尙ほ靜かに爲し、かりそめにも犬等を近づかしむべからず。

### 第六章 肥腴法

肥瘦法

生肉用と製品用との如何に關せず屠殺を行ふ以前には、肥腴法として、豚を肥滿せしむるを要す。肥腴を行ふには生後六ヶ月後に行ふべしと云ひ、又は生後二十ヶ月後に行ふべしと云ふものあるも、種類に因りて同一ならず。即ち小形種には生後六ヶ月乃至九ヶ月目に行ひ、大形のものには十八ヶ月乃至廿四ヶ月目に行ひ、中形種は其間に行ふべし。肥腴の期

限は豚種及び飼養管理の如何によりて同一ならざるも、普通十二週日、其短きは八週、長きは十八週とす。而して肥腴期間は之を三期に分つ事肝要なり。即ち第一期六週間、第二期三週間、第三期三週間。而して第一期は窒素飼料を用ひるが故に著しく體量を増加す。故に此期は成る可く低廉の飼料を用ひて肥腴せしむるに勉むべし。第二期は體量の増加少きも脂肪の増加著しく。第三期は大に肥滿して各機關に變調を來し種々の疾病を誘起するを以て格段の注意をなすべし。肥腴期中一週間毎に其體量を計るべし。

肥腴中は運動を止めて之を静居せしめ、他の豚舎に遠ざかれる室を撰ぶべし。肥腴室は攝氏十三度の温度を保たしめ、飼料は最も消化し易く調製して、而も叮嚀懇切を極め、日に四五回給與すべし。肥腴用として適切なる飼料は大麥、豌豆、玉蜀黍を粉碎し、甘藷、瓜哇薯を蒸し碎けるものと混和し、洋乳を得らるゝ便あらば之を混じ、食鹽を加へ糜狀となして之を與ふべし。而して夏季には時々雑草を與ふるを可とす。

去勢法

第七章 去勢術

去勢術とは繁殖の機能を失はしむる謂にして、牡畜に在りては睪丸を牝に在りては卵巢を截切するの術を云ふ。去勢術は豚畜の外、牛馬鶏にも行ふものなり。特に豚畜中肉用豚には之を行ふ事頗る肝要なり。去勢術を行ひたる豚畜は牡牝の別なく、既往の性狀一變して中性となり、性温順にして管理頗る容易なるべし。加之ならず能く肥臚し、肉味を増す等、經濟上頗る利あり。去勢術を行はんとするには、春期を第一とするも、仔豚には其期節を撰ぶの要なし。其方法を畧説すれば、前後右肢と前後左肢とを蹄甲上部を腿部にX形に縛し、此の縛したる二個を更に一括縛し、手術者後部より靜かに睪丸を握り皮膚を切開して睪丸を引き出し切り棄つるを以て足れりとす。而して一丸を去り終れば更に他の一丸を去り、然る後縛を釋き放ち遣るべし。

第八章 食器

世人は豚を見て不潔なるものとなし、舎内は云ふ迄もなく、其食器に至

食器具

りても頗る不潔を極め、之を清洗する如きは夢にだも行はざるもの多し、これ大に注意せざるべからず。斯く云は、世人は、琉球の豚は人尿を喰ふに非ずや」と反問せん、去れど琉球の豚は人尿を喰ふべきも其新鮮なるものゝみを撰び、苟も酸敗せる如き飼料は一も食せざるなり。されば豚に與ふべき飼料は必ず新鮮のものならざるべからず。且つ食品を清潔に洗滌する事肝要なり。而して從來本邦に用ひ居れる四角の食器は如何にするも其隅々に喰殘しの飼料附着殘留するを以て、文明的の養豚を行はんには、斷じて慙る食器を避け、底部を圓く造りて飼料を食ひ盡すに不便なからしむるやうにすべし。又た少くも一週間に一度清洗するを要す。食器は木造、石造よりもセメント又は鑄物をよろしとす。而して大飼養を行ふ場合には食物運搬用の桶を造るべし。

### 第九章 年中行事

一月、寒氣を防遏するに注意し、飲料も飼料と同じく之を煎て微温の状態として與へ、特に柔かなる褥藁を増し、前年の後半期に生れたる

養豚年中行事

仔豚と、交尾せしむる牝豚をして寒氣に當てざるやうにし、防風の垣を造るべし。

二月、三月、四月、前年十一月乃至十二月に交尾せしめたる牝仔は、この三ヶ月間に出産すべきを以て、牝豚の取扱を叮嚀にし、且つ仔豚の養育を怠るべからず。尙ほ五六月の候に交尾せしむべき總ての用意を成すべし。

五月、六月、交尾期なるを以て、それら、交尾せしむるの外、六月は入梅月なるを以て、養豚上大に嫌忌すべき濕氣を防ぎ、且つ不順の候に感せしめざるやう注意すべし。

七月、暑氣愈々迫り來るの頃なるを以て、舎内の清潔に意を注ぐこと肝要なり。

八月、九月、十月、五月乃至六月に交尾せし牝豚の仔を産むべき月なるを以て、凡ての準備をなし又十一月、十二月に交尾せしむべき、種々の用意をなすべく、且つ氣候の變り目なれば一層飼養に注意すべし。

十一月、十二月、交尾期に際するを以て、之を行はしめ、且つ寒氣を遮斷